
COBALT-SERIES
天冥の剣2
ハイスクール・オーラバスター
若木未生
集英社

〈伽羅王〉斎伽忍と鷹木文彦がそれぞれマークする女性キャスター工藤珈織はいったい何者なのか。そして文彦の正体も同じく知れない。六本木CBS内で諒を封じた文彦は四時間後、新宿で〈妖者〉刹司と相対していた。一方、希沙良の事件に触発された十九郎と術者たち…亮介、冴子、諒、希沙良…は再び戦いの中に舞い戻ろうとしている。しかし要となる忍はますます不可解な存在となり——。

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

天冥の剣2

若木未生

集英社

目次

天冥の剣2
地涯篇（承前）
第七章　孤空……10
第八章　招かれざるもの……69
第九章　光刃至現……112
第十章　闇へ……164
終章　砕星……219
『天冥の剣』第二回緊急対談……228



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

おとなしく内向的な性格だが、実はとてつもない力を秘めた〈術者〉側の切り札的存在。〈術者〉の中でただひとり忍の事情を知っており、彼の指令で隠密行動をとっている。

水沢　諒（みずさわりょう）



亮介の親友。戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ(?)の〈術者〉。広島へ戻れという忍の命令を無視し、彼の意図を探るためアルバイトに扮してCBSに出入りするが…。



里見十九郎（さとみじゅうきゅうろう）

沈着冷静な参謀型の〈術者〉で、希沙良のフォロー役。「ディアーナ」事件での忍のやり方に強い反発を覚えている。本家への侵入に失敗した希沙良を自らの手で裁くことに…。

和泉希沙良（いずみきさら）



諒に匹敵する攻撃力を持った〈術者〉のひとり。奔放な性格だが、従兄弟の十九郎以外にはなかなか心を許さない。冴子に会うため鎌倉の本家に忍び込もうとするが失敗し…。



七瀬冴子（ななせさえこ）

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。「ディアーナ」事件の標的となった彼女は、忍に鎌倉の本家での謹慎を命じられている。

神原亜衣（かんばらあい）



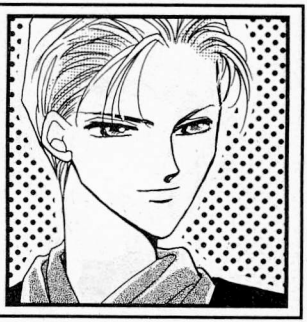
亮介の同級生でGF。〈術者〉ではないが、事情に通じており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。だんだん「普通の」生活から離れていく亮介の身を案じている。



工藤珈織（くどうかおる）

六本木のテレビ局・CBSの新人レポーター。斎伽忍にまつわる謎をつきとめようと彼を追いかけている。だが、忍の方でも彼女をマークしている理由は…。

鷹木文彦（たかぎふみひこ）



CBS重役の息子であることを利用して、珈織にまとわりつくカメラマン助手の青年。一見軽薄なプレイボーイ風だが、斎伽忍が伽羅王であることを知っており…。



剣司（せんし）

妖者三忌将のひとりで、「ディアーナ」事件の黒幕。亮介たちをあわやのところまで追い詰めたが、忍の前に苦い敗北を味わった。文彦と新宿のバーで密会し…。

遠野一真（とおのかずま）



斎伽の分家筋の後継者のひとり。幼少時に術力を失った元術者で、〈道者〉という伽羅王の親衛隊ともいうべき存在。希沙良が捕えられたのを、十九郎に伝えたのは…。



牙（きば）

亮介たちが軽井沢で出会った謎の男。実は〈伽羅王〉の側近〈使（つかい）〉である。姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。亮介とともに忍の計画を遂行している。

斎伽　忍（さいがしのぶ）



〈術者〉一族の若き総帥で、〈伽羅王〉が転生した現世ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の背景を把握しているのは彼だけらしい…。

イラスト／杜　真琴

天冥の剣 2

第七章　孤空

I

五月二十三日、金曜日、午後八時。

派手なダンスビートの大音響が、真上のスピーカーから遠慮なく降りそそいでいる。アメリカかぶれのショットバーの片隅で、鷹木文彦は少しだけ不機嫌にグラスをかたむけていた。

花の金曜日、そして場所は新宿だ。やかましい客には事欠かない。果てしないおしゃべりと笑い声と甲高いシンセサイザーのミックスは、しかし文彦にとって不快なものではない。

人間たちの発散する〈気〉に身を浸すのは、いつの時代も心地良いものだった。

愚かで、脆弱な、それでいて傲慢にこの地上を埋めつくす生命体。彼らを厭うことも卑しむこともたやすい。だがそんな彼らのあどけなさは、一種、かわいらしく思われもするのだ。それは決して同情ではなく——。

水槽を泳ぐ魚の群れを愛でる者はあっても、同情する者は数少なかろう。そういうことだ。

……自分だけだろうか？　こんな物好きな考え方をするのは。文彦はかすかに肩をすくめ

る。少なくとも、今、店内に入ってきたあの少年は意見を異にするにちがいない。

（また、ずいぶんと似合いの器を選んだものだ）

はやりのプリントシャツにジーンズという恰好で、いかにも高校生じみたその人物は足早にフロアを横切ってきた。

彼もまた、あからさまな不愉快を全身に漂わせていた。それは文彦の不機嫌とは、まったく内容のズレたものであったが。

「酒の匂いは嫌いだ！」

文彦と目を合わせるなり、そう吐き出す。

相手に反論を許さず、強引にきめつける言辞。

利かん気、という形容がなによりもあてはまる風貌をしている。

プライドの高い、なみはずれた実力を誇る妖火の将――。

妖者三忌将の一、その名を炎司という。

「そうかなあ？　俺は酒ぬきの人生なんてこれっぽっちも魅力を感じないけどなあーっ」

「そのふざけた喋り方をなんとかしろ！　癇にさわってたまらぬ！」

「生真面目も度を過ぎると、いつまでたっても大人になれないぜ。――坊や」

「おまえのように軽薄になるくらいなら、私は今のままで充分だ」

冷ややかに彼はそっぽを向く。文彦は口元をゆがめてわずかに笑った。

「若様におかれましては、お変わりなきようでたいへん結構だ。再会を祝してアルコールぬきのウーロン茶でも馳走したいが、如何かな？」

「からかうな」

顔をしかめながら、彼――〈炎将〉の呼び名をもつ若者は、音もたてない身のこなしで黒い座席におさまった。

その純真すぎる心とまっすぐな気性を九那妃に愛され、側近の女たちからもさんざん甘やかされ、結果的に形成された子供っぽい言動は、これから先も永久に変わりそうにない。いまさらそれについてどうこう言うつもりも、文彦にはなかった。――言って改善されるものなら、とうの昔にそうさせている。

この店でいちばん美人のウェイトレスを文彦は目ざとく呼びつけて、ウーロン茶をオーダーした。忙しいとこ本っ当にごめん君じゃなきゃダメだったんだ、どうしても君にお願いしたくてさ、えっなぜって君があんまり綺麗だからにきまってるだろ、やだなあマジだよ信じてくんなきゃ泣けちまうよ、君ってやっぱりバイトなんだ？　いつも何曜日に入ってんの？　えっそんなこと言われたら俺、通いつめちゃうよ……云々とグラマー美女相手に甘言を弄しまくる文彦を、ロック少年に扮した剣司はひどく白けた目で眺めていた。

「えー、お客さん、プロのカメラマンー？　ほんとにー？　すごーい若いのにー」

「別にどーってことないよ、カメラ野郎ってだけだったら業界にゴロゴロしてっからさ、そう

いうハシにもボーにもかかりませんって連中は当てにしちゃバカみるよ。まあ俺は一応テレビ関係のほうになら、いくらかコネあるからさ、もし君がその美貌を埋もらせとく気じゃなかったらいつでも連絡とってよ、二十四時間態勢でめんどーみちゃうよ、俺」
「やーん、なんだか話がうますぎー」
「ちょーっと、そこで信じてもらえなきゃキツいよ、一世一代の決心で言ってんのにさー。ほらこれ名刺、こっちオヤジのね。待ってっからさ、マジでー」
「えーっ、CBSー？　すごーい、ほんとにー、やだありがとー」
「その前にウーロン茶も待ってっからね」
「やーだ、もお、あたりまえじゃーん？」
無駄話をえんえん重ねたあげくにようやく美女がその場を去っていくと、つめていた息を深々と解放して剣司は文彦を睨みつけた。
「不謹慎ではないのか？」
「日々研鑽の成果だ。現代風のたしなみというやつさ、坊や」
文彦はにやりと笑う。剣司は舌打ちした。
「私が言いたいのは、おまえのやりよう全てについてのことだ」
「さて、俺が何か？」
「心当たりがありすぎるものと見える」

「皮肉がお上手になったようだ」
「かわすな！　――人間どもを殺しているのは貴様だろう」
鋭く切りこんだ剣司に、文彦は頷きはしなかった。だが口元に残したままの笑みが、はっきりと肯定を示していた。
「わざとだな……！」
剣司の面に怒りの色が走った。
「あの者たちを、わざと殺して、そのまま放置したのだな!?　表沙汰にならぬよう処理するすべはあったはずだ！　貴様のやりようは、九那妃様のご意志に背いている！」
「甘い!!」
すかさず、鞭をひるがえすような厳しい一声が返った。剣司が一瞬、言葉をつまらせた。
「それでは甘すぎる！　あの方の命をうのみにするばかりが忠誠の証ではあるまい、小僧!?　そのような道理すらわきまえぬから伽羅王にしてやられるのだ！　教条主義の塊が!!」
「――わ、私は……！」
「黙るがいい、申し開きの余地はない！」
かっとなって口をひらく相手をさえぎり、文彦は容赦なく続けた。これまでの彼とはまるきり別人と化したかに見える、劇的な変貌だった。
「いかにも人間どもの情報機関は利用させてもらった。マスコミというやつさ。だが奴らの硬

直した頭を見ろ、いくらこちらが事実を用意してやったところで、並べたてられるのはつくりごとばかりだ。なにが『吸血鬼』だ、笑わせやがる。とんでもない茶番さ！

一方、こうして貴様がこの私の面前までたどりつけたのはなぜだ？　連中の巨大な情報網を除いて、どこに足がかりがあった？　私の働きがなければ、貴様はいまだに闇を徘徊しているだろうよ。たいそうな口をきくのなら己が身をまず省みるのだな！」

「……」

きつく唇を噛みしめ、剋司はしばらく一言も発することができなかった。完膚なきまでにプライドを傷つけられたのだ。

文彦の言葉はすべて真実をついている。たしかに剋司は〈空の者〉伽羅王の術中にはまり、苦い敗北を味わっていた。それにより唯一の補佐を失い、九那妃のてがかりは得られず、ひとり街をさまよっていたのも事実だ。

しかしだからといって、文彦の放恣なふるまいを認めきれるものだろうか？

（命は、あくまでも命だ。それ以外のなにものでもない！）

妖の者たる以上、人を喰らうはやむなきことなれど、いたずらに人を殺めるは大罪なり――。

それが、妖者総帥として君臨した九那妃の、命であり望みであった。そしてまた、妖者は闇に棲み闇にひそむべきものであるとして、人間界の公事にふれることを禁じたのもやはり九那

妃であった。

彼女の命が完全に遵守されることは、残念ながら少なかった。本来、妖者とは無法を好むもの、統制をきらうものである。それら多種多様な妖者のうちから特にすぐれたもの八名を選び出し、将軍の職を与え、この国土全域に散っていた妖者すべてをひとつの命令系統の下にまとめたという事実だけで、九那妃の手腕は高く評価されるべきだろう。どれだけはっきりとした体制をしいたところで、末端のはぐれものがときおり悪心に走ることまでは止められない。

仕方がないのだ、それは。

だが……。

(愚昧な輩であればともかく……!)

己は九那妃のさだめた八将の——いや、今となっては三将の——ひとりだ、という自負が剣司にはある。だからこそこれまでの永い時も、自らを律しつづけ、命を守ってきた。

なにもかも、偉大なる女神のために、だ。

「では、どういうことなのか聞かせてもらわねばなるまいな。おまえの働きとやらを」

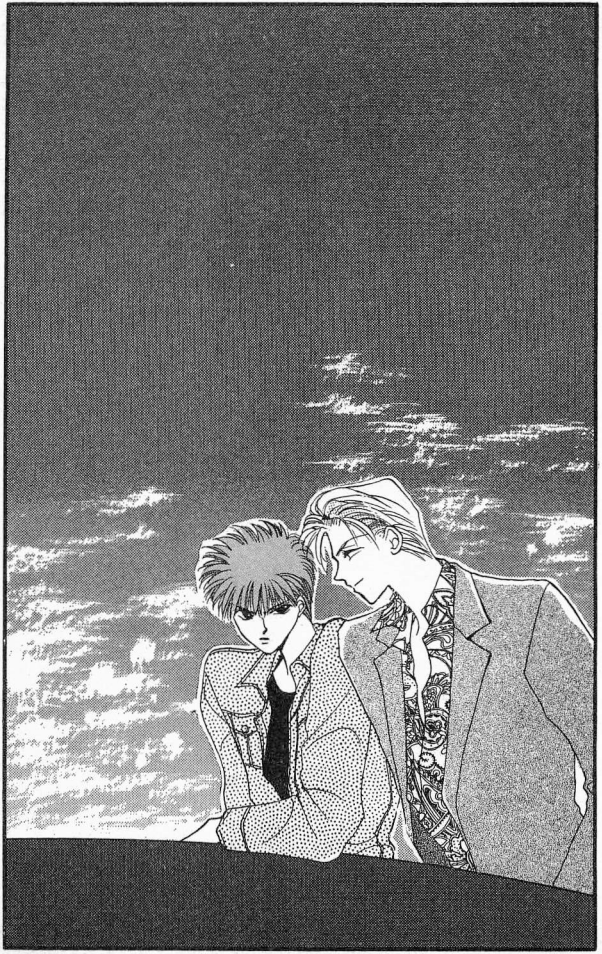
低く、平静を装いながら、剣司が問いかけた。

「もっともらしい言いようではあったが、よもやおまえが、路頭に迷う私を拾いあげるためにあのような『吸血鬼』騒ぎを仕組んだとはとても思えぬ」

自虐的な台詞は、ややこの若者らしくなかった。文彦はちらりと彼を見やり、ポケットから

煙草をひっぱりだした。微妙な間が生じた。
「私が伽羅王にしてやられたのは、事実だ。いまさら否定も弁解もせぬ」
文彦の声を待たず、剋司がつづけた。
「ために受けた被害も些少なものではなかった。――しかし、こちらとてただ敗れたわけではない。伽羅王の布陣はすでに読みきれている……」
「……」
「おまえの狙う何かが、我ら互いにとって有益なものであればよいのだがな」
「……それは牽制ってやつだな？」
ふっと気楽な口調に戻って、文彦が呟いた。
「伽羅王相手に――いや、はっきり言おう、斎伽忍を相手に雪辱戦を挑むつもり、か」
「他にどのような道が……待て、斎伽？」
斎伽忍、という固有名詞がすんなり文彦の口から語られたことが、剋司の心にひっかかったようだった。眉をひそめながら尋ねる。
「おまえはその情報、どこから――」
「マスコミさ」
文彦はキャビンマイルドに火を点ける。
「見つけてみせろとばかりに、堂々と斉伽の名を一般公開してたわけさ。よくあの一族が黙っ

て許したもんだと、そいつを見た瞬間、俺は感心させられたがね」
「影武者ではないのか？」
「そこまでは保証できないね」
偽者のはずがない。本物だ……あれは。
文彦はそう確信しているが、口には出さない。
こちらの思惑をすべて明かしてやるほど、寛容にはなれない。馴れ合うような間柄ではない。
そもそも子供のフォローは疲れる。
子供というものは、常に自分の都合しか考えていないからだ。勝手な独走で、計画に支障を出されては困る。
と、なると。
「しかし、おまえが言うところの『伽羅王の布陣』はすでに伽羅王自らの手によって解体済みだろう」
さらりと、文彦がそんなことを言った。唖然として剣司が両の目を見開いた。
「なんだと!?」
「知らなかったのか？　どうやらなにか方針の不一致があったようだぜ。奴は今、ほとんど身ひとつで動いてる。なみいる空者術者のおべんちゃら連中で自分のまわりに人垣をつくってい



た昔とは、大違いだ」

「……」

まさか、と呟いたきり、剡司はしばらく沈黙した。

「信じられぬ……」

「なにかありそうだな」

文彦が問う。

伽羅王の戦力が弱体化していることを、素直に受けいれられない理由などあるのか。

もっとも、空者・伽羅王にとって、自身よりはるかに力の劣る術者数名を手放したところで、さしたる痛手にならぬことは確かだったが。

「……いや……」

ぽつりと剡司が答えた。

「私怨だ」

II

私怨、という二文字を口にしたきり、〈炎将〉剋司はなにも事情を語らなかった。文彦もあえて語らせようとはしなかった。

どのような経緯があってかは知れないが、剋司が〈空の者〉伽羅王ひとりにとどまらず彼の配下たる術者たちにも等しく敵意を抱いていることは確かだった。

そんな感情を下手に正当化することなく、私怨と表現できるようになったあたり、この若者も一種の成長をとげているのかもしれなかった。それはそれで結構なことだったが、文彦は冷静に話を先へと進めた。

「要するに、伽羅王とその一党には例外なく意趣返ししなけりゃ気がすまないってわけらしいが」

「だが、それは私のこだわりにすぎまい」

剋司が答える。

「奴らにどのような動きがあろうと、つまるところ最大の敵は伽羅王でしかありえないのだ。まず斃すべきは、伽羅王だ。他の術者どもへの恨みは、いずれ時をかけ晴らせばよい」

「なるほど……」

文彦は口元で笑った。

「聞いて安堵した。俺もまったくの同意見だ。おまえの目的を邪魔する気は、俺にはさらさらない。自由にやってくれ」

「よくわからないな」

あまりにあっさりした文彦の態度に、かえって剣司は不審の表情をのぞかせた。

「私はまだ、おまえの働きの意味を聞いていない。私の邪魔はしないというが、ではおまえは今、なにを目的として動いているのだ?」

「我々の目的など、いまさら言うにおよばないだろう。九那妃様をお迎えし、伽羅王に勝利する、それだけだ。他になにがある?」

「……はぐらかすな! そこまで愚かではないぞ、私は!」

九那妃の復活。そのために弄した策であることはわかりきっている。

問題は、策そのものの内容だ。いかにして、という部分だ。

「だいたいおまえは常にそうだ! おのれひとりで事を運び、我らに一言のことわりもない。私の手の内は明かしたつもりだ、それに対してずいぶんと不実な報いようではないのか!?」

「貴重な情報なら分け与えてやったじゃないか、気がつかなかったのか？　坊や」
さあ怒れと言わんばかりの非道な台詞を平気で吐いて、文彦は灰皿に煙草をねじこんだ。
「それと、ひとつだけ忠告しておくが、伽羅王本人に照準をさだめるとなると小細工はきかなくなるぜ。おつきの雑魚どもを右往左往させることはできても、あの〝帝王〟相手にケンカふっかけて勝つってのは、坊やには荷がかちすぎるんじゃないのかい。どうしても奴とやりたければ、まずは俺の邪魔にならないようおとなしくしているべきだ。ご期待に背く展開にはならないはずなんでね」
「……！」
なにか怒鳴りかけて、それすらも馬鹿馬鹿しいと剋司は悟ったようだった。
この男とは言葉が通じない。自由にやれと言った同じ口で、邪魔をするな、おとなしくしていろ、と圧力をかけてくるのだから。
「話にならぬわ……」
舌打ちとともに、立ちあがる。来たときと同様、音もたてなかった。
「九那妃様さえいらっしゃれば、貴様とは声も交わさぬものを！」
「同感だ」
深い心情をこめて文彦は呟いたのだが、剋司には伝わらなかった。くるりと彼は文彦に背を向け、が、ふと肩ごしに見返った。

「ひとつだけ問うておく。〈幻将〉の行方はつかんであるのか」
「半ば、というところだ」
あいまいな応答があった。剡司はわずかに眉をひそめた。
「謎ときに興味はない。勝手にするがいい。だが、あの女だけは私に近づけるな！　考えるだに虫酸が走るっ!!」
「ご要望、確かに承っておくさ」
慇懃無礼のかぎりをつくして、文彦はにやりと笑ってみせた。相手にするそぶりも見せず、剡司は足早に店を出ていった。
――不意に、凄じい音が文彦の耳にとびこんできた。真上のスピーカーから放たれるヒットナンバーの響きだ。いかなる力の作用によってか、会話の間中、あらゆる騒音は途絶えていたのだった。

文彦がずっと不機嫌をひきずっていたのには、ふたつほど原因があった。
ひとつめは、六本木CBS内で、伽羅王の手のものと思われる術者を生け捕りにした件である。
なにしろ急いでいたのだ、あの時は。工藤珈織を追わねばならないところに余計な用がころ

がりこみ、しかも相手が術者としてはなかなか強力な光剣使いだったのが、こちらの計画を狂わせた。

本気で一戦交えれば手こずるまでもないことは明白だったが、あそこで全妖力を解放していたら、映像資料室はもののみごとに吹きとんでいただろう。それは伽羅王に大声で呼びかけるも同じだった。さらにその余波はおそらく珈織の元へも及ぶだろう。これまでの自分の尽力はまったくの無駄となる。

――刺激を与えすぎてはならない。与えなさすぎてもいけない。厄介な時期だ。とにかく神経をつかう。なにもかもを台なしにする気は、文彦にはなかった。

また、別の欲もあった。せっかくの獲物、一息に消し去っては芸がない。情報提供者はぞんぶんに活用してから捨てるべきだった。なんなら刺客に作り変えて伽羅王の陣営へ送りかえしてもよかったのだ。

……そういった思惑の数々と急を要する事情により、最もてっとりばやい手段を選んで獲物を足止めしたのが、今から四時間ほど前のこと。

すなわち、適度な催眠暗示と、完璧な結界。おまけに急速冷凍のサービスつきだ。いかなる術者であろうと、これらを破り脱出することはできまい。

が、しかし――。

今から二時間前、新宿から六本木CBSへふたたび舞い戻った文彦を待っていたのは、空になった部屋とあっさり無効化した結界だけ、だった。

あの光剣使いが独力でそれをなしとげたとは、とても考えられない。何者かの介入が、絶対にあったのだ。

それだけではなかった。話はわずかにさかのぼる。遅れて新宿にたどりつき、やっと接触に成功した文彦に、工藤珈織は意外なことを告げたのだった。

『取材OKされちゃったわ』

珈織は茫然としているように見えた。あたりまえだ、彼女でなくても不意をつかれる。ずっと姿を見え隠れさせながら決して表舞台に出てこようとはしなかった取材対象――斎伽忍が、いきなり一歩も二歩も踏み出してきたのだから。

よりによって、こちらの鼻先をかすめるようなタイミングで。

不機嫌にならざるをえない原因のふたつめは、その一件だった。思わぬ隙につけこまれたことが口惜しさに輪をかけるのだ。

まさか伽羅王は、その一瞬の隙をつくらせるために、あの光剣使いを自分の目前へ放りこんできたのか？　――囮として。

騒々しいおしゃべりと不健康な香りが、文彦をとりまいた。気がつけば、剝司が店を立ち去ってから、すでにずいぶんと時間が経過している。氷の溶けかけたグラスを空にして、文彦はもう一度、軽く笑った。

悪くない、と思っていたのだ。

こんな展開も、決して悪くはない。

だしぬかれて笑えるほど状況が甘いわけではない。が、それでも——。

伽羅王が自ら動いてくれるとなると。

（いよいよ、らしくなってきたじゃないか）

九百年の歳月をへて。

「真っ向勝負も、辞さない、かな……」

望ましいとは、とても言えない予測。しかしその実現を自分はひそかに待っていたのではないか。

その時を、ずっと。

＊　＊　＊

店のウェイトレスが、いつまでたっても運ばれずにいるウーロン茶に気づいたのは、それか

ら五分後のことだった。オーダーされた席は、とうの昔に空になっていた。
それにしても妙だった。あんなところにテーブルがあったかしら、と彼女は考えた。もちろん初めからテーブルはそこにあり、急に消えてしまうはずはないのだ。
では誰がそこにいたのだろう。いつ出ていったのだろう。
水割りのグラスと灰皿だけが、卓上に残されていた。

III

……そう、あれはじりじりと暑い真夏の日の幻。
硬直した熱気にがんじがらめに全身を縛られて、べたついた陽炎が息苦しくて。
よどんだきり動かない日常に耳鳴りがやまなかった。蟬の声のように。いつまでも、いつまでも、苛立つことすら許さぬしつこさで。
七月だった。
にぶく重く積みかさなった入道雲のかたちを、なぜかはっきりと憶えている。

あの日の朝、家で飼っていた犬が死んだ。
『お兄ちゃん』
庭の片隅、古ぼけた犬小屋の前で、彩がひっそり泣いていた。
『お兄ちゃん、クロが……起きないの』
動かなくなった老犬を制服のスカートに抱きよせて、しゃがんだきり振り向かずに泣いていた。
寿命だろう、と漠然と思いはした。
いいかげん長いつきあいだから、自分がガキのころから家族の一員として一緒に暮らしてきた犬だから、急にいなくなったと言われても実感などわかない。そんな風に、心中で呟きはした。——けれど。
『ゆうべ、こいつ、ごはん食べなかった』
彩のとなりにぽつんと立って、怒ったような顔でそう言ったのは誠だった。
『夜んなっても、何回か変な鳴き方、してた』
『なんでおまえ、それ黙って——』
尋ねた声は、ひどくぼんやりしていたにちがいない。
『言ったけど！』
とたんに、みるみる誠の目に涙がたまった。

『ゆうべ、言ったけど、そんなん聞いてなんかっ……！』

『……』

それ以上聞く必要はなかった。彩も背中をこわばらせて黙りこくっていた。

毎晩毎晩、やかましいナイター中継をバックに、飽きることなく夫婦間の戦争はつづけられていた。父は母のだらしなさと無責任をなじり、母は父の無能と嘘をあばき、そうして傷つけあう自分たちの姿がいかに醜いものであるか気づきもせずに、ただ互いへの不満を吐き出しエゴをぶつけていたのだ。

そんな泥仕合いのさなか、小学生の誠がなにを言ったとしても無駄だ。気晴らしに数回殴られるくらいのことならあったかもしれない。実の子供たちさえ目に入っていないあの二人に、飼い犬の健康など気遣う余裕は、あるはずがなかった。

『だったら兄ちゃんに相談すりゃいいだろう』

歯切れの悪い一言。

本当に？　本当にそうやって責任がとれただろうか、自分には？

言うだけなら簡単でも。

『兄ちゃん勉強あるから邪魔しちゃいけないって、姉ちゃんが……』

うつむいて誠が言った。

（勉強があるから）

『あたしたちがもっと頑張ればよかった。母さんたち聞いてくれなくても、自分たちで、お医者さんでもどこでも行けばよかったのに』

彩が呟く。

それは後悔というより、今後への決心として聞こえる言葉だった。

『もう、いやだ、こんなの』

……もういやだ。

こんな重い気持ち、要らない。

『あんたたち、なにやってんの、学校行かないつもり!?』

二階のベランダから割りこんできたのは、母の声。何も知らず、無神経に。寝穢い——せめて子供に朝食を用意することくらいできないのか——

『お兄ちゃん、先に学校行って。あたしと誠、お墓つくってから行くから』

行き場のない憤りを、彩の呼びかけが抑えた。

学校へは行かなければならない。今日も試験がある。内申にかかわる。受験には、成功しなければならない。自由を手にして、遠くへ行くために——この家から、妹と弟をつれだすために。

自分がもっと強く、大人で、今すぐにでもふたりを救いだす力をもっていたなら。

『……わかった、行くよ』

仮定など、希望など何の役にもたたなかった。そして自分はその時、彩の言うとおり、ふたりを残して立ち去ることをすんなり選びとったのだ。迷いもせずに。

目もくらむほど、涙も乾くほど、暑くてたまらなかった。なにもかも忘れてしまえそうだった。たった今すべて投げだして消えたら、いったい誰がこの自分を捜すだろう?

(もういやだ)

灼けつくアスファルト。

素知らぬ顔で追いこしてゆく自転車。

誰もが同じ影に見えて。あてもなく叫びだしそうになる。

(こんなのはもう、いやだ)

逃げてしまいたかった。どこへでもいい。

何よりも、この麻痺しきった自分自身から。

(誰か——……)

(誰か)

ふと、視線を意識したのはその直後だった。

強く、まっすぐに、容赦なくつらぬく視線の主を。

自分が歩む道の、ちょうど正面、ゆらぐ景色の内にひとり彼の姿だけが鮮明だった。

漆黒の髪。炎天下、汗も見せずに。

彼は、待っていた。
まさに心からの呼びかけに応えるタイミングで、彼は確かに自分のことを待っていたのだ。
あの夏、斎伽忍はまだ十八歳……どこか少年めいた表情のかけらを、瞳の奥に残していた。

＊　　＊　　＊

（……暑い）
戻りかけた意識のなかで真っ先に感じたのは、そのことだった。
（暑い）
炙られている――。
灼熱の太陽に。
額から、こめかみから流れこむ熱は全身の末端まで行きわたり、どこへも逃げてゆかなかった。
この熱が、遠い夏の幻を見せる。
二度とふりむきたくない。それでいてなぜか愛しい過去の記憶を。
「生きのびたければ、口をひらくな」
不意に、すぐ近くから静かな声がそう語りかけた。

「自分の生命が惜しくないなら、それでもかまわないが」

「……!?」

諒はぼんやりと目を見開いていた。瞳にうつる相手が誰なのか、すぐにはわからなかった。視界はなぜかひどく暗かった。暗黒が周囲を包んでいた。どろっとした感じの、いやな闇だ。そのなかで、白く、ほのかな光をまとわせて、すぐ傍らに座している人影が見えた。その人物の発する微光だけが、清浄な、澄みきった力を有していた。

——彼、だ。

まちがいなかった。その光を、その波動を、諒はとてもよく知っていた。そしてそのオーラの持ち主を。

昔から。こんなことになる、もっと以前から。

(こんなことに……)

とりとめのない思考。自分の心が呟く言葉の意味さえ、ちりぢりに千切れて、消えてゆく。けれど……。

——ああ、もう大丈夫だ。

わけもなくそんな確信が胸を占めた。なぜなのかはわからない。もしかしたら、彼のオーラが伝えてきたメッセージなのかもしれなかった。

——もう大丈夫。

「忍……？」

「声をたてるな」

普段よりはやや低く、囁きよりはわずかに強い声で、斎伽忍がそう告げた。にぶい闇の世界のなかに、彼の姿以外のものは見えなかった。

諒はまばたきした。上下左右まるで定まらない漆黒の海に、どうやら自分は浮遊しているようだった。

夢だろうか？　これは。

しかしこの苦しいほどの熱さは、本物としか思えなかった。

動くことはまったくできない。金縛りのようだ。横たえられたまま、なすすべもなく。……四肢が、凍りついてしまっている。

そう、凍っているのだ。気づいて、諒は愕然とした。比喩ではなかった。全身が麻痺しているのは、極度の冷気におかされたせいらしい。

ということは、自分は見事に敗れたわけだ……。

ではなぜ、斎伽忍が……。

こめかみに感じるのは、斎伽忍の白い指先だった。右の掌を諒の額に置き、じっとその指先を見おろしながら、忍は無言を通していた。

身体のすみずみへ、少しずつ熱が浸透してゆく。灼き殺されるのではないかとさえ思えた高

熱の波動は、徐々に、ゆるやかに厳しさをやわらげていった。

「忍、おまえ、いったい……」

「まだだよ。もう少しくらい待てないのか？」

問いかけた言葉をぴしゃりと叩きつぶして、忍が言い放つ。

「待てないから言ってんじゃ……あ痛っ！」

ピシッ、と目の前でオーラが火花を散らした。爪で鼻先をはじかれたようなショックが来る。

「聞きわけのない子だな」

忍の声が追いうちで降ってきた。……今のは絶対に、わざとだ。

「あんたねえ……」

恨めしく呟きつつも、諒は黙る。確かに、喋ろうとしても喉はガラガラでまともな声が出てこない。こんなバッドコンディションで応戦して勝てる相手では初めからない。

重く苦しかった全身に、活力の火が注ぎこまれてくるのがわかる。ゆっくりとだが、確実に。こわばった肩が、背中が、腕が、心地よい痛みをともなってほぐれてゆく。まさに、文字どおり、斎伽忍はこの身体を解凍しているのだった。

どうして、こうもぶざまな負け方をしたのだったか……。

諒は記憶を手さぐりしてみた。あたたかいオーラに包まれて、なにか考えていないと眠りこ

んでしまいかねなかったのだ。

……そうだ、そもそも、鷹木文彦が……。

（え？）

鷹木文彦。

その名前ひとつ出てきた時点で、回想がぴたりと止まってしまった。

少なからず、それは衝撃だった。相手の名前から先、なにも肝心なことを思い出さない。そんな馬鹿な。大負けに負けたことしか憶えていないなんて。みっともなさすぎる。

「……おい。突発性記憶喪失に陥ったなんて言ったら同情してくれたりする？」

「おまえの場合、それは突発どころか常時継続している気がするけれどね……僕には」

口をきいても、今度は叱られなかった。その代わり――『代わり』などと呼べる甘いものかどうかは謎だったが――思いきり冷ややかな指摘が、忍からは返ってきた。

「なにしろ『雇用主』の厳密な『命令』さえきれいに忘れはてる才能をお持ちのようだからね」

「……」

そーじゃなくて、と言葉をはさむ余地などあるはずがなかった。もとより、弁解のできた立場ではない。

「……一応これでも、あんたには見えない範囲で動いてたつもりなんですけどね、俺も。なに

しろ斎伽さんてば忙しく動きまわってて、うちの実家に連絡の一本をよこす暇もなかったようだから」

「見えていないつもりの独断専行でこちらの予定をかきまわしておいて、だから僕には迷惑がかかっていないと、そう言いたいわけかな。まさかとは思うが」

ぼそぼそと返したジャブは、超高速メガトン級の左ストレートであっけなく潰えてしまった。がくりと諒は脱力した。

「どーしてそう、一っ言も反論できん所まで人を追い落とすんだろう……」

「申し訳ないけれど、それが僕の趣味でね」

まったく申し訳ないそぶりなど見せず、忍は微笑してみせた。——あざやかに。

彼の手が、額から離れる。『解凍』は完了したようだった。まだ身体の内には火照りがしつこく残っている。諒は起きあがろうとして、忍に止められた。

「貧血をおこして倒れたいのか？　もう少し、おとなしくしていたほうがいい」

「すみませんねえ、おとなしくないわ、落ち着きはないわ、聞きわけはないわ、はた迷惑なお子様で」

「そのリストに『分別がない』と『約束を守らない』と『感謝の心を知らない』を加えてくれないか」

忍の舌鋒には、ますます歯止めがかからなくなっている。諒がめまいを覚えたのは、決して



貧血のせいではないはずだ。

それにしても、いったい、この場所は何なのだろう。身動きできるようになって改めて周りを見渡してみても、どこまでも暗黒につつまれた虚空しかない。こうして自分が寝転がっていられるのも、隣に斎伽忍が座っていられるのも、どのような支えがあってのことなのか見当がつかなかった。

無重力？　少し、違うような気もする。

「実際、感心したよ……おまえたちには」

かたちのいい指を膝の上で組みあわせ、忍はさらに呟く。

「これほど計画を狂わされるとは思わなかった」

「……」

その『計画』が問題なのだ。

やはり何の考えもなく斎伽忍が戦力を縮小するわけはなかった。諒はそれを確かめてわずかに安堵する。

だが忍が言う『狂い』とは何なのか……。

「……おまえたちってのは？」

「いずれわかるさ」

忍はそんな答えしか返さなかった。崎谷亮介のことだろうか。諒はとっさにそう疑った。

ほんの数時間前に鎌倉の『本家』でおきた事件を、この時、諒はまだ知らずにいた。そして同じ頃に斎伽忍が、亮介に『弊害』について語ったという事実も。それらのことを知っていれば、諒の内にも、別の解釈が成り立っていたかもしれなかった。――しかしそれはあくまで仮定の話だ。

「じゃあ計画ってのは？」

「おまえが気にするような計画は、なにひとつないよ。安心してもらって結構だ」

「……おまえな……」

嘘をつけ嘘を、の世界である。しれっとしてよく言えたものだ。諒は唸り声をあげた。

「……俺に動かれたくないんだったら、俺を野放しになんかしないで、檻でもなんでも被せときゃよかっただろうが」

ややグレた気分で吐いた台詞に、忍がちらりと一瞥を落とした。

不思議なことに、針の筵プラス剣山で武装した皮肉の嵐は襲いかかってこなかった。

「いや……。檻が必要なのはおまえではなく、僕のほうだったんだよ」

「……え？」

「そう……。初めから、そうすればよかったのかもしれないな……」

忍はひどく本気で言っているように見えた。意味がつかめない。諒が口をひらきかけたのを遮って、忍は言い加えた。

「けれど、それはもう、できないのさ」
「……」
あまりにも淡々とした言葉だった。
そして、いたずらっぽく語調を変え、あとに続ける。
「だから自分の命令違反と力不足と認識の甘さを棚にあげて僕に責任転嫁しないでほしいと言っているんだよ、諒。僕はおまえを『野放し』にした覚えはまったくないんでね」
「結局そーゆーオチをつけるのかっ!!」
拳を握りしめて諒は怒鳴った。話をそらすだけそらしておいて、最後にはこっちにクギをさしてくるのだからたちが悪い。
「すると不肖の部下をもったおのれの責任は、どうなるんだ、えっ!?」
「……それは一度も考えてみたことがないな」
「仮にも人の上に立つ人間が、んないーかげんでどうするっ!? そもそも忍には、そのあたりの自覚が足りないと俺は切実に思うぞっ！」
「心外だな」
妙に悲しげな眼差しが、諒の頭から足元までを通過する。
「仮にも生命の恩人に、そんな暴言を吐いていいのかい」
「頼んどらんわ、俺は、一度もっ!!」

思わず諒はフルボリュームで力説してしまう。なにもそこまで傷ついた演技を見せずともよかろうが。

「すると僕は本人の意志に反して面倒な結界を破っておまえを救い出し、さらにお節介にも貴重な力を注いで凍気を溶かしてやったというわけかな」

わざわざ右手の指を折りながらその尽力をひとつずつ数えあげ、そして忍はかすかなため息をついた。

「その報いが今の一言か」

「ざーとらしく下を向くなっ!!」

「なんならもう一度あの結界の内側に戻してやってもいいんだが」

「ちょおっと待たんかっ!!」

「それともおまえだけ、この時空に残していこうか？　別に僕は困らないんだよ、それでも」

「……もしもし？」

物騒な台詞を嬉しそうに吐かないでほしい。諒はげんなりした。

まちがいなく、この相手は恐ろしく性格が悪く意地が悪く始末におえないほど口が悪い、おまけに水沢諒という人間を掌の上で遊ばせるのが大好きな薄情者――斎伽忍本人、だった。

それだけはどう考えても確かだ。

（なんだ……）

確か、なのだ。

（忍じゃないか、ちゃんと）

なんて自然に、邪気もなく、簡単にそう信じられることだろう？

「反省は足りたようだな」

「えええええ、どぉぉせワタシが悪いんですよ、この世のなにもかもが俺のせいなんですよ。わかってるのよ、悲しくて涙が出ちゃうわ、コートの中では平気でも、だって男の子だもん、諒ちゃん泣いちゃえーっ」

「……もしかして、僕に慰めてほしいのか？」

「誰がじゃっ!!　やーめーろーっ、考えただけで血が凍りつくわっ!!」

「なら無駄口はそれで終わりだ。時間が無限に許されているわけじゃない」

あっさりと言って、忍は諒に片手をさしのべた。

「今のうちに、暗示を解いておこう。『突発性』の記憶喪失のほうを」

「暗示？」

「奴の常套手段だ」

まるで昔から知っている相手を語るような言い方だった。

（奴……？）

「しばらく僕の感覚と同調することになる。何が見えても目をまわさないように、気をつけて

いるんだな」
「おい、それって……」
どういうことなんだ、と尋ねる暇はなかった。さしだされた手をなにげなく取ったとたん、それは怒濤のごとく諒の内側へとなだれこんできた。
視界が激変した。

満天の星が、そこには広がっていた。
べたついた不快な闇は一瞬のうちに拭いさられていた。四方すべてが燦然とした輝きの大海だった。無限の奥行きと底知れぬ神意が、そこにはあった。
それはあざやかな銀河だった。
大宇宙。
その只中に、彼らはふたりきりで存在していた。縋るあてなどどこにもない、重力から切りはなされた空間に。
おだやかに星々は点滅をくりかえし、銀河宇宙は鼓動しているかに見えた。生命の証であるようにも思えた。あるはずもない風を肌に感じる。やわらかい、太古の風。原始の波。
身を縛るものは何もない。

星空はあらゆる物質を呑みこみ、あらゆる意思をうけいれ、そうして永遠に変わらぬ静謐を守りつづけていた。

美しく、なお厳かな光景だった。

深い畏れと寂寥の念が、一気に胸へ押しよせてくる。恐怖、ではないのだ。もっと孤独な感情だ。あまりにも天は果てしなく、あまりにもこの身は小さい。還るべき大地はどこにも見出せない。

その認識はせつなく、揺るぎない。

どうしようもない——と。

偉大な全宇宙を前にすれば、ちっぽけな自分の存在ひとつ、なんら意味をもつことがない。

絶対的な、無力。

自意識も驕りもプライドも、役にたたない。

あるのは自分だけだ。装飾を剝ぎとった生身ひとつだけだ。

自分、ひとり、だけだ。

「見えるか？」

突然、すぐ近くから忍の声が聞こえた。

「……よく見える」

呟くように、諒は答える。

不安定な幻想宇宙のなか、いつの間にか、斎伽忍と肩をならべて諒は立っていた。彼の力によって現実から隔絶され、夢幻の境にひきこまれているのだという自覚だけはあった。

（感覚の同調……？）

それはつまり、斎伽忍の感覚がとらえるものを、斎伽忍の瞳にうつるものを共有するということなのか……。

彼に見える世界を。

「いつも、こんなものを」

口をひらくと、見返った忍と目が合った。われ知らず、諒は呼吸を止めていた。

ぞっとするほど、静かな双眸がそこにはあった。

他人には有しえない、聖性を孕んだ不思議な光が——見える。

天空の色に染まり、斎伽忍の瞳は淡い藍色に透けていた。いや……宇宙より、銀河より、その色あいをあらわすのにふさわしいものがある。

闇に浮かぶ水の惑星。

（地球）

なつかしい青……だ。

「おまえには、いつも……見えるのか？」

こんな情景が。

こんなに広く、限りなく、悲しい宇宙が。

「まさか……。彼らは気まぐれに現れる……僕が狂いそうになるころを見計らってね」

忍は謎めいた答え方をする。

「本当は、僕でなくても見えるはずなんだ」

彼ら……？

忍は片腕を動かし、前方を示してみせた。

「今、おまえに見えているあの星々のさらに彼方――十万億土の向こう側に、〈天〉がある。それが浄土だ。彼らはそこから来る」

「……浄土……？」

何について、忍は語っているのだろう……？

彼の言葉をさえぎり意味を問いただす余地はなかった。

圧倒されていたのかもしれない。あまりに壮大な、想像を絶する銀光の大群に。独りきりで放りだされたら正気を失いそうな、そんな実感に。

天？

浄土……極楽？　涅槃？

「それがおまえの世界か」

無意識に呟いている。〈空の者〉を、また『天人』と呼ぶ慣習があることを諒は知っていた。

あの凝りかたまった斎伽本家の者たちが好んでつかう別名だ。
「いいや」
だが忍はさらりと髪を揺らし、それを否定した。
「あそこはとても生身の人間が赴ける世界ではない。たとえ僕であっても。われわれが属するのはあくまでも娑婆世界、穢土……けがれに満ちた人間世界だ。それが僕の世界でもある」
「穢土……」
天。それは空者・伽羅王であっても踏みこめぬ聖界。
そして人間世界――現世。
すべてに耐えぬき、のりこえることを定められた世界。
「穢土、娑婆世界のことを、忍土とも呼ぶんだよ」
忍の声がそう告げる。
「だから僕は、僕自身にその名を課すことにした……今から十九年前に」
唇を結び、黙して空を見据えた彼の横顔は、微笑しているようでもあり思索しているようにもとれた。非凡な造作の彫像がいきた魂をもち、大宇宙、すなわち森羅万象と対峙している――そんな幻がかさなりそうに見えた。
（それが己の世界）
苦難と試練。宿命と因果律。憎しみと疑いと怒りと激情。醜く濁ったすべてがひそむ、けが

れの地。

自身はその世に属するものであると、彼が言う。

斎伽忍の名のもとに。

ふっ、とわずかな推力が身体にかかるのを諒は感じた。

周囲を占める星々の群れが動きだしたようだった。ゆるやかに、水の流れのように。

いや、違った。諒は錯覚をさとった。

移動しているのはまわりの光景ではなく、自分自身の——正確には斎伽忍と自分のふたりの——ほうだった。

飛翔とも浮遊ともつかない、特異な移動感覚だった。ただ運ばれてゆく。上下左右の区別がない空間で、どこへ向かっているのかさえわからない。

「時間がない……」

忍が呟いた。

「もう、おまえは戻らなければならない。元の場所に……。おまえがあるべき世界に」

遠い言葉だった。

そのまま彼ひとりどこかへ消えてしまいそうな、そんな言い方だった。

「……忍は？」

尋ねずにいられなかった。

かすかに目を伏せて、忍が微笑する。
「勿論、僕も戻る……いずれ……」
「いずれ？」
諒の疑問には答えず、忍は別のことを口にした。
「この大銀河を、忘れずに見ておくといい」
「……」
「巨大な天を前にすれば、人はだれも立ちすくむしかない。そうして自分の脆さを知るとき初めて、見えてくるものもある」
万物は問いかける。
なぜここにいるのか。
なぜこの時を生きているのか。
どうして——何を為すために？
「……厳しいことばかりだな」
ぽつりと諒が言うと、忍は我にかえったように振り向いた。
「ああ……余計な話を聞かせてしまったな」
「あんたがよろこんで話して聞かせたんでしょうが」
いきなり、人格をころりと変えないでほしい。調子が狂う。

「聞き手の基礎知識があまりにも貧弱だったものでね。二年近くも僕の近くにいて、いったい何を修業してきたんだろう……」

「修業って、あんたねえ……。だれかさんが普段、必要不可欠なことさえ教えてくださらないもんですからねえ」

流されてゆく。

時間も記憶も、大いなる星の流れに同化し、歴史の内の些細な一秒として消費されていってしまう。

かけがえのない今、この瞬間、斎伽忍の言葉はひどく自然に、自由に聞こえるのに——。

(自由に)

はっ、と強く胸をつかれた気がした。諒は息を呑んでいた。

自由。その二文字こそ、斎伽忍がこれまでの二十年間切望しつづけ、そしてこれからも永遠に得ることのないものではなかったか。

「忍……」

呼びかける声を消し去るように、ごう、と音をたてて時空の流れが勢いを増した。身体のバランスを崩しそうになった諒の腕を、忍が支えた。

急激に移動の速度はあがりつづけていた。忍からの返答はなかった。こちらの声が届いているのかも疑わしかった。ごうごうと唸りながら星のかけらが目の前をかすめ、凄じいスピード

で後方へ遠ざかっていく。
（まだおまえにもこんな風に話せるんなら）
（話せるだけの自由があるなら）
（今だけでも）
時間がない――。忍はそう言った。それがどういう意味なのかさえ、諒は知らない。
「忍！　もうやめろ……！　吐き出しちまえ、俺に隠してることなんか……!!」
話してしまえばいい。自分を縛らずに。
ただでさえ、思うように語ることも許されぬ立場にあって。
これ以上、沈黙を自身に課すことはない。さらに自由を失う必要はないのだ。
忍が自ら孤独を望んで崎谷亮介以外の術者を手放したなら、なぜ、こんな風に自分の生命をたすける必然がある？
なぜ、こんなに心安く言葉を交わしあうことができる？
なぜ里見十九郎の身を案じ、夏江に伝言を託すような真似をしたのか。なぜ冴子を本家に封じこめて保護する必要があったのか。
そして彼はこのまま、自分と共には行かないだろう。いずれ戻る、と彼は言う。自分ひとり現実世界に送りかえし、おまえは何処へ姿を消すつもりなのか。
なにもかも全部彼の内側だけで処理され、進められてゆく。とどめられる兆しもないまま

に。

そこには常に、得体の知れぬ危うさがつきまとう……。気づかないのか、彼は？

どうして。

「約束が違うだろうがっ!!」

強風にあおられながら諒は怒鳴る。

「おまえは初めっから、俺に心配なんぞかけられる立場じゃなくて……!!」

摑まえた忍の片腕をひきよせて、轟音に負けぬように。

「――……」

忍の瞳はまっすぐに諒の視線をうけとめ、決して逸らされようとはしなかった。彼の唇が動き、確かになにかを告げた。――だがその声は流れ去る闇に呑まれて諒の耳までは届かなかった。

「聞こえない!!」

諒は叫んだ。なぜか冷気を感じた。

忍の声が聞こえない。すぐ近くにいるのに、目の前に見えるのに。まるでお互いに異なる次元に墜ちこんでしまったみたいだった。

これほどの不安を忍に対して抱くのは、初めてだ……！

なにが自分をかりたてたのか、諒自身にもまったくわからなかった。せかされる思いで諒は

声をはりあげていた。
「おい、いいか、忘れるなよ」
——届け！　わずかでもいいから。
「忘れるなよ、俺がおまえを見てるってことを」
見ている。
自分ひとりではなく。
亮介も、冴子も。おそらくあの里見十九郎も。
「だからまちがえるな!!」
（……）
再び、忍が静かに呟いたようだった。
それを知覚するより早く、めくるめく輝きが視界一面を埋めつくした。その瞬間、彼をとらえていたはずの掌からふっと実体が失せるのを諒は感じた。口をひらく間もなく渦を描く濁流にまきこまれる。虚無の空間を一気に落下する——。
闇をひたすら降下してゆくさなか、耳にしたのは幻聴だろうか。
（……に……りて）
（さだめを……知らずして）
（汝に……）

（天よ）
（……忍土にありて……我のみが）
（我のみが、夢を見つ）
夢……？
誰が、どんな、夢を。
「おまえの、声……か……!?」
どんな絶望を。どうして。
「忍……」
まぎれもない喪失感を、諒は抱いていた。確信があった。
もう見えない。たった今、自分は、斎伽忍の姿を見失ってしまったのだ。

IV

午後十一時三十分。

中間試験は無事に終わったものの、神原亜衣をとりまく状況はなにも変わっていなかった。

電話のベルは、今夜もまだ鳴らない。

来るかどうか確定しないコールを毎日えんえん待ちつづける心境は、その立場を経験したものにしかわかるまい。不安と心配と寂しさがべったりと背中に貼りついて離れない感じだ。ちょっとした物音にも気がはりつめてしまう。

落ちつかないので、勉強机の上には数学の教科書がひらきっぱなしになっている。例題に手をつけていれば、その間だけはよけいなことを考えない……はずなのだが、どうも今日ばかりはその効果も弱いようだった。

電話機は廊下に一台きりだ。兄たちに先をこされないよう、親に文句をいわれないよう、ベルが鳴ったら電光石火でかけつけなければならない。家がもうすこし大きければ、いや自分の部屋に回線をひいてさえもらえれば、こんな気苦労もせずにすむのだが。世の中、なかなか思うとおりにはいかない。

恋愛をすると、いろんなことがとたんに不自由になってくる。

（なんでこんなに大変なんだろう……）

ため息が出る。やっかいなことに、大変だからといってやめることもできない。

（やめられないから、なのよね……）

勉強をしてクラブ活動もして恋愛までしたら、それだけで高校生は大忙しなのだ。

亜衣の場合、その上さらに彼らの事情にも無関心ではいられない。なにしろ崎谷亮介は彼らの内で、とてつもなく重要な役割を負っているらしいので——。

それにしても、と亜衣は眉をひそめた。

今日の斎伽忍の行動は、あまりといえばあまりな仕打ちだった。なにもあんな風にぬきうちのように学校へ現れてまで、崎谷亮介を連れ去らなくてもいいではないか。

亜衣自身はたまたま間が悪くてその光景を目撃することはできなかったが、現場にいあわせたクラスメートの興奮の仕方で、『銀のバジェロに乗った凄じい美青年』の正体はすぐにわかった。わざわざ学校という日常の場に踏みこんでくるなんて、いかにも異世界へ亮介を誘いこむ使者のしわざのようだ。

斎伽忍という人物に悪意を抱くまでには至らないが、恨めしい思いがあることは否めない。ひとを巻きこんでおきながら秘密主義に徹するところといい、それでどのような影響が出ようと関知しないそぶりといい……。

みんなバラバラになってしまった、と亮介は言った。〈髪切り〉の事件に決着がついた、あの晩のことだ。

『俺が、うまくできなくて……』

そもそもの元凶はその一言ではなかっただろうか、と亜衣は思う。

（なんで崎谷君のせいになるのよ）



みんなでやって失敗したなら、またみんなでやりなおすのが筋ではないのか。

亮介が亮介自身について反省するならいいが、すべての責任を自分に帰してしまうのは——話が違う。亮介のそういう考え方が、あんな風にやすやすと斎伽忍に攫われていく原因になっている気がする。

たしかに、こうして自分が思うようには状況は単純でないのだろう。自分の立場から見えないことはたくさんあるし、伏せられている事実もいくつかある。人間同士の間に存在する複雑な感情は、理屈ではかたづけられない。どうすればいいかなんて、軽々しく他人が判断できるものではないかもしれない。

けれど……あくまで第三者の目で見るなら……。

(楽なんじゃないかしら)

不意に思いついて、亜衣はびっくりした。

(そうやって自分だけ頑張ろうって考えたほうが、他人とかかわらなくてすむから楽なんじゃないかしら)

どうなのだろう？　亮介は優しいから、他人の痛みをそのまま自分の痛みにしてしまう。そんな性格だから、もつれた人間関係など目のあたりにしたら双方の痛みに感応して立ち往生してしまいそうだ。

どちらが悪いとも言えず、口出しもできず、ならば自分が責を負おうと——そう亮介が考え

るなら、それは本当の解決になるのだろうか？

もしかして関係修復のためになすべき努力を置き去りにして、自分にとって楽な途のほうを選んでいるのではないだろうか？

今まで考えてみなかったことだ。ひとつの可能性、でしかないのは勿論だが。

亮介は絶対にまちがえていないと言いきれるだろうか。

いや、それ以前に、その亮介になんらかの役目を課して動かそうとしている斎伽忍――彼こそが、本当にまちがった方向へ進んでいないか問われるべきだった。

彼は指導者であり、責任者であるからだ。もっとも亮介のことが見える位置にあり、見えなければならない立場にあるからだ。

亜衣はいらいらしてきた。今すぐにでも亮介と話をして、事の真実をたしかめたい。どんなに状況がせっぱつまっていようと、電話の一本くらい惜しまなくってもいいではないか。

いくらなんでも、自分はのけものにされすぎている……！

「！」

電話のベルが廊下で鳴りひびいたのは、まさにその瞬間だった。

いらだった亜衣を叱りつけるような絶妙のタイミングだった。息を呑み、恨みがましい気持ちにとらわれた自分の頬を平手で叩きながら、亜衣は部屋をとびだした。コール二回半で受話器にとりつく。

「もしもし!?　神原です……」

『あっ……』

回線のむこうで漏らされた声は、期待していた相手のものとはまったく異なっていた。

通話がつながったことに仰天しているような反応だ。まちがい電話だろうかと亜衣は疑った。

「もしもし?」

少し強い調子で呼びかけてみる。これでいたずらだったりしたらちょっと許しがたい。

『――神原さん?』

低い声が、ぽつんと尋ねた。

『神原さんだよね……ああ、よかった、神原さんまで連絡とれなくなってたらもうスリーアウト試合終了になるところだった……』

「……やだ、水沢君なの!?」

深夜であることも忘れて、亜衣は大声をはりあげていた。

『いかにもそのとおり、私の名は水沢諒でございます……。ごめんね、いきなし、こんな変な時間に……』

「どうしたの?」

なにか、尋常ならざる事態が発生したとしか考えられない声を、水沢諒は出していた。口調

こそ明るいが、そんなものは、本音を出せないときの彼の仮面にすぎないことを亜衣は見ぬいている。

『あっ、留守電の伝言、聞かせていただきましたよ。ありがとうございました』

「そんなこと今はどうでも……」

『どうでもよくないでしょ、孤独な心にあったかいメッセージが響いてありがたいなあと俺がこんなに感動して感謝してるってのにそんなのどうでもいいってわけ？　俺の真心なんて知ったこっちゃないって神原さんはおっしゃるわけ？　それってあんまり冷たいんじゃないかしら、ひどい仕打ちなんじゃないかしら、グレちゃうよ俺、俺がグレたら神原さんのせいだからね』

「あのね……！」

さっさと目を覚ませ、と言ってやりたい。

「しっかりしてよ、水沢君……！　あなたが頑張らなかったら誰が代わりになるのよ!?」

『……』

数秒間の沈黙があった。

『……ありがとう、ちょっと今、頭がヘンになりかけてた』

返ってきたのは、トーンの一段さがった、まともな水沢諒の声だった。

『お恥ずかしい……。これでも私は、プロフェッショナルのトラブル始末人のはずなんですけ

ど』

「はずじゃなくて、そうなんでしょ。肝心なときに一番頼りになるのは水沢君だとあたしは思ってるんだから、頑張ってよ」

『……責任重大ですな……』

諒は苦笑しているようだった。

「あたしと連絡とれなかったらアウトだったって、どういうこと？」

『うん……つまりね、全部を説明するとめちゃくちゃになっちまうんですけど……あ、俺はね、今、六本木のCBS局内からかけてるんだけど』

「CBSって、テレビ局？　……なんで水沢君がそんな所にいるのよ」

『なんでだか知らないけど忍がこんな所に入り浸りやがったからですよ。斎伽忍の悪行をあばく始末人としては踏みこまざるをえなかったわけですよ。虎穴にいらずんば虎児をえずとゆーでしょ……って、それはまた別の話だから別に説明させて。とにかく早急に作戦を変更しなきゃならなくなってね』

諒の話し方は落ちついているが、底にただよう切迫感は消えない。

『事情がまるっきり変わってきてるんだ。忍がどこにもいなくなってる。俺と一緒にこっち側に戻ってきたはずなのに、影も形も見えないんだ。もしかしたらあいつはこのまま姿をくらます気かもしれない』

「忍さんが……え？」

全然、意味がわからない。

「こっち側って……？」

『それもまたあとで説明させて。だから、俺が見こんでいた方向と正反対に動きだしてるんだ、状況が全部。それをなるべく早く他の連中にも伝えないと混乱が生じる……現にもう、トラブってるかもしれないんだけど』

「他の人って、崎谷君や冴子さんたちのこと？」

『そうそう、あと里見さんと和泉。要するに関係者全員。そんなわけで俺はさっきから電話をフル稼動させてたんですけどね……』

それがすべてアウト――空振り、ということらしい。

全員ことごとく連絡不能、とはどうしたことだろう。亜衣も顔をしかめた。

『とりあえず冴子は除外。あいつは、居所だけはわかってるからね』

問題はあとの三人なのだと諒は言った。

『神原さんとこ、亮介くんから連絡ないよね』

「……今日は何もないけど……」

『うん、まだ家に帰ってないんだ。さっきそれ、たしかめた。ただ、今、亮介は忍と一緒にいるわけじゃないと思うんだ……勘だけど。ついさっきまで忍は俺と一緒にいたんだからさ』

「じゃあ、どんな用があって崎谷君が帰ってないのか、わからないってこと？」

『そういうことになるよね』

諒の返事は苦々しい。

『和泉も朝から一度も家に帰ってない。上のお姉様が心配してるんだけどね……。里見さんのところは、誰も電話に出てこないから留守ってことだと思う。三鷹の片桐さんちに問いあわせても、夕刻お出かけになりましたの一言で終わっちゃうし、夏江さんのお店にかけても、今夜は早めに店を出られましただし……』

「……」

『いきなり俺ひとりだけ異次元に落とされたかと思ってしまいましたよ』

ただ連絡がとれない、というだけでなく、その事実に諒は不吉な背景を感じているらしかった。それがどんな危惧なのか、亜衣にはまるで想像できなかったが……。

『ほら、俺って今、自分の本拠地ってものがないでしょ。俺のほうから動くしかないわけで……。連絡待ちができないからね……』

低く、諒が説明する。

それだけではないだろう。もっとはっきり不安をかきたてる材料が、諒にはあるはずだった。

「……わかった、じゃあ、あたしが中継点になるから水沢君は自由に動いてみて。あたしはあ

たしで、今夜一晩、その三人と連絡とれるように頑張ってみるから」
『そ……それってすごく助かる……』
「これぐらいさせてよね」
『……ありがとう』
今までででいちばん素直な水沢諒の声を、亜衣は聞いた気がする。胸を打たれるような……。
「あたしだって、あたしにできることをしたいもの……。ただ見てるだけっていうのも、つらいんだから。大変なときだからこそ力になれなくちゃ情けないじゃない……追い風のときに味方することは、誰にだってできるんだから」
『そうだね……』
諒が呟く。
それは真理だ。追い風のときに戦うことはたやすい。人の真価が問われるのは、逆風のときだ――。
『そしたら俺から、また電話しますから』
「ちょっと待って！」
亜衣が諒の言葉をさえぎった。
「待って、今、キャッチホンが――崎谷君かも――」
『……おやおや……』

いくらだって待ちます、と諒が言った。亜衣は慌てて回線をきりかえた。

「もしもし？」

『……こんばんは』

それはまたもや、予測していた人物とは異なる声の持ち主だった。

男性だ。

抑えられた……静かな、一言。

『里見、ですが……』

第八章　招かれざるもの

I

フルフェイスのヘルメットをはずした里見十九郎は、夜目にも、ひどく顔色が悪かった。七階の通路で待ちうけていた諒は、かすかに両目を細めた。

「悪かったね……待たせて」

鍵をとりだして、彼は里見家の扉をひらく。

自由が丘のマンションに、夏江はなぜか戻っていない。その理由を十九郎は説明しなかった。

すでに深夜――というより、明け方だ。

神原亜衣を仲介にして連絡をとれたところまでは、よかった。すぐに会って話したいことがある、という点で互いの立場は一致していたが、十九郎がこれまでの態度をくつがえして自分と会おうとするのは何があったからなのか、諒はまだ知らない。

「大丈夫ですか」

まずはそう尋ねずにいられなかった。なによりも十九郎の顔色が気になった。
「冴子さんと会ったよ」
あっさりと十九郎はそんなことを言った。諒の表情が、その名のせいでわずかに硬くなった。
「……じゃあ、鎌倉に……？」
「希沙良もそこにいる」
居間のテーブルにヘルメットを置きながら、十九郎がつづけた。
「今日の午後、禁を破って希沙良が本邸に侵入した」
「――――」
愕然として諒は彼の背中を見た。
さらに痛切な事実を、十九郎はまるであたりまえのことのように告げる。
「制裁を下したのは、俺だ。――この手で」
「……」
口にするべき言葉を、諒は知らなかった。
「里見さん……」
「君が言ったとおりだったよ」
窓際に立ち、十九郎は動かない。どこを見ているのか、諒からはわからない。

「俺が何もせずにいたのは……たとえば、希沙良が……俺の力不足のために、かかわりもない戦いに巻きこまれてしまうとか……そして、傷ついて俺の目の前で倒れる姿とか……そういったものを、もう二度と見たくなかったからなんだろうと……。今ならば、きっと、そんな風に言うことができるよ……」

「……」

今ならば。

十九郎はそう言う。それは——その祈りが、すでに砕かれてしまっているからだ——。

「けれど、俺は、希沙良を殺させるわけにはいかなかったんだ……」

死なせるわけには。

あんな、本家方の、体面と因習のためには。幼いころから希沙良ひとりを排斥した、冷酷な一族たちの手によっては。

「……すみません」

諒が呟いた。

「すみません……里見さん……」

それしか言えなかった。

迂闊だったのは、自分だ。

希沙良が独断で走ることは、充分、考えられることだったのだ。鷹木文彦のよけいな介入さ

えなければ——なにも、里見十九郎にそんな役目を強いずにすんだかもしれなかったのだが——。

「君のせいじゃない」

十九郎は軽くかぶりを振った。

「誰のせいでも……ないんだ」

ふりむいて、彼は自分の右手をひらいてみせる。おそらく希沙良を傷つけたはずの、その手を。

「わかるかな……。何も、感じないんだ。何も考えられない。誰かを責めようとも、自分を責めようとも思っていないんだよ……今の俺は……。ある意味、これはとても……自由な状態かもしれないね……」

「……」

自由な状態？

それは違う……と、諒は思う。

十九郎が本当に自由なら、彼は今、どうして——。

「里見さん」

諒はゆっくりと言った。

とても、悲しい、思いで。

「それは『飽和』……でしょう」
わずかに興味をひかれたように、十九郎はそれを聞く。
「里見さんは何も感じていないんじゃない。感じすぎているだけでしょう。……でなければ、今、そんな顔してないはずですから」
「君に言われるのは……辛いな」
里見十九郎は笑った。涙よりも痛い笑みだった。

＊　＊　＊

その高貴なる女性を前にして、遠野一真は端座した姿勢をくずさなかった。
ウェーブを描いて流れおちる髪の、美少女。
空者・伽羅王の実妹にして許婚者――冴子、だ。
部屋の四隅にすえられた蠟燭の火がゆらめく。飾り気のない、ちっぽけなこの部屋が、鎌倉の邸宅において〈桜〉と称される間であった。
未明の刻にもかかわらず、疲労の色も見せず、炎の影をその白い頬にうつして冴子はまっすぐに一真を見つめていた。
いながらにして強い生気を放つ稀有な人物だ――彼女は。存在感だけに圧される。それは一

真の内に流れる血統が、彼女の本質を、純血の偉大さを、敏感に知り得るからだろうか？

「……では」

乾いた声で、一真は口をきる。

「見ぬふりをしろと、仰せになるわけですか」

「気はすんだでしょ、と言っているのよ」

冴子の返答は冷ややかだ。

「どうしてもあたしのやることが許せなければ忍様に密告でもなんでもすればいいわ。あなたたちにそれができるならね」

「酷なことを……」

「どっちが酷薄よ!?　あなたたちは何もわかってないわ、忍様のことも、あたしたちのことも!!　教えこまれたことをそのとおりにしかできない小学生並みじゃないの!!　どうして忍様があんな通達を出してきたのか少しでも考える頭があればこんなことにはならなかったはずよ。それくらいの分別と余裕はあったはずよ。特に里見家と縁の深いあなたにはね！　違う!?　言い訳してくれてもいいわよ」

怒りをおもてに出した冴子は、その姿自身、紅蓮の炎のようだ。一真は頬を伏せ、その熱波を黙してうけとめた。

斎伽忍の出した通達とは――冴子の謹慎はそのままに、ただひとり里見十九郎にかぎって面

会を許可するといった内容のものだった。
本邸の譲りをつとめる立場の一真たちとしては、彼の命令を遵守することに否やはまったくない。
来訪したのが、そのとおり、里見十九郎であればよかったのだ。
現れた和泉希沙良が、十九郎の従弟であることを一真はもちろん知っていた。従弟というつながりをこえて十九郎の管轄下にある術者だということも。だからこそ内密裡に彼と連絡をとり、事の次第を告げることもした。結果として、時を待たず、思ったとおり十九郎はこの鎌倉邸までやってきたが――。
(そうさ……わかっていたんだよ)
一真は胸中で呼びかける。
(君がそうすることは、全部……)
わかっていて招いた。わかっていながら制止しなかった。それは何故なのか、あの優秀な里見十九郎はおそらく……知らないだろう。そこまで心をはせてはいられないだろう。
斎伽忍に顧みられることもない、かれら術者とともに戦うこともない、そんな力なき者たちの心中まで考えもしないだろう。
「彼は罰されるべきでした」
ぽつんと一真は言った。

「和泉希沙良は……です。僕にはそう思えました。彼は何も知らない——我らのことを、ではなく、里見のことを。どれほど彼のために、彼の自由のために里見がこれまで力を割いてきたのか、何も知らない……それは罪だと思えました」

穏やかに、だが介入や弁護をゆるさない毅然とした態度で一真は言った。冴子は無言だった。

「僕はあんな風に傲慢に生きている人物は嫌いです」

それが個人的な怨みであると認めているうちは、一真は動かなかったのだ。

憤りをぶつけるよりは、決してかかわらない道を選んだ。それが自分にとっても、和泉希沙良にとっても、そして里見十九郎にとっても最善の法であろうと思えたから——だ。

その境界線をこえて侵入してきたのは和泉希沙良のほうだった。彼さえよけいな行動に出なければ、均衡は無事に保たれていたものを。

「気はすんだだろう、と僕に問われましたね。僕に考えうるかぎり、彼にとって、あのようなかたちで里見に手を下されること以上のダメージはありません。……つまり、彼は最大の罰をうけたわけです。そういった意味であれば、僕は満足です。たとえ、彼が死なずにいても」

いや……死なれては困る。

秘められた、その本心を一真はあえて語らなかった。

この程度で死ぬなんて許されない。

それでは真の痛みを思い知ることもできない。自分の罪を、その目を見開いて直視することも。

「僕はそういう人間です」

一真は呟く。

「醜いと思われるでしょうが……」

「……いいえ」

彼を見据え、冴子は言った。

「可哀想、だと思うわ」

「……」

一真は微笑した。それ以外の表情はなかった。

「見ぬふりはいたしません。我らは待つだけです……あの方からの次なる命があるまで……。それまでは、あなたの気まぐれも、和泉希沙良の幸運も、我らにとってはどうでもいいことです。——それでは」

音もなく立ちあがり、一真は冴子の前を辞した。彼の背を見送って、冴子は小さな吐息をもらした。

十九郎が自らの手で瀕死の状態まで追いこんだ希沙良の身体を、ぎりぎりで癒すことに成功したのは、たしかに冴子のしわざだった。

それはすでに一度、希沙良へ死の裁定をくだした〈道者〉四人衆の意には、そむく行為だ。遠野一真が、見ぬふりをしろというのか、と問いかけにきたのは、そのためだった。

もしも冴子が誤りをおかしているのなら、万能の伽羅王が看過するはずはあるまい。ならば、いずれ彼からくだされるであろう命令を待てばよい。……そんな理屈が、この家のなかでは通用する。誰も斎伽忍の判断を疑いはしないのだ。

冴子もまた、彼の決断を信じていた。一族の、他の人間たちとは異なる意味で、だったが。

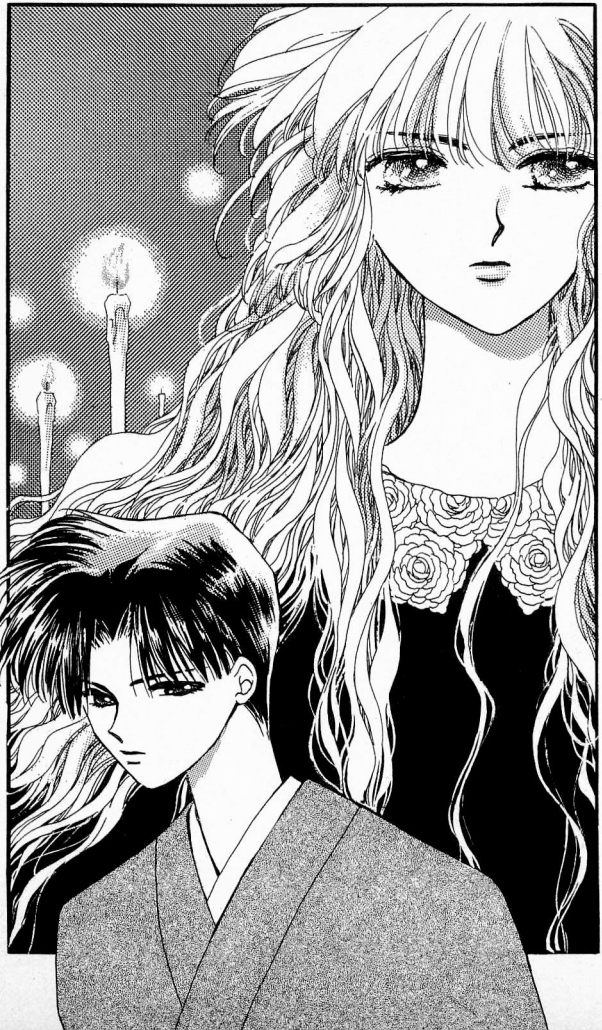
(忍様がこんなことを望むはずがない……)

それは当然のことだった。あたりまえすぎる真実だ。なぜこの邸内では、そんなことが当然でなくなってしまっているのか。

希沙良を傷つけた十九郎の狙いは、冴子にはよくわかる気がした。あえてこの〈桜〉の間のすぐ近く——冴子の目の届く場所で、もっとも後遺症の残りにくいやりかたで、効果的に一撃だけを加えた、その意図は。

それもただ一方的に討ったのではなく、戦闘の場をつくりあげて——。それは、まちがいなく冴子のもとまで気の響きを伝えるためだ。

一種の簡易結界につつまれた〈桜〉の間に、外の動きはほとんど伝わってこない。人の声



や、普通のオーラなどは。

さらに彼らは〈禁呪の縛〉を敷き、あらゆる術力を無効化する場をつくりだしていた。当然、冴子の感覚が希沙良の存在をとらえることもなかったのだ。

内苑ではげしいオーラが——それも、知っている人物のものが——燃えあがり、そしてすぐに消失したとき、はじめて冴子も異変を悟った。おしとどめようとするまわりの人間を一喝して黙らせて、重傷の希沙良を邸内へ運びこんだのは、すべてそれ以前のお膳立てがあってできたことだ。

希沙良はなにも知らないのだ、と遠野一真は言う。

十九郎の行為の裏にあったそんな意味を、一真もまた読みとっているのだろう。だからこそ彼の憤りは深さを増してゆく……。

希沙良がなにも知らないのは事実だ。

知らされなかったからだ。どれほど願っても。いくら望んでも知ることができなかったからだ。それは……罪、だろうか……？

（それに……）

遠野一真も知らずにいることが、ひとつある。

一真も、そして十九郎も知らない。傷を癒されてゆく間、まだ意識も朦朧とした状態で、希沙良が何度もくりかえした言葉を。

「いいから……」
冴子の腕をつかみ、希沙良はそう言っていた。
「俺はいいから……。早く、あいつの……」

＊　＊　＊

（あいつの方が先なんだ）
（俺なんか放っといていいから）
（早く）
狭い部屋の壁に背中をつけて、片腕を抱きよせて希沙良はうずくまっている。
邸宅のなかの一室……。どうやら地下らしい。別に、ここがどこでもかまわなかった。
（いいから）
つい先刻まで、重く、長い夢を見ていた。
大丈夫、あの人は心配ないから、と言い聞かされながら。
（大丈夫？）
心配ない、なんて、そんな言葉がもう信じられなかったから、だから自分はここへ来たはずだった……。

「現金だな……」
呆れたような気分で、希沙良は呟く。
ひどく身勝手だ。
自分に都合のいいときだけは、その言葉を信じたいと願ってしまうのだから……。

II

何が起きたのか、初めはわからなかった。一瞬、なにも瞳にうつらなくなったように感じ、そして気がついたときには水沢諒の片腕の中だった。
「危ない……と言おうとしたんですが」
手遅れだったようで、と諒が呟く。
「ああ……悪かった……」
かすれた声で、十九郎はそう答えた。
目眩をふりはらって立とうとしたが、できなかった。別人の身体を借りているようだ……ま

ったく思いどおりに動いてくれない。
「無理しないほうがいい、倒れて当然なんだから、今の里見さんは……」
諒の長身が、手慣れたしぐさで十九郎を支えて手近のソファまで運びこむ。
視神経を刺す痛み。吐き気と戦いながら、不安定に揺れる視界を十九郎は自分の掌で閉ざす。両眼を覆ってソファに身を預ける彼の姿を、いたましげに諒が見つめた。
「むこうの部屋で休みませんか。少しぐらい眠らないと……」
「眠れると思うか？」
十九郎の反問に、諒は沈黙する。
「……甘えるなと怒鳴ってくれていいんだよ、そこで」
苦笑まじりに十九郎が言い加えた。
「またそういう自虐的なことを……」
ため息をこぼして諒は里見家の居間を見まわす。
「ブランデーなんか置いてませんか、こちらは」
「ワインなら、あるんじゃないかな。台所に」
「結構。そいつで手を打ちましょう」
素早く諒はキッチンへ足を運び、考古学者的な勘をはたらかせてロゼ一本とグラス二個を発掘してくる。気後れしたところのない人物だ、と十九郎は改めて思う。気が利くというか……

高校生離れしているというか……。

「ここで乾杯っていうのも変ですが」

器用にワインの栓をぬき、ふたつのグラスをなみなみと満たして、諒が言う。

「でもなんか良さそうな銘柄なんで、やっぱりもったいないですから……乾杯」

かつん、とグラスを鳴らしてから、一方を手渡す。

「ありがとう」

受けとって十九郎は一気にそれを空にした。味などわかるはずもなかったが——崩れおちそうな身体に活を入れる効果はあった。

「もう一杯くらいどうです？　……って、俺の酒じゃないんですけど」

「面白いな、君は……」

感覚の狂いはおさまりつつあった。急に流しこんだアルコールのおかげだろう。それから、目の前にいる人物のおかげでもある。

「せっかくだから、その瓶が空くまでつきあってもらおうか……。話したいことも、聞きたいこともあるし、今後のことも考えたいからね……」

「空けちゃっていいんですか、これ」

「母君のお気に入りだからね。証拠隠滅」

「それって夏江さんの……ががーんっ」

「もう遅いよ。水沢にも片棒かついでもらわないと」
十九郎は微笑した。今度は自然に笑えた気がした。
「よかった」
諒が言った。
向かいに腰かけた彼のことを、十九郎は見つめかえした。何が、と言葉で尋ねはしなかった。
「いえね……。ひとりじゃないなあと思って」
はにかむように目を伏せて、諒が説明した。
「神原さんもいるし……んで、里見さんがいるぞと……。まだなんとかなりそうだぞと。くじけそうになるたんびにそのくりかえしなんですけど……だから、また、すぐ、くじけそうになるやもしれんのですけど」
「水沢はとても、そう簡単にくじけそうには見えないよ」
「いえいえ……」
諒はかぶりを振る。
「……本当のひとりは……キツいですよ、やはり……」
まるでそれを体験してきたように、彼は言う。
「不思議だね……。水沢とは、お互いに、生命を助けたり助けられたり……そんな間柄（あいだがら）なの

に、今までこんな話は一度もしたことがなかった」

「そういえば。……敵同士だと思ってたこともありましたよねえ、確か」

なんてこった懐かしすぎる、と諒はひとりごちている。それほど大昔のことでもないはずなのに。

「君の存在はあまりに、イレギュラーだったからね……」

「変則的（イレギュラー）？」

なにげなく口にした言葉だった。意味を告げようとして、十九郎はふと声をとぎらせていた。

水沢諒の登場はイレギュラーだった。何にとって？　誰にとって？

「まあ、確かに、斎伽さんちの常識をぶっとばしてる馬の骨だってことは事実だったよーですが」

諒の声があっさりと耳に届く。

「……別に、そんな意味で言ったわけじゃないよ」

違う。そんなことではなくて。

それはもっと……。

「里見さん？」

気遣うように諒が呼びかけた。遠ざかりかけた意識を、かろうじて十九郎は抑えつけた。

「ああ……ごめん、まだ酔いが足りないみたいだ」
「危なっかしい人だなあ……」
安心できない様子で諒は顔をしかめている。
「てってー的に飲んでもらうしかないよーで。これは。いやでも眠らせてあげますから、俺が。責任とって」
「そうは言ってないじゃないか」
「だめっ。よーくわかった、この人は精神力と体力のバランスを考えていないっ。めでたく妖気もぬけたことだし、さっさと全快していただかないと俺が困る、俺がっ」
がばがばとワインを注ぎ足して諒が力説する。妖気はまちがいなく浄化できたのか、と確認することさえしない。
冴子に会った、という十九郎の一言だけで充分だ。
重症患者を前にして、あの冴子が黙っているはずがない。
「冴子さんには、ひどく叱られたよ。彼女はいつも、元気で……圧倒される」
グラスをとりながら、十九郎が言った。
「だと思った」
小さく呟いて、諒は肩をすくめる。どこに行っても強い女は強い。
「だから俺は、例によって、あの程度の妖気で自動的に自殺するつもりはなかったと言い訳を

したんだけれどね……〝未必の故意〟なら同情の余地はないと、はっきり言われたよ」
「……好き勝手ゆーとるな、あいつも……」
「今までのところ、最も核心をついた発言かもしれないね」
「納得せんでください」
自分のことのようにいやな顔をして、諒は唸っている。かすかに笑みを浮かべ、それから十九郎は肝心なことを口にした。
「彼女から、伝言があるよ……いくつか」
「……」
無言で、視線だけを諒は返した。
冴子が伝えてくる情報の題目はわかっている。
本家方の内幕……だ。

＊　＊　＊

「遠野」
東の空が白むなか、鎌倉の山道をくだる一真を呼びとめたのは、〈道者〉四人衆の一、不破武人だった。

「ご帰宅か」
「とりあえず一度、戻ります。父も事の次第を知りたがっているようですから……」
「事の次第？」
掌の上で青い林檎をひとつはずませて、武人はかすかに笑う。
適度なベールをかぶせて脚色した事の次第……か。
「散歩の道中だ、見送らせていただこう。それともお邪魔かな」
「まさか……」
一真の態度にはそつがない。
不破武人は、今年の春、ちょうど二十歳になったばかりの青年だ。一真より三年ちかく上……そして彼らの長と同年でもある。
七瀬の傍系でも特に有力な不破家の、三男。
ふだんの顔はごくありふれた大学生だ。理工学者を志望していると一真は聞いている。
「散歩というのも口実さ。どうも私は咸月たちとは意見が合わなくてな。日和見主義と明石川に責められるので、逃げてきた」
さくりと林檎に歯をあてて、生真面目な調子はそのままに、武人は問いかけてくる。
「遠野は……いや、よそう。ここだけの話として聞いておきたい。一真の考えはどうなんだ？」

「考え……というと、里見の件でしょうか？」

「いや、もっと広範な問題さ。……大きな声では言えないが、あの方にまつわるいくつかの怪事が表沙汰になりはじめている。その対処について、だ」

武人たち年長者のあいだでは、すでに里見十九郎や和泉希沙良の一件は消化されてしまっているようだ。一真は自分の不用意さに眉をひそめた。幸い、武人は一真の言葉じりをとらえて云々するような人物ではなかったが。

「……例の、噂のことですか？　ただの流言ではなかったんですか？」

「根も葉もなければよかったんだが、根のかけらくらいはありそうなのさ」

だから問題なんだ、と呟いて武人はまた林檎をかじる。

一真も重苦しい気分で沈黙した。それは斎伽の血にかかわる者すべてにとって、不吉な話題といえた。

〈空者〉伽羅王……七瀬忍に関する、奇妙な現象のことだ。

それはこの一月ほどの間に、たてつづけに表面化した。

本家方の長老たちと、親族の一部、咸月や任谷、榊、不破……といった、分家筋の当主のもとへ、伽羅王の〝幻〟が来訪したというのである。

深夜。妖艶に。ひっそりとしずかに。幽魂のように。あるときは窓のガラスに姿をうつし、あるときは部屋の鏡に一瞬だけ。けっしてとどまりはしない。なにも語りはしない。ただ、存

在を示してみせるように。
まるで、愚かな人間たちを裁くように。
その心中に沈む穢れを、冷たい爪で抉りだすように。
いずれ報いとしてふりかかる破滅を、予言する黒衣の聖者のように。
前後して、『斎伽忍』の像が、いかなる撮影技術をもってしてもフィルムへおさまらなくなった——という噂がどこからか届いた。
彼らの長は、かたちある人間としてのバランスを崩しはじめているのではないか？
それはさらなる神聖化か？　あるいは、その出生のはじまりから彼に宿命づけられた異常性の……脆さと、一種の狂気の——発現する、前触れ？
「もとよりあの方は『神』であろうに。いまさら、なにを騒ごうというのか」
不破武人は複雑な思いを口にする。
「悪いことに、我が家の人間が真っ先に『遭遇』しているんでな……。こんな他愛もないことを声高に取り沙汰しているさまを見るのは、気持ちのいいものではない」
家との板挟みで、彼は難しい立場におかれてしまっているわけだ。
「あなたのせいではないのですから……」
一真はそう言って、せめてもの慰めとなることを祈った。
「すまないな。まあ、まだ不破ごとき傍流よりの発言ならば、たわごとと片づける余地があ

る。ただ……」

武人はそこで声音を抑えた。

「伊都子殿が、ひどく恐れていらっしゃるという」

（――また、伊都子殿か）

少なからず、一真はその名に嫌悪感を覚える。

（あのお人はいつも恐れているばかりではないか）

「なにを考えているか、だいたいわかるぞ」

一真の表情を読みとって、武人が苦笑いした。

「たしかに俺も同感だが。……あのお人も、気の毒なお人だ。女性であることだし、な」

「……ええ……」

女性、か。

あれほどに弱い女性を一真は他に知らない。

いつもいつも、怯え、震えて、決して表舞台には姿を見せない。親族一同の会する席へも、ごく内輪の、七瀬家ゆかりの集まりへさえも。

二十年間。神を産みおとした大罪にうちふるえて――か。

七瀬伊都子。

冴子と、そして伽羅王の、母、だ。

「伊都子殿ご本人の実権はなきに等しいが、それを甘く見てばかりもいられない。忍様の『独立』に反対している長老たちにとっては、伊都子殿は格好の口実になってしまう……。ただでさえ多くの者が怪事に心穏やかならぬ状況だ。これを機に反動勢力が強まれば、あの方は足元をすくわれかねない」

「そんなことが起こり得るでしょうか？」

杞憂ではないかと一真は考える。

「保守反動が実現するかどうかはさておき、われわれの内部に分裂が生じているのはたしかだ」

林檎の芯を放り棄てて、武人は腕を組みあわせた。

「あの方がそれを喜ばれるとはとても思えない。情けないことだ」

「……」

なるほど……。

その点については、一真も同感だった。

伽羅王に対する不信や疑念が存在すること自体が、そもそも許しがたいのだ。

「何を恐れようというのか、僕にはまるでわからないな……」

「だれもが皆、一真のようにはいかないものさ」

「彼らの怠惰を弁護する義理が、こちらにありますか？」

「怠惰か」

武人は興味深げにくりかえした。

「咸月に言わせると『無能』、明石川に言わせれば『身の程知らず』……言い方はそれぞれだな」

「ご自分はどうなんです？」

一真に問われて、肩をすくめる。

「さあ……。哀れ、とでも言おうか……」

優しいのか辛辣なのかわからない表現だ。

「とにかくこの問題がなんらかのかたちで拡大したときに、我々としてどう動くべきか……現在、決定できることではないが考えておくことはできるだろう」

いざとなれば咸月陣は、先頭をきって反動派の粛清にのりだすような人間だ。好戦的な気性の明石川耕宇も、おそらくそれにならうだろう。穏健な道を選ぼうとする不破武人が悩まされているのは、そのふたりをいかにして抑えるか、という点についてだ。――そのように、一真は納得した。

では、自分の立場はというと――。

「あの方が望むなら、どんな強行策でも僕はとるつもりですが」

低く、一真は呟いた。

なにもかも伽羅王の意思に添うことが第一条件だ。それはゆるがしがたい基調だ。
「それなんだが」
声を落とし、武人が言った。
「まだこれは広めるな、特に武蔵野(むさしの)あたりには……。今のところ、この件は、鎌倉方でしかとらえられていないはずだ」
「何です？」
いやな感じがした。一真は立ち止まった。
「咸月が言うには……あの方の気が消えているらしい。この十時間ばかり。行方(ゆくえ)が知れないのではない、存在が感じられないんだ」
「……」
伽羅王が――。
斎伽忍がどこにもいない？
彼の行方がわからないのなら、所在が知れないのなら、いつものことだ。
だが。
無の状態？
そんなことが許されるのか？
「いつのまに、十時間も……」

「まだ十時間だ。だから伏せておける。しかしこの状態が続くようならば……」
その時は何を基準に自分たちは動くのだろう？
うまく考えることができない。背筋にわずかな慄えが走るのを、一真は感じた。
「いくら話し合いなど重ねたところで、これだけは我々にもどうしようもない」
厳しい顔つきで足元を見おろしながら、武人が言った。
「……俺には、この状態、何かの前兆のように思えてならないんだが……」

＊　＊　＊

「ともかく要約しちまえば、本家の連中が言ってんのは『忍は変だ』ということになるわけですか」
冴子からの情報を聞いて諒が導いた結論は、そういうことだった。
たびかさなる怪現象、だけなら、ありがたい奇跡とでも呼び替えて忍の神性を強調すればすむことだ。
それでおさまらなくなったのは——忍自身に、生身の忍という人間そのものに、見過ごしがたい大きな矛盾が生じているから、だ。
彼から発される言葉と、その後の行動がちぐはぐであったり、確約をうけたはずのことが反

故にされたり、長期にわたって姿を消し去ってしまったり……忍のそういった不可解な部分に、人々がついていけなくなっているのだ。本家方の内部でさえ。

「もともと、畏敬と恐怖は紙一重だからね……」

かみしめるように十九郎が呟く。

「あの人を妄信する勢力の裏に、忌避する人々もやはりいたということだと思う。それが今になってふくらんできただけで……」

「根が深い？」

「そうだね……。簡単に、誰がどちらの考えに属するか、はかりきれないんだよ。人は、同時にいくつもの立場にたてるものだから」

斎伽忍を信奉する者のなかに、実は彼のことをひそかに厭う者があっても、彼をふたたび縛りつけて本家の内に埋葬しようとする考えを抱くものが含まれていても、まったく不思議はないのだ。

「怖いな……」

「そんなものだよ」

思わず深刻になる諒に、十九郎はそう答えた。

「こんな風にどろどろした世界は、水沢の趣味にはあわないだろうけれど」

「だからって里見さんもこんな話が大好きだったりはしないでしょ？」

「そうだね」

真顔で問われて、苦笑いがこぼれる。

幸か不幸か、もう慣れてしまってはいるのだ。汚い噂話にも。卑怯な世界にも。

けれど……。

「冗談じゃないぞ、畜生！　と思うよ。本当のところ」

冴子もそう言っていた。

冗談ではない、と。

『笑わせんじゃないわよって感じ』

怒りや憤りをとおりこして、ただその言葉しか出ないというように。

『ふざけてるとか馬鹿だとか、そんな表現じゃ赦せない相手が、ひとり、いるけど――』

〝あれは化け物です〟

彼の母親にあたる人物は、そう断定したという。

〝あれは外に出してはならないんです〟

〝人間ぶってみせているけれどあんなものは仮面なんです。早く封じこめないと――わたしたち一族全部が滅ぶことに――〟

今になって。

まるで、彼がこの世に生まれたこと自体を責めるように。



存在してはならないもののように。
（檻が必要だったのは）
きつく、諒は唇を噛みしめる。
よみがえるのは、斎伽忍の一言。
（けれど、それはもう）
それはもうできない――。
諦めたような言葉。
なにもかも受けいれて諦めたような。
「実の母親が最大の震源地になって……それがうまく利用されたふしもあって……結局、あの人に対する不信や疑惑は、かなり大きく育ちつつあるようだ。本家方のほうでも」
冷静に、十九郎がまとめてみせた。
それから、やや間をおいて言い加える。
「ちょうど、俺たちと同じように」
「――――」
諒は声をつまらせた。
そう言いきってしまうのは厳しい。たとえそれが現実でも。
「だけどあいつは……」

自分の知っている斎伽忍は。

強くかぶりを振り、諒は喉元から言葉を押し出した。

「あいつは狂ってなんかいない。絶対に」

「けれど一時期、あの人がひどく摑みにくかったのは事実だよ。それは水沢だって感じていたはずだ」

「違う!!」

かっと血が逆流した。どうしてこの相手は、攻撃してほしくないところばかり狙いすまして突いてくるのか。

「それは違う!!　いくら里見さんが正しくたってそいつだけは違う!!　あんたが言ってるのは連中の理屈とぜんぜん変わらない、俺が言いたいのは――」

「聞くんだ」

声を荒らげた諒を、十九郎もまた鋭い声で制した。

「いいから聞くんだ。あの人は狂ってなんかいない。あの人はあの人なんだ。――そこに時折、あの人以外の意志が入りこみはじめている。俺が考えたのはそういうことなんだ」

「……」

「斎伽忍は、斎伽忍だ。俺はそれを信じている」

十九郎はそう告げた。しっかりと諒の瞳を見つめながら。

III

港区芝浦にある大型ディスコへ彼女が現れたのは、ちょうど日付が変わる頃——二十四日午前零時、だった。

服装は超ミニのワンピース。当然、ボディコンシャス。色彩は刺激的な紫。上はルージュから下はヒールまで、ことごとく男の目を挑発するヴァイオレット、だ。

グラマラスな長身がゆっくりとダンスフロアを横切ってゆく。すれちがう金髪の青年が軽く口笛を吹いた。

お供の男たちを二、三人はべらせていても不思議のない美女だった。スーパーモデル級だ。だが彼女をエスコートする人物はなかった。人を捜しているようでもなかった。暇ができたのでいつもの遊び場にふらりと立ち寄ってみた——そんな感じだ。

「ひとり?」

誘いをかけるナンパ男に手を振って、彼女は踊りもせずに店の奥へと進んだ。

革張りのシートで悠然と飲んでいる青年の姿を、一瞬だけ視界に入れる。
鷹木文彦、である。
やかましいＤＪの声に乗って光が乱舞する。お立ち台の上では露出度を競いあった女たちが恍惚の世界へまっしぐらだ。
彼女は鷹木文彦の前をあっさり通りすぎると、バーカウンターにひじをついて軽いドリンクを注文した。

電話をかけるために文彦が席を立ったのは、それから十五分後だった。
店の隅、壁際に、半透明の壁でしきった電話用のコーナーがある。
「もしもし？　マキちゃん？　誰だかわかるかなあっ、お・れ・だ・よん」
かぎりなく軽薄路線を狙って、文彦は受話器に囁きかけた。この馬鹿な喋りかたが実はけっこう快感だったりする。
『……やあだあ……ふー？　何時よお、今……』
三流グラビアモデルの浜口マキは、思いっきり睡眠中だったようだ。いつもに輪をかけて舌っ足らずで、おまけに機嫌が悪い。
『かんべんしてよーお……明日、午前中に仕事なんだからねえ？　ふーだってカメラマンなん

だからさー、あたしの仕事どんなんかわかってるでしょお？　顔がむくんじゃうよ、もおーっ』

「悪い悪い、でもグッドニュースだからさ」

『んー？　なあにー？　早く言ってー』

「親父のコネついたよ、来期のゴールデン枠のドラマのさ、制作スタッフがマキに会いたいっつってんだけどなあーっ」

『……ええええーっ、うそうそ、本っ当!?』

いきなり態度をひっくりかえしてマキは話にとびついてきた。文彦は小さく舌を出した。

「俺がマキに嘘ついてどーすんのさ。俺のこと信じた甲斐があっただろー？」

『うんうん、うれしー、ふーってばやっぱすごいじゃん!!　あっ、どーしよーあたし、目の前バラ色。くらくらーっ』

「明日の午前中が仕事？　んじゃ午後の二時にＣＢＳにおいでよ。６Ｆの第三会議室。ＯＫ？」

『やだ、今メモるから待って。……にじ？　だいさん？　はぁい、わかりましたっと』

「そしたら仕事さしつかえないうちに切るよ。がんばれよな」

『あっ、うん、どうもありがとうね、今度お礼するね』

邪気のないものだ。通話を切り、テレホンカードをぬきとりながらコーナーを出ると、文彦

はそこで派手な超ミニの美女にでくわした。
「おっと、失礼――」
ぶつかりそうになったことを詫びながら、しかし文彦は眉をひそめた。
何かはわからない。ただ、ひっかかるものがあった。
いぶかしく、彼女を見る。
「……どこかでお会いしたかな」
「ええ……」
唇に笑みをうかべて彼女は控えめに答えた。ハスキーな、やわらかい低声だ。
「あなたとは、かつて、何度も」
「――――」
わずかな空白が生じた。文彦はざっと視線を彼女の髪からつま先まで走らせた。
絵に描いたような美貌。
寸分の無駄もない、理想的な肢体……。
だが、その紫色のハイヒールの足元には。
「！」
かっ、と文彦は両眼を見開いた。それまで彼を包んでいた虚構のベールが一瞬で剝げおちた。

その変化を見つめて女も無言だった。

ディスコの騒音がそらぞらしく流れ去る。遠目には、何の変哲もない、身を寄せあう男女に見えることだろう。しかし現在、この瞬間、両者のあいだに存在するのは甘さとは無縁の——殺気。

心意の刃。

少しでも不用意に動いたら命とりになる。

どちらも譲りはしなかった。〝気〟のレベルは同格。拮抗した——異質なふたつの力。

「……成程」

じわりと笑いながら文彦が口をひらいた。

「影のない女ときたら、すぐに感づくべきだった」

「私も……」

表情を動かさぬまま女が応じた。

「……見事に騙されたようです。実に、巧妙な仮面を用意されたものだ。あなたがずっと彼女のまわりをうろついていたことは承知していたのですが……あれほど完璧に妖気を隠匿されては、いかなる目をもってしても正体を見破ることはできない。それもあなたの実力があってのことだろう。流石であると、申し上げておきましょう」

「伽羅王の〈使〉に称賛されるとは……嬉しいものよ」

人にあらず生命体にあらず性の別もなく、いくらでも望むままの姿を有し得る、その特異な存在の名を、文彦は呼ぶ。

――牙、と。

「うまい化け方だ。俺の目も九百年の間にくもりきったらしい。こんなかたちで不意をつかれることになるとは」

伏線はあったのだ。

この相手と今生で出逢うのは、これが二度目である。

一度目の場所は、六本木CBS。

工藤珈織がらみの顔合わせだ。

そのときは、片腕で自動車を破壊するほどの怪力をふるう、人間ばなれした青年が何者であるのか、文彦は即座に見ぬいていた。だからこそ、自分の身分を悟られぬよう、そして相手の目的をはっきりさせるため、わざと少々ヒステリックにからんでみせたりもしたのだ。結局こちらの手札を読まれずにすんだかわりに相手にも逃げられて、一長一短、バーターで終わったが。

だがそれ以降、たいしたことと重視はしなかった。というのも。

「舐めていたわけさ。正直なところ。他愛もない高校生のお守り役になど、貴様がおさまりきっていたものでな」

「失礼ながら、あなたはいまだに伽羅王の本質を理解されていない」
冷ややかに牙が告げた。
「己の範疇でのみあの方をとらえようとすると、そのような慢心に陥る結果となるのですよ」
「ご忠告、ありがたいな」
(俺を教育するつもりか?)
教育どころか、この忠実な〈使〉は要するに、自分の主君を甘く見るとただではすまないだろうと威圧しているのだ。重々承知のうえで文彦はそれをからかってやる。伽羅王への徹底した傾倒ぶりは、いくら年月をこえても変わらないものらしい。——たとえ伽羅王のほうがどのように変わったとしても。
「するとやはり、あのネタに喰いついたのが俺の失敗か……」
例の、光剣使いに手を出した一件だ。
「自戒をこめて尋ねるが。あいつは俺をひっかける材料だったのか、まさか」
文彦の問いに、牙は確答しなかった。
返ったのは、微妙に論をずらした言葉。
「そうですね……あそこでおとなしくなさっていれば、こうも早く馬脚をあらわされることはなかったでしょう」
「伽羅王はお怒りかな」

「ええ」
「だろうな。手駒を傷物にされると不機嫌になる奴だ、昔から」
「礼は尽くされます。それだけのこと」
「子供なのさ……。情が深いのか、我が強いのか知らないが」
「あなたはもうひとつ学ばれるべきだ。伽羅王は、いかに倨傲な者に対しても、返礼を惜しまれぬ方……」
さりげないやりとりに凝縮されているのは、幾世紀をもこえて鎬を削りあってきた者同士の、凄みだ。
「ですから私が参りました」
ゆうらりと黒い瞳をあげて、官能的な美女は間近に文彦の面をのぞきこんだ。
ハスキーな声が、濡れた唇からすべり出る。
「お相手願いましょう。妖者三忌将、長の者――勝呂殿」

店内の温度が一瞬だけぐっと下がったのは、そこに集っていた客たちの錯覚だったろうか。
ビリッ、と電撃が空気を伝わったようだった。
受付で入場料をうけとっていた、気取った店員が、不穏な予兆を感じて顔をあげたときだっ

た。

なにもかもが——消えた。

鼓膜を叩きつける甲高い音楽も、煽りたてるDJの大声も、めまぐるしくとびかうレーザー光線も、天井に据えられた幾何学的なシャンデリアの照明も。

すっぽりと闇だけが落ちてきた。

暗黒と無の世界が。

しばらく反応はなかった。だれもが立ち尽くした。だれもが、自分ひとりだけ閉じこめられたのかと疑ったのだ。

「いやっ……!!」

どこかで女の叫びがあがったのがきっかけだった。店内は騒然となった。

停電だから、落ちついて、などと制止する声はまったく役に立たない。闇は原始的な恐怖をかりたてる。しかもここは密閉された空間だ。あちこちで女性客がパニックをおこし、むやみに見えない出口めがけて走りだそうとして傍らの人間をなぎたおし、そこでまた悲鳴が発生した。

——ドウッ!! と、衝撃がその上をつきぬけた。

騒いでいた客たちを絶句させるほどの大音響だった。

痛む耳をふさぎながら上方を見あげた者は、一様に、愕然と口をあけることになった。

きらびやかな街の電光に照らされて明るい夜の空が、そこにはあった。
豪華絢爛な造りを誇った大型ディスコの天井部は、まるまる消滅してしまっていたのだ。

第九章　光刃至現

I

五月二十四日、朝。

やや遅れて、強力な援軍が到着した。

里見夏江である。

「あらあら、息子がひとり増えてるわね」

十九郎の個室の扉をひらいて、夏江はそんな台詞を口にした。

ベッドの中、着替えもせずに熟睡――顔色を見るかぎり、睡眠をとおりこして、疲労の極に達したあげくの昏倒といったほうがふさわしく思えるが――しているのが、彼女の実の一人息子だ。

それから、どうしたわけか床にころがってこちらもぐっすり眠りこんでいるのが――しばらくぶりに遭遇する水沢諒、だった。

夏江の呟きが耳に届いたのか、諒がむくりと頭をおこした。

「……おはよーございます……」
まだ今ひとつ、ろれつがまわっていない。
「今回は病人でも怪我人でもないわね？　よしよし」
しゃがみこんで夏江は彼の額をこつんと小突いてやる。とほほほほ、とよくわからない反応を返しながら床からおきあがり、諒は口元に人差指をたててみせた。ベッドの内の人物を起こしたくないのだ。
「人間の限界を三倍くらいこえて頑張ってた人が、よーやく休んでくださってるわけですから……」
「諒ちゃんは違うの？」
「俺の場合はせいぜい限界の一・二倍くらいが関の山ざんしょ……」
のそのそと床を這って諒は部屋を出てゆく。夏江は腰に両手をあてて肩をすくめた。
「五十歩百歩っていうんじゃないの、それは」

情報交換とその考察の話しあいに数時間を費やして、これからいかに動くべきか、結論が見えかけたところで——ついに十九郎が本格的にダウンしてしまったのは、それまでの彼の無理を思えば当然のことだった。

いやでも眠らせてみせる、という当初の狙いは成功したわけだが、ベッドまで十九郎を運んだところでなぜか諒の記憶もすとんと跡切れている。とりあえずの責任を果たしたことで気力が尽きて、そのまま床にぶっ倒れて眠りこんだらしい。

よく考えたら、ここしばらく安らかに布団のなかで眠ったためしがない。立ったまま寝るような気のはりつめた生活の後は、やたら寒い場所やら、えたいの知れない宇宙空間やら……。カーペットの床なら、まだましなほうだ。

「まずはシャワーでも浴びて、食べるもの食べて、コンディションをベストにして、動くのはそれからよ」

三秒で目の前をクリアにする、夏江のそんな言葉がありがたい。

醒めきらない頭を手首でがつがつ叩きながら、諒はリビングの椅子に座りこんだ。

「夏江さんは、今までどちらに？」

「例の、希沙良の件で、本家方の有力メンバーに挨拶まわりをね。先手必勝よ、石頭たちに啖呵切ってきたわ。解放しろとまではまだ言えないから……あの子の身柄はお預けするけど、万一、伽羅王の命が下らないうちに希沙良の身になにかおきたら、里見の家が黙っておりません、とね」

「……ああ、それで」

大人には大人の根回しというものがあるのだ。

十九郎といい夏江といい、ここの親子は、打つ手のひとつひとつにぬかりがない……。
「卑怯な手だけど、片桐の名前も使わせてもらったわ。一族傍流には、片桐傘下の企業を取引先にしている家が多いものだから、それなりに威力があるのよ。虎の威を借りてと言われるのは仕方ないわ、かけがえのない希沙良のためだもの。どんな汚い手段だって堂々と使っちゃうわ」
かけがえのない——か。
「結局、和泉くんは、すっごい幸せ者なんだよなあ……」
しみじみした気分で諒は呟いてしまう。
多分、今、彼はとてもつらい心を抱えているだろうけれど。
今はとても、苦しいだろうけれど……。
「希沙良の話はもう聞いてるのね」
「……ええ、一応、里見さんのほうから」
話がそこに及んで、夏江の顔もわずかに曇った。
「本当は、いちばん避けたかったことが起きてしまったけど」
「……」
それはそうだ……。
もしかすると、もっともつらい立場にあるのは、実は彼女なのかもしれない。諒はふと、そ

う思った。十九郎も希沙良も当事者である以上、運命を決定する権利なら、自分でもっている。

彼らふたりを愛し、彼らふたりの平穏を祈って、しかし手出しはできずただ見守るだけというのは……どうなのだろう？

「でも、あの二人は大丈夫。もう大丈夫よ。あたしにはどうしようもなかった十九郎を、希沙良が動かしてくれたのよ。その希沙良に恥じないだけの自分に、今度は十九郎がなる番だわ。あの子たちってそういう風にしかいられないと思うの。伊達に十六年、一緒に生きちゃいないはずだもの」

すっぱりと夏江はそう言いきった。感動的な明快さだった。

「……すごいなあ、夏江さんは……」

「あら、どうしてよ？　とんでもないわ、母親って無力よ」

夏江はため息をついてみせた。

「うちの息子がせめてもう少し軟弱で、いちいち、オカアサマ、僕ドウシマショウ、なんておろおろするタイプだったらすごーく楽だったかもしれないんだけど」

「ギャグですか、それは！……」

思わず本気で想像してしまって、諒は頭を抱えこむ。絵にならない。

「だって母親はいつまでも子供のものなのに、子供はいつのまにか母親のものじゃなくなって

るのよ。空しいわよ。諒ちゃんだっていずれ奥さんもらって娘でもできたらあたしの気持ちがわかるわよ。親の思いどおりになるのなんてほんの一時で、あとはとっとと勝手に走っていっちゃうんだから」

「そんなもんなんでしょーか……」

「だから気分はほとんど野次馬とか出歯亀ね。いいのよ、あたしも伊達に十六年、野次馬やってないから」

「うーん……世間一般の母親はそこで開き直らないんじゃないかと」

「世間一般なんて、生意気いうんじゃないわよ」

くしゃくしゃと夏江の指が諒の髪をかきまわした。なにが生意気なのか諒には判然としなかったが、そこで口答えする勇気などまったくない。

「諒ちゃんは？　大丈夫？」

急に夏江が話の矛先をこちらへ向けてきた。

「さあて……」

諒はあいまいな答え方をした。

「基本的には、当然、なにがあっても負けちゃいらんないぞ的精神なんですけどね」

ただ、気になりはじめていることが、ひとつある……。

「実際、里見さんが戦線に返り咲いてくださったのは地獄に仏で。里見さんってとにかくただ

ごとじゃなく頭がよくて、根っから軍師というか参謀というか……俺の目のウロコをばらばら落としていく人なんで、現在にしても、今後のこと考えても、ものすごく心強い状態なんですよ。和泉が動けないのは痛いけど……でも冴子も、絶対、意地にかけても悪いようにはしないだろうし、それは安心できるなとか……。で、神原さんがいるでしょ。なんたって夏江さんがいるし。だから前向き全開で、まずは、なんだか非常に怪しげな鷹木文彦とゆー奴の正体を暴きにいけばいいんですよ。それがひいては、忍の謎をとく入口にもなるはずなんですよ」

「……足りない名前があるわよ、今の一連の発言に」

夏江があっさりと指摘した。諒はがくりと首を倒した。

ごまかしは通用しない。最初からわかってはいるのだが。

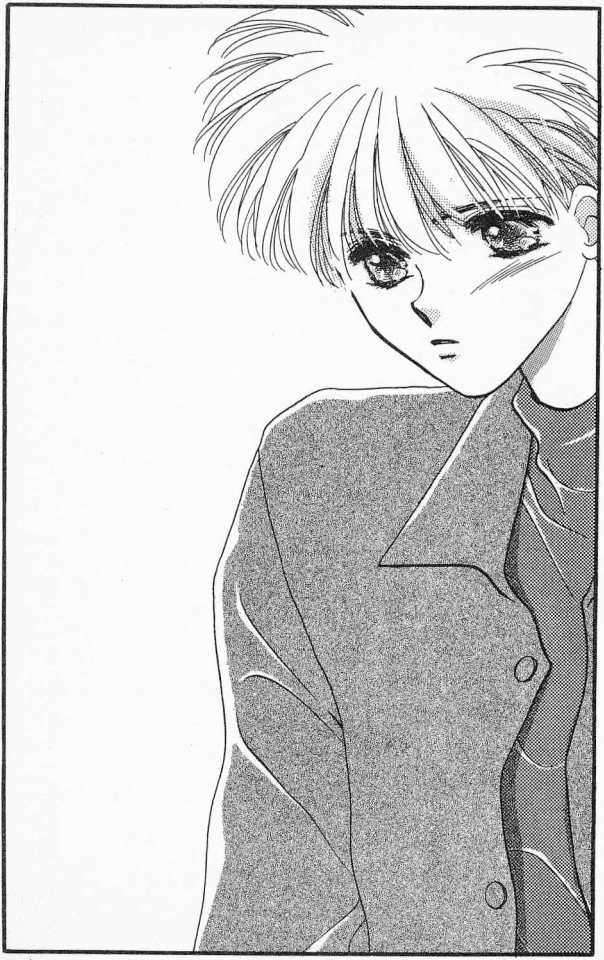
考えたくないから、避けてしまいたいから、言葉にできないのだ。考察の末、浮きあがってきてしまった可能性。里見十九郎はあまりにも有能で……その明晰な知性には手加減というものがない。

すべて、論理によってはじきだされてしまうのだ。いくら諒が認めたくないことでも。

「やつあたりですね」

両の膝をつかむように手をおき、ぽつりと諒が言った。

「実は今、ものすごく怖いことがひとつあるんですよ。あんまり怖いんで言いたくないっていう……それだけなんだけど……」



夏江は眉をひそめた。

彼が真実、なにかをひどく危惧していることは、膝を抑える諒の指先を見ていればわかることだった。そして諒が本気でおそれることがあるとすれば、それは。

——崎谷亮介に関することなのだ。

＊　＊　＊

鷹木文彦。

水沢諒の口から語られた、『どうやら巨大な敵と見てさしつかえない人物』の、名前である。

諒を相手に——つまり、れっきとした術者を相手に、だ——暗示をかけ結界にとじこめるだけの力をもつ。

そして斎伽忍が、まるで旧知の人物のように語る——それは。

まちがいなく上級に位する〈妖の者〉。あるいは〝将〟の座につくほどの。

万一、本当に彼が妖者の一将であるなら、皓、剋司をのぞいて残る名はただひとつ。

いや……鷹木文彦の正体を確定する必要は、まだない。

気になるのは、その鷹木文彦が執拗にまとわりついていた女性のことだ。

工藤珈織という女性キャスター……。

何のために文彦は彼女に接近していたのか。

六本木CBSという舞台にはどのような意味があるのか。

五月上旬、問題の放逐処分をうけてから、ひそかに斎伽忍の行動範囲をさぐってみたところ、彼が何度もCBS局内へ足を運ぶことに諒は気づいたのだという。身分を偽って局に潜入したのは、そこに何か忍にとって大きな意味をもつもの——事件あるいは人物——が眠っているように感じたからだ。すると今度は時をおかず崎谷亮介までがCBSに姿を見せたというのだから、諒の読みははずれていなかったと考えていいだろう。

忍と文彦の目的が近いところにあったとしたら——。

孤立してまで忍が実行しようとしている計画の鍵は、きっとそこにある。

斎伽忍の心そのものを、読みとくための鍵が。

（計画？）

そうだ……。表面的なことにとらわれているからいけないのだ。

彼の最大の目的を、斎伽忍のめざす究極の目的を、十九郎はたしかに知っているはずだった。

ずっと昔から。

崎谷亮介に出会う以前から。水沢諒が現れるより昔から。まだ忍が高い塀の内に封じこめられていた、あの頃から。

『このようなことを私が言うと、おまえは不思議に思うかもしれないね』

ふたりきり佇んだ内苑の片隅で、菖蒲の色をみつめながら告げた彼の横顔のうつくしさを、雪のようなはかなさを、今でもはっきり憶えているのに。

言葉を交わすことを許されて、まだ時は浅かった。彼の真意を問いただすことなど、とてもできなかった。

けれど……。

『冴子が哀れだよ』

忍はそう言った。ただ、それだけを。

あの言葉からすべてが始まった。

終わらせるための道が。

決戦への日々が。

着実に。足場を整えながら。戦力を育て、確保しながら。自分はずっとその過程に立ちあってきたのだ。あるときは意図的に、あるときは何も知らされぬままに。

それはとても自然に、ひそやかに運ばれていたから。

なぜ、今、その歩みをとどめられてしまう必然があるだろう?

(計画が……狂った……?)

狂わされた、と彼は言う。

何が原因であるのかはともかく、忍が急ぎはじめたのは事実だった。
そして、そのために彼が手中へ引きいれたのは、自分ではなく、水沢諒でもなく、術力中和者の崎谷亮介だった。
おそらく、中和者であればこそ。
では何に使う？　その力を。どうやって使う？　亮介本人さえ制御できない、不安定な中和能力を。
亮介の力の危うさを十九郎はよく知っている。……とても、よく。
引き金になるのは、亮介自身の意志ではなく、感情や本能、なのだから。
（まさか忘れてはいないだろう、水沢）
（俺が崎谷君をどんな目に遭わせようとしたのか）
炎将・剣司を前にして。
もっとも人の本能に訴える恐怖――〝死〟をつきつけて、亮介の能力を爆発させようとしたことを。
たしかにあれは狂言だった。剣司に手を引かせることだけが目的だった。だが十九郎は、自分が半ば本気であったことを知っている。もしもあの時、仮に……希沙良の生命が、奪われていたならば……自分は迷わず手を下していただろう。たとえ地獄へ落ちても。
（この世の誰もが崎谷君の生命を尊重するとはかぎらない）

水沢諒にとっては、聞きたくもない、不快な言葉だろう。
酷な予測と知りながら、十九郎はその考えを捨てる気にはなれない。
人道さえ放棄してしまえば、これほど効果的な戦い方はないのだ。
最強にして無敵。
(だからこそ切り札なんだ)
斎伽忍がそんな手段を選ぶことはありえない——と、諒が反駁する。
ありえない。当然だ。それが斎伽忍なら。
では、それが忍でなければ?
それが、忍であって忍でない、別の存在だったら?
わからないのか……!? このままでは——

「!!」
心臓を細い針で貫かれたような痛みがあった。はっ、と十九郎は瞳を見開いた。
胸元を吐き気が漂っている……。ひどく、気分が悪かった。
(何だ……?)
この感覚は一体……。

深く息をしてから、身体を起こす。久々に、自室のベッドの上だ。水沢諒と話しているうちに、いつの間にか気を失ってしまったらしい。

なしくずしに眠ったからだろうか。議論の内容が、夢のなかでまでくりかえし再生されていた。ずっとあんな重苦しいことばかり考えていては、爽やかに目覚められるはずもない。

そういえばアルコールも少々入っているのだから……。

不快感の理由をそう結論づけようとして、十九郎はさらに愕然とした。

涙？

泣いているのか？　自分が？

何故？

それは十九郎自身の感情を無視した、不可解な涙だった。

身体の内側が、流れる血液の内側にひそむものが、なにかを嘆き、訴えてくるような……。

まるでわからない痛み。

（予感？）

何事かの兆し……なのだろうか……。

＊　＊　＊

芝浦で、気になる事件がひとつ起こっている。

無残に破壊されたディスコの映像が、テレビのワイドショー番組でとりあげられている。それを横目に見遣りつつ、諒はCBS『ニュースサーチ』のスタッフ室へ電話をかけてみる。

「どうもっ、おはようございます、バイトの三島ですが。はいっ、いつもお世話になっておりますっ」

まあ、お見事に化けるものだわ、と台所で夏江がひとりごちた。

「ええと、すみませんが、工藤かおるさんは……え？　出社されてない？　……だって今日、ローテーション入ってますよね？」

もう昼前だというのに、工藤珈織はまだ局に入っていない。

「連絡もない……？」

いつも律義な彼女らしくない行動だ。

謎のディスコ半壊事件あたり、いかにも珈織が先陣切って取材に行きそうなネタなのだが。

「あっ、いえ、実は今、ぐーぜん、また例によって鷹木編成局長の息子さんのガールフレンドにつかまっちゃってまして、それで鷹木さんならかおるさんの近くかなと……。え？　文彦氏も消息不明？」

何だ、それは？

「ディスコって今、ニュースでやってる芝浦ですか。昨夜、そこにいたらしい……？　なるほ

ど、それから後のことがわからんというんですね……。そりゃ心配だな」

深刻な声は、演技しなくても勝手に出てきた。――別に鷹木文彦の安否を気遣ったわけではまったくない。

わかりました、ガールフレンドさんには適当に言っときますので、と話をでっちあげて、諒はさっさと受話器をおろした。がしゃん、と不自然に甲高い音をたててしまったのは、修業不足だ。

「……そりゃないだろう……」

苦い呟きが漏れた。

忍、亮介、鷹木文彦、工藤珈織……。次々と重要人物が姿をひそめていく。まるで神隠しだ。

「出よう」

促した声は、十九郎のものだった。

上着に腕をとおしながら居間へ現れる。もう、いつでも動きだせる態勢だ。

「考えていても仕方がない。俺は六本木に向かってみる。CBSという場所そのものを調べてみたいんだ。俺なりに」

何かを振り捨てたような顔をしている。ふっきれたというのか……。

こんな里見十九郎を見るのは、初めてではなかった。斎伽忍が六本木のマンションに結界を

張り、指揮権を放棄したとき、その忍に代わって責任をひきうけようとした十九郎の姿と——重なる。

ひとつ違うのは、今の十九郎には、あのときのような息苦しさがつきまとっていないことだった。

結局、さまざまな痛みに耐えながら、目に見えぬ血を流しながら、彼は自らの仮面を一枚、剝ぎとったのかもしれない。

斎伽忍の不在を補うだけの力をたくわえるために。

「ああ……CBSだったら、俺が」

案内を、と言いかけた諒を十九郎はさえぎった。

「こちらのことはいい。水沢は、崎谷君を捜すんだ」

「——」

諒がかすかに目を瞠った。

「東京中をまわってでも見つけだして、そして、守れ」

十九郎が続けた。異議をさしはさむ余地などどこにもない、力強い言葉だった。

「まだ全部の手を尽くしたわけじゃない。違うか？」

「……ええ……」

ゆっくりと、諒は頷いた。

そうだ。まだ何もしていない。まだ何も。

諒の背中に片手を添えて、十九郎が低く、囁いた。

「焦るな。……頑張ろう」

「はい」

いい返事だ、と微笑してかるく諒の背を叩き、黒いヘルメットをとりあげ、夏江に電話連絡のフォローを頼むと、十九郎は扉をひらいて出て行った。眩しいような気分でそれを見送り、そして諒もあとに続いた。

ギリギリの——再始動、だ。

II

また呼ばれた。

ひっそりとした暗い部屋のなかで、亮介はふと片手で胸を押さえた。

なにかが響くような……。

こんな感覚は前にもあった。

（誰かが）

それはきっと、信じている、あの親友の声。

感応というものがあり得るなら。

何かを考えているのだろうか。捜しているのかもしれない。すぐ近くにいるのかもしれない。少し、不安な気持ちで。一生懸命な気持ちで。

亮介は時計を見た。二時。まだ早い。約束の時までには。

（今は駄目だ）

今、会ってしまうわけにはいかない。

最終作戦はもう発動されてしまっているのだ。

斎伽忍が用意した、すべてを終わらせるためのシナリオが。

全部がよくなるように——また戻れるように。

亮介はソファから立ちあがり、左右両面の壁が鏡で覆われた通路を通りぬけて扉をひらいた。大型マンションの九階、七号室。場所は六本木。

後ろ手に扉を閉ざし、亮介は部屋を出た。

室内には誰も残されていない。その部屋の主は昨夜から、ここではない別の世界で待っている。きっかけの時を。

「諒……」

本当は一言だけでも、彼に告げておきたかった。

心配はいらない……と。

だから、もう二度と敵の手に墜ちることなどないように……走りすぎないように……。

逸らないように。

伝わっているだろうか……？

＊　＊　＊

「……ひどいな」

六本木ＣＢＳへ到着するなり、十九郎はそう低く呟いていた。

広い敷地を贅沢に使ってそびえたつ高層建築。

眺めただけなら、これといって問題のないインテリジェントビルだ。だが十九郎の感覚をもってすれば、この敷地全域にさりげなくまとわりついている不快な気配は一目瞭然もいいところだった。

妖気の巣、ではないか……。

それも指向性のほとんどない、安定しない、濁った空気だ。なにか強い吸引力にひかれて集

まり、そのまま溜まっているような印象があった。もともと都心のこういった派手な場所には〝気〟が集中しやすいものだが。

（立地、だけが原因とは思えないな）

気の偏りを冷静に読みとりながら、十九郎は局内へ足を進めた。どこにもぐりこんでも大抵の場合あやしまれずにすむのが、十九郎の特質である。

妖気が溜まっているのは数か所……。見えない所までである。磁場が強すぎて。

特にひっかかるのは最上層部だった。

ベールに包まれたようにしか感じとれない。

（結界？）

さまざまな人が行きかう応接ロビーで歩みを止め、十九郎は上方を仰いだ。わずかな違和感があった。

空間の濁りのせいではっきりしないが……。

そこに在る力の波動だけは、毒々しい妖気とは無縁のものに思えて。

清浄で、静かな——。

（ああ……そうか）

考える必要もなかった。

彼だ。

もしも水沢諒と同じ時期に十九郎も一緒に動きだしていたなら、この一点だけでも、重要な発見として役立てることができただろう。

遅きに失したかもしれない。まだ間に合うかもしれない。

斎伽忍の居場所をつかめるかもしれないのだ。

（逢えたとして、それでどうする？）

新たな命題がたちあらわれてくることはわかっていたが、十九郎はあえて何も考えずにおいた。

それはそのときのことだ。どれほど無様であろうとも。たとえ罰されても。それはそれでかまわない。

もう、失って怖いものなど……どこにもない。

今はもう、何も。

一瞬だけ瞳を伏せて、そして十九郎は再び歩きだす。

乗りこんだエレベーターは偶然、ひどく空いていた。最上階のボタンを押した十九郎の後から、ぎりぎりで飛びこんできて六階のボタンを慌てて叩いた若い女性が、唯一の同乗者だった。

「ごめんなさい、すみませぇんっ」

彼女がはさまれないよう扉を押さえた十九郎に、舌っ足らずな喋り方でその女性は——浜口

マキは——媚をふりまいてみせた。

「いえ」

十九郎はそつのない応対だけで片づける。

「あの、ついでに悪いんだけど、今って何時？　もう二時すぎちゃってるかな、やっぱり一？」

落ちつかなく髪をいじりながら、彼女はさらに問いかけてきた。相手かまわず身をすりよせようとする癖があるようだ。

自分の容姿にそれなりの自信を持っているタイプだ。男なら自分に優しくして当然、と思っているのが透けて見える態度だった。

「二時……十二分、になりますが」

「じゅうにー？　どーしよ、ピンチじゃーん……あっ着いちゃった、どーもありがと」

扉がひらくと同時に、あたふたと六階のフロアへとびだしてゆく。ブアゾンの香りが残った。

特にこれといった感想を抱きもしなかった。十九郎は扉が閉まるのを待ち、さらに上昇するエレベーターの内で、ブアゾンに妨げられた感覚を改めてとぎすませた——だけ、だった。

「……!?」

不意に、十九郎の掌がボタンの列を叩いた。驚いたように次の階でエレベーターは停まり、

ぱくりと口をひらいた。
「しまった……」
かすかな独白とともに彼は走りだす。最上階へむかうエレベーターは置き去りにして。

＊　＊　＊

空の色が変わりはじめている。
にぶく暗い色に。
雨が来るかもしれない。西側の空は晴れているのに、一部だけに暗雲が集まりだしたようだった。地下鉄の階段を駆けあがり、歩道に出たところで諒は天を見た。いやな色だ。
案の定、ごく小粒な雨が足元へ落ちてきた。かるく舌打ちして、諒は走りだした。
東京タワーが建物の向こうに姿をのぞかせている。飯倉の大きな交差点を横手に見ながら、まっすぐに目指すのは——十二階だての高級マンション。
全階層まるまる、たったひとりの人間がオーナー、という、余りきった資産を投げ捨てているような。
斎伽忍の私邸、だ。
中野、吉祥寺ときて三番目に亮介と縁が深いのが、この場所のはずだった。

初めからここへ来ればよかった。亮介を手元に置きたがっているのは忍なのだから。
術力中和者であればこそ、と十九郎は言ったが、諒の実感はそれとは少し違う。
そうではなくて。忍が亮介を手離せない理由は……。
くたびれたスニーカーがマンション入口の段差を踏みしめて、止まる。
「……」
前髪に残った水滴を払い、ジーンズの腰に両手をあてて、諒はしばらくの間、そこから動かなかった。
宙を見据えるように。
じっと、耳をすますように。
寒々しいエレベーターホールには目も向けずに。
一分近くも経過しただろうか……。
ふっ、と諒はその顔を上げた。前触れのないしぐさだった。
「……そいつはないんじゃないか……？」
小さく呟きながら、彼は歩きだす。
エレベーターと逆の方向に。
ひとけのない、物音ひとつしない、階段のほうへ。
「ここにきて隠れんぼはないだろう」

「!!」

ばん、と諒の手が壁を押さえた。息を呑み、身動きできないまま手摺のかげから見つめ返したのが――崎谷亮介、だった。

「……諒……」

「俺が九階まで行くのをやりすごして、逃げようってわけか？」

「……」

亮介は答えなかった。答えられなかった。

いつものようにはいかない。

CBSで出会ったときのようにはいかない。

笑いあって話すことなんかできない空気だった。

諒の怒りのせいだ。

彼を避けて逃げようとした亮介への、かたちにならない口惜しさのせいだ。

「違う……」

かすれた声で、亮介はそれだけ呟いた。

罪悪感が顔に出てしまっている。きっと諒はそれを見のがさない。何を言っても言い訳の域を出ない。何も言えない……。

「違うんだ」

「何が？」

追いつめる。他人のような諒の声。

「はっきりさせようぜ、亮介。俺から逃げてるんじゃなかったら、今のおまえは何なんだ……？」

駄目だ。

亮介は奥歯を噛みしめた。駄目だ。

諒の目は何かを知っている。きっかけを摑んでいる。だから。

「言えない……」

亮介はかぶりを振った。

一瞬後、左の頬が鳴っていた。

殴られた——平手とはいえ——諒に。

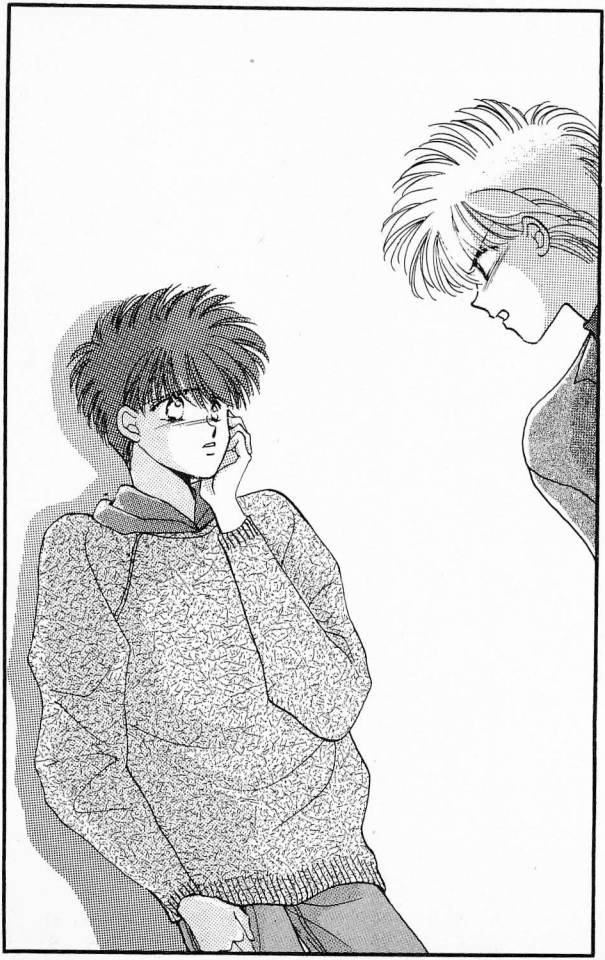
「ふざけるなよ」

耳に届く、冷たい一言。

ぐっと呼吸をつめ、亮介は沈黙した。顔をそむけるようにして。何も告げようとはしなかった。

諒も無言だった。計りきれない長い時間が、にぶく、重く流れてゆく……。

「あ……」



「え？」

ぽつんと発された亮介の声に、諒が反問しようとしたときだった。はじかれたように亮介がスタートを切った。隙をついて諒の傍らを駆けぬけることに成功する。そのままエレベーターに走りこみ、扉を閉めた。行き先は九階だ。急げ、と叫びたかった。

が――。

閉じる寸前、スチールの扉は苦しげな悲鳴をあげて歪んだ。がしゃん、とメカニズムが無理に止まる音がした。

「勝負になると思ったのか？　亮介」

足で扉をこじあけながら、諒が言う。

垣間見えたのは朱雀剣の銀光。

そのとおりだ。小手先の卑怯なやりかたで諒から逃げられるわけがない。そんなことは亮介も知っていたはずだった。

「やっとの出番が器物破損じゃ朱雀も気の毒に、さ……」

停まった箱のなかに踏みこんでくる。口調が穏やかなために……穏やかすぎるために、なおさら亮介は動けなかった。

もう逃げ場はない。

本当は、逃げたくもない。

硬い壁に背中を預けて立ちつくす亮介の、目前で、諒は足を止める。
息をつきながら、亮介は彼の顔を見上げた。
祈るように。
「……この、馬鹿」
諒が呟いた。
ゆっくりと両手をさしのべ、亮介の二の腕をつかむ。
強い力だった。痛むほどだった。だが亮介は何も言わなかった。雨に濡れた諒の髪が、亮介の頬をかすめて、そして重みとなって肩にかかった。
「殴る側の気持ちなんか……亮介にはわからないだろ……」
諒が言う。
「……知ってるよ」
亮介が答えた。
「あのときは、俺が諒を殴ったんだ」
忘れてなんかいない。
掌にいつまでも残る辛い感触。
「痛かった。とても……」
「……」

無言で、諒はそれを聞く。
亮介の肩先に、その顔を伏せたまま。
「諒？」
そっと、亮介が呼びかけた。
（……だから、離せないんだ）
言葉になどできない。
説明することなどできない。
（だから離せない……）
「どうしたんだよ」
気遣うように尋ねる亮介の声。
「よくわからない……」
わからない。諒は首を横に振った。わからない。不安の原因が何なのか、なんて。
ただ、とりのこされる気がする。
決して失くせないものが遠ざかってゆくような。
「亮介」
「……何？」
「忍に協力するんだろう？」

ふと、亮介の身体がこわばった。それが返答だった。
「おまえが、唯一の中和能力者だから……」
「……」
「鷹木文彦を、つまり、勝呂を倒すための切り札になる……そういうことなんだ」
「……」
ゆらりと顔を上げて、諒は亮介と目を合わせた。
「違うのか？」
今度は、亮介の瞳は逃げなかった。
正面から受けとめて、頷く。
「違わない」
そこに嘘はない。
ごまかしも、ためらいも。
「……どんな、目に遭うか、わかってるのか……？」
腕をつかんだ諒の指に、力が増した。こんな時くらい嘘をついてみせろと責めているようだった。
「よく知らない……。だって、まだ、実際にやってみたことなんか一度もないんだから」
「そんなっ……そんな甘い考えで……!!」

「俺は本気だし甘えてるつもりもないよ」
鋭く、亮介はそう言いきった。
「それがいちばんいい方法だと思うから、それで俺が役に立つんだったらかまわない」
「亮介……!!」
「誰だよ、俺の知らないところでまた死にかけたのは!!」
怒鳴りつけようとした諒を制して、いきなり亮介が一喝した。諒は声を失った。
「誰だよ……!?」
亮介はくりかえした。
反論も口出しも許さない。少なくとも諒にはできない。
思いがけない涙を前にしてしまったら。
もう何も言えない。
「どんなに、俺が……。どんなに、忍さんが……」
「……」
忍が……?
その言葉がどこかへたどりつくより先に、亮介は震える口元を片手で覆った。
「……上に……」
「え?」

「九階に、行こう」
唐突といえば唐突に、亮介が促した。
「ゆっくり、話したいことがあるから……」

＊　＊　＊

「遅くなりまし……あれ？」
軽い足どりで会議室の入口に到着した浜口マキは、きょとんと目をまるくした。
「やあだ、何、これ……」
小人数用のミーティングルームは、見事にもぬけの空だった。
人っ子ひとりなし、だ。
扉の横に貼られたステッカーの番号『3』を確認して、マキは自分のメモと見較べた。CBS六階の第三会議室に二時。なにも間違ってなどいない。
「予定変更かな？」
さすがにドラマ抜擢の話そのものがポシャったという想像は出てこない。
担当スタッフが遅れているなら好都合だ。仕事先から突っ走ってきたせいで乱れっぱなしの髪形を、今のうちに直しておきたかった。なんとなく足音をしのばせながらマキはこそこそと

会議室に入りこみ、奥の机に重たいトートバッグを放りだすと、その内側に腕をつっこんで鏡とブラシを捜した。

なんだかこの部屋はエアコンの調子が悪い。

ふと、マキはそう思った。

ここだけ肌寒い。

手を止めて、彼女はまわりを見回した。

(音楽……?)

遠くから、きれぎれに届いてくるメロディは何だろう?

空耳のようだった。大昔に聴いた曲が耳をはなれないような、そんな感じだった。

どこかの部屋でオルゴールでも使っているのだろうか。

けれど。

なつかしい調べ……。

「誰かあああっ!!」

甲高い女性の声が空をつんざいた。その悲鳴を頼りに十九郎は六階のフロアを駆けぬけ、突きあたった角を曲がって第三会議室の前までたどりついた。

ドッ、と室内から吐き出される圧力を感じる。
凄じい妖気！
手に負えるだろうか!?　迷わず十九郎はその場で両腕を顔前に交差させ、気を一点に集中した。がっ、と不可視の炎が昂り、彼の身をとりまいた。
練りあげた術力を指先まで充たし、そして――言霊に替えて放つ！
「臨、兵、闘、者、皆、陣、列――」
猛々しい妖気がわずかに退いた。十九郎の瞳はその先を見透かして暗黒の源をさぐりあてる。
「在――」
とらえた。
確かな手応え。
この罠を仕掛けた者を暴く契機となる。
目を逸らさず、十九郎は叩きつける。最後の一刀を。
「前!!」
だが。
ざわりと拡散した妖気の内側からとびだしてきた人影が、十九郎の狙いを狂わせた。
「やだぁっ！　怖かったあっ!!」

「！」

胸元にすがりついた浜口マキの身体を、十九郎は抱きとめざるを得ない。それは成り行きというものだ。

他人の生気（オーラ）が感覚の集中を乱してしまう。つかみかけたきっかけが掌（てのひら）からぬけ落ちてゆく。

計算外だ。十九郎はかすかに眉（まゆ）をひそめた。

仕方のないことでは、あったが……。

見れば、第三会議室から、妖気はあとかたもなく消えていた。逃げられた……らしい。

「大丈夫ですか」

「だっ、大丈夫じゃないわよおっ！」

浜口マキは半泣きで言い返す。

「何があったんです？」

「その前にちょっとぐらい心配してよぉ……。あんた冷たいんじゃないのー？　ハンカチ貸すとか、そーゆーの常識でしょー？」

強引にハンカチを奪われた。貸すというよりは進呈したといったほうが正しいだろう。

「言っても笑わない？　ユーレイ見ちゃったのよ、女の顔。それで金縛（かなしば）りにあって、動けなくなって、どんどんユーレイが近づいてきたから逃げようとしたけどできなくて、誰か呼ぼうとして……」

それが先刻の悲鳴につながったのだと彼女は説明した。涙で化粧が落ちるのを気にしながら。

（……？）

あれだけ爆発的に妖気が高まっておいて、その程度なのだろうか？

エレベーターの内で覚えた危機感は、もっと……。

（もっと、何か……）

「やだ、あたし、電話しなくちゃ」

突然、浜口マキはそう言い出した。

「いつまでもこんなとこにいらんないもの。気味わるくって。変更してもらわなくちゃ」

気分の切りかえはひどく早いようだ。乱れた髪を手ぐしで直しながら、もう仕事の打ち合わせのことを気にしている。十九郎としては、口をはさむ義理もない。彼女の好きにさせるだけだ。

「ねえ、あたしバッグ置いてきちゃったんだけど取ってきてくんない？」

両手を合わせて、マキは十九郎に頼みこんだ。

怪しげな会議室にはもう足を踏み入れたくないので、手近にいる他人を代わりに行かせようという理屈である。

やむをえない。無下に断る理由もなく、十九郎は彼女の依頼に応じた。——いや、応じよう

とした。

会議室の入口で、歩みが止まった。

急に立ち止まった十九郎の背中を見て、マキはひとつまばたきをした。

肩ごしに、十九郎がふりかえった。

彼女の姿を。

永い一瞬だった。まるで両者の間に引力が働いているようだった。説明できない繋がりが……。

「……」

抑えた声で十九郎が何かを問いかけた——その時だった。

ドウッ!! と重い衝撃が建物全体を揺るがした。凄じい音響が上から降ってきた。

「!?」

通路の壁に肩から叩きつけられながら、十九郎は反射的に天井へ視線を投げた。

爆発!?

いや、違う……戦闘だ……!

揺れつづける足元にバランスを強制して、体勢をたてなおす。普通では考えられないレベルの力の渦を感じる。

(最上階だ)

まさか。
十九郎は息を呑む。
それは――まさか。

III

みるみるうちに、天空は闇に染まっていった。白昼でありながら陽光の大半は失われ、街は鈍い暗雲に包みこまれたようだった。
黒い雲の切れ間にうつる色は不吉な赤銅色。
低く、重く、唸りが大気をふるわせる。春雷の先触れに人々は不安げな目を上向けた。
「荒れるんじゃないか……」
小雨を避けながら、営業まわりの若いサラリーマンが呟いた。
彼らはまだ、何も知らない。これから起きるすべてのことを。

ザウッ!!　激しい波動が紙一重でかすめていった。

「上等!!」

一声咆えて文彦が疾る。銀光が急迫した。ガッ！　と自らの腕で牙は光剣の重みを受けとめた。一刀のみで星をも砕く勝呂の雷吼剣である。

九百年の時を経ても衰えは無縁。

文彦はにやりと笑う。防ぎきれずに牙の左腕がひじより先――光に巻きこまれて消失した。顔色も変えずに地を蹴り、間合いを広げたのちに牙はまた反撃に出る。常人の目にははかれぬ神速の動きが光剣の刃先をかわし、狙いをすまして衝撃波をたたきこむ。文彦の死角へと。

「喰らわんさ……!!」

歯の間から吐き出して、文彦はそれをはじきかえした。

そして、さらにくりかえし、だ。

両者の戦闘はすでに十二時間以上つづいていた。とぎれることなく、休むこともなく。

深夜の芝浦にはじまり、戦場はさまざまに変化した。刻一刻。邪魔が入らなければどこでも良い。

東京湾をのぞむ埠頭から、桟橋、運河、そして首都高速の路上へ場を移しても、彼らの戦い

ぶりに変化はなかった。いや、むしろ、激烈さを増してゆく。
戦うために生まれた者たちの、性か。
まるで完成された舞いのように、両者ははりつめた空域を縦横に、絡みあいながら駆けぬけた。
ビルの屋上へ跳びうつった牙を追い、文彦はその姿をひらめかせた。鋭く見返った牙の喉元を両断しにかかる。ざんっ、と音速をこえて剣が輝いた。重力にさからって牙の身は宙に回転し、着地した先は文彦の真後ろだった。彼らはまったく同時にその足を止めた。
水気に湿ったコンクリートに、ぴたりと背中合わせに立ち、ふたりは互いに動きを静止した。
いつしか降りだしている雨の雫が、黒髪をつたって落ちる。紫の唇にかすかな笑みを浮かべ、牙が言った。
「お見事です」
左腕は失ったままだ。しかしそれが痛手となっている様子はまったくなかった。
「そっちもなかなか……」
雷吼剣をかまえなおしながら、満足げに文彦が応じる。
「水も滴るいい女、だ。伽羅王なんかやめて俺にのりかえたらどうなんだ?」
「戯れを」

「つれないな」
なら仕方ない、とひとりごちて文彦は肩をすくめた。
次の瞬間、再び彼らは飛翔していた。
際限などありそうもない、いつ果てるとも知れない戦いは、新たな舞台を求めて闇をつきぬける。

天が轟いた。
広く、かぎりない空の高みで。
ブラインドをあげた窓を通して、亮介は狂ったような空の色を見ていた。
赤く濁った、一面の黒を。
空からの照りかえしで室内は暗い紅蓮に染めあげられた。
九階の、斎伽忍の私室である。
その部屋はひどく冷えきっていた。空虚だった。ずっと長いこと誰もいなかったように。
「黙示録の世界だな」
亮介の隣に並び、諒が呟いた。心なしか乾いた声だった。
凄惨な空だ。まるで、滅びの予兆。

「忍さんが……」
亮介が答えた。
「忍さんが、戻ってくるんだ」

（今度こそ終わらせなければならない）
手段は選ばない――。
それが今生で相見えた際に、第一に伽羅王が――斎伽忍が――告げたことだった。
そう……いかなる手段をも厭わない、と。
変貌してゆく大気のなかを最高速で牙は走る。ぴたりと確実にくらいついて追ってくるのは〈雷将〉勝呂ならではだ。
（犠牲はまぬがれぬでしょう）
わかりきったことを口にしたのは、今生における彼ら配下の者たちが、あまりにも和やかに、あまりにも優しく、伽羅王の近くに存在したからだ。
〈使〉である牙自身さえとまどうほどに。
だが彼が長である以上、総帥である以上、忍の決意は変わらないはずだった。変わってはならなかった。

『伽羅王よ』
彼は神にして人に非ず。
されど人として限りなく無力。
それがゆえに己はここへ来た……。責めを負うために。彼を解き放つことはできなくとも。
『伽羅王よ、私の望みはただひとつにすぎない』
本当は。
ひとつきり。それだけで。
もとよりこの身は彼のものだ。彼が求めるのであればどんな役目にも応じよう。
ただひとつの望みを、彼が叶えつづけているかぎり。
『どうか、お忘れにならぬよう……』
目指す地が近づいた。すべての私念を捨て去り、牙は渾身の力によって——跳んだ。
後に続いた文彦は、わずかに眉をひそめていた。
長時間の戦闘をこえて流れついたのは、そびえたつ大型のビルディング。
見えるのは照明された三文字のアルファベット。
六本木CBS……！
(何？)
「どういうつもりだ!?」

文彦が叫んだ。
いいようにこの地まで誘いこまれたことを、文彦は悟っていた。
巧妙に、手間をかけて、少しずつ――ここへ。
「ご心配なさらずとも」
艶然と、牙が答えた。
「あなたがご執心の女性は、すでにこちらにはいらっしゃらない。巻きこむおそれはありますまい」
「――――」
稲妻が黒雲の内部をつらぬいた。その烈しい白光が文彦の半身を染めた。
「……あの方を……奪おうというのか？」
「お間違えだ」
容赦なく伽羅王の〈使〉は指摘してみせる。
「何のために、私があなたに挑んだと思われるか」
奪おうというのではなく。
手中に収めた――もはや奪い去った!?
（時を稼いだか!!）
この一連の戦いは。

文彦の目を、伽羅王・斎伽忍の行いより逸らすがために。
半日以上、釘づけに——。
「ふっ……」
唇をかるく歪め、文彦は微笑した。
「成程……返礼としては見事……」
あざやかな、大胆不敵な笑みだった。——背後に、隠しきれぬ凄みをひそませて。
「まったくもって、上等な真似をしてくださるものだ……伽羅王ッ!!」
「!」
新たな攻撃を予測して身をひるがえした牙は、次の一瞬、両の瞳を見開くことしかできなかった。
襲いかかったのは、荒々しい雷電の一撃。
尋常ならざる激しさで。
天上の稲妻が、文彦の剣に乗りうつり放たれたようだった。
正面から全身を雷撃にうちぬかれ、その勢いのままCBSの社屋へたたきつけられ、広く大きな強化ガラスの窓を突き破り、もんどりうって彼女は局内にころがりこんだ。
そこはCBS最上階に造られた展望室だった。
割れたガラスのせいで暴風が発生している。



慣性で奥の壁まで飛ばされ、壁面にめりこむほど激しく打ち当たったのちに、ようやく静止することができた。落下した先は、冷たい床だった。

人影はまったくない。

悠然と剣を振り、文彦がふわりと窓辺に降りたった。足掻きはせず、牙はその姿を見遣った。

怒りに満ちた雷将の報復としては、覚悟されておくべき事態だった。まだ足りぬほど、だ。動きの自由がきかない。〈使〉である牙の身から、赤い血が流れることはない。だが左腕の損傷に加え、腹部の体組織がほぼ削りとられてしまったダメージは大きかった。

これ以上、この身体を構成する分子組織を失うと、再生がむずかしくなる。

「いい眺めだ」

文彦が呟いた。

「しどけなくも悩ましい……という感じかな?」

「……」

残された右腕に力をこめ、牙は面をあげる。彼を見つめかえす。

様形は煽情的な美女であっても、その視線はあくまで生粋の戦士のものだ。そこに屈伏の色はなかった。

『忍様』

ここまでが己の果たせる領域。
そして――時が来る。
賭けが始まる。
『忍様……！』
雷吼剣を、文彦が持ちあげる。
「最大の懐刀を亡くした伽羅王か。思えば、未だかつてそんなに面白い代物を拝んだことはなかったな」
幾世紀。
一進一退の大戦を続けてきた間柄ながら。
「実に興味が湧くというものだ――」
間違いなく仕留め得ることを確信して、文彦が歩を踏み出した。――その瞬間だった。
「それほどに私の心情を気にかけていようとは、得難き幸いだ」
不意に、独白のように、傍らから第三の声が届いた。はっ、と文彦が足を止めた。
展望室の片隅から。
抑えられた、醒めた声が。
「！」
牙の身に異変がおこったのは、そのときだった。

す、とその全身の輪郭がかすんだようだった。整った肢体が、たちまち形状を失った。
メタモルフォーセの発現である。
蒼い光が、そこには代わってあらわれた。拡散した粒子の輝きにも似て。
やがて輝きはひとつに収束する。
次なるかたちへ。
変形の究みへ。
本来、それが最も在るべき姿へと。
雷鳴が間近に咆哮する。文彦は荒ぶる天を背後に負って、屹と瞠目していた。
収束の果てに何がかたどられることになるのか、彼はよく知っていた。
いまわしくも懐しく……。
(遂に、鞘をはなれるというのか)
それは。
すらりと伸びた、蒼ざめた銀の剣——。
文彦の眼前で、成形を完了した聖なる剣は、ごく当然に、主たる者の手中に収められた。
若き空者総帥の掌に。
なめらかな刀身を一瞥し、そして彼は柄をとった右腕を軽く閃かせる。剣の内より溢れ出たのは、目を灼く霊光。

この世ならぬ光、だ。
「雷将、勝呂よ」
薄闇の影に、白く映える彼の妖美。
彼は問う。
「我が剣、見忘れたわけではあるまい？」
「見忘れたくとも、貴公がそうさせてくれぬわ」
にやりと文彦は笑った。いや、勝呂として。
忘れるはずがない。
全地上における、至高にして魔性の剣。
空者総帥伽羅王のみが携える。
「しかるにその剣、名を何と申し上げたか」
言葉の裏にじりじりと戦意を昂めながら、文彦が尋ねた。
かすかな笑みが返った。静かに。
「天冥の剣……」
凄然と。
「……またの名を〈羅生〉」
斎伽忍自らによる、それが開戦の布告だった。

第十章　闇へ

I

その時。

局内にいた人々は、ひとり残らず、ただならぬ衝撃が建物を揺るがしたことを感知した。

そして六本木近郊にあってたまたまCBSのビルを見通せる位置にいた人々は、建物の最上部が、稲光とともに大爆発をおこすシーンを目撃した……。

非常ベルが鳴りひびいた。局内全館に、はげしい高音が満ちる。

「地震っ!?」

浜口マキが叫んだ。

「違う……！」

十九郎はそう言い返して、周囲に目を走らせた。彼女のことを任せられるような人影は、残

念ながら見当たらない。このフロアにはどうしてこうも人気がないのだろう？

「あなたは早く外に出たほうがいい」

結局、そのように言い残すしかなかった。

「嘘っ！　どこ行っちゃうのよ!!」

マキが慌てた。

「上に……」

それが十九郎の答えだった。

「ちょっとっ!!　なに考えてんのぉ!?」

唖然として声をはりあげる彼女を置き去りにして、十九郎はいまだ細かく揺れつづける通路を、階段めがけて走りはじめた。

どうしても上へ——最上階へ行かなければならない。たどりついて、そして見なければならない。

そこで何が起きているのかを。

（この力の渦は）

胸を突き刺してくる響きなら、知っている。

美しく蒼ざめた銀の光なら。その波動ならば。

（何故、あなたが——）

わからなかった。何故、今、彼が戦うことになるのか。

何のために、どうして。

「おい!!　坊や、どこに行くつもりだい、この上はもう駄目だぜ!!」

階段の上り口で、ちょうど上から降りてきた屈強な男性に呼び止められた。

「勝手に走りまわるな、避難の邪魔になるだろうっ！」

「上はどうなっているんですか」

「どうって……目茶苦茶に決まってるだろう!!　落雷でビルのてっぺんが吹きとんでんのさ、こんなの前代未聞だぜ!?」

「ありがとうございます」

さらりと言って十九郎はかまわず階段を上に向かった。制止しようとして男が手をのばしたが、たくましいその腕は、ごく普通の高校生の腕に簡単に振り払われてしまった。何か、目に見えぬ力が同時に働いたようだった。

「邪魔をしないでください」

相手をたじろがせる視線とともに、十九郎が告げた。それきり、顧みることもなく走りだす。再び、上へ——。

「これは……何としたこと……」

興味深げに、呟いた声があった。

ビリビリと振動の伝わる、六階の通路にて。

女の声。

だがそれは浜口マキのものではない。

第三会議室に、ひそかにはりめぐらされていた妖気の糸が――回収される。あの術者が――里見十九郎が――一歩でも内に踏みこんでいれば、瞬時に身をとりまいて動きを封じていたはずの、罠、だ。

もうわずかというところで妨げが入ったのは、残念なことだ。しかし彼女は、失望してはいなかった。

「伽羅王の光、か」

よもや今ここで、斯くもめずらしきものに出逢えるとは。

雷将の立場は危うかろう。伽羅王が、その力の片鱗を垣間見せているうちであれば、気まぐれに遊んでいるうちであれば、歯も立とうというもの。

されど。

「天冥の剣までが示現するとあっては、如何ともなるまい……？」

愚かしくも功名を雷将ひとりで占めようとするからだ。

手を出すつもりは、彼女にはなかった。
もとより介入など不可能。すでに伽羅王は己が身を灼くことになろうとも闘いつづける決意であろうから……。

「え!?」
稲妻がまっすぐに、ひどく近い場所を直撃した。続いて何か巨大な力が爆発したことは、諒の感覚にも鮮烈にとらえられた。
(忍……!?)
そう直感してしまったのは、何故だったのかわからない。
だが他に誰がいる?
他の誰に、こんな嵐をひきおこすことができる?
これほど凄じい波動を伝える——それは、生身の人間にゆるされた術力の限度を、かるく超えている。
(どうして)
斎伽忍は一体、何を始めようというのか。
「亮介……」

ふりかえり、諒は問いかけていた。何を尋ねればいいのかさえ、決められない。ただ知りたいことはひとつだ。

かつて里見十九郎に指摘されたとおり。

「……」

無言で諒の顔を見あげ、亮介は手をのばして彼の腕をつかんだ。

何かを託すように。

「亮介？」

「諒……本当に、俺も知ってるわけじゃないんだ。諒が知りたいことを、俺が全部わかってるわけじゃないんだ」

それが亮介の言葉だった。

口をひらきかけた諒をさえぎって、亮介は後をつづける。

「もしかしたら俺よりもずっと、諒のほうが忍さんのことを知ってるかもしれないんだ。ただ……ひとつだけ、よく聞いておいてほしいんだ」

ひとつだけ。

いまだ知られていない、斎伽忍に関することを。

「わかった」

諒が頷いた。亮介の真摯な言葉に、応えるようだった。

「ありがとう。……俺は、牙から教えてもらったんだけど……」

斎伽忍が伽羅王としてこの世に誕生するより、はるかに昔のことだと、亮介は言った。

想像もつかないほどの過去。

「もともと、妖者たちには、〈空の者〉に対抗するほどの力なんかなかった。それが突然大きく成長して何百年も互格に戦うようになったのは、〈空の者〉の九那妃が味方を離れて〈妖の者〉の側についたからだった。……その九那妃を手引きして妖者がわに迎えいれたのが、将軍のひとり、勝呂……そして九那妃は、伽羅王の、つまり〈空の者〉のなかでいちばん高い地位にある総帥の、配偶者、だったって……」

配偶者？　——妻？

「だから伽羅王にとっては勝呂は最大の敵だし、勝呂は絶対に九那妃を離そうとしない。それはもう、忍さんの意志にかかわらず、伽羅王と勝呂はいつまでも戦いつづける宿命なんだっていうんだ。それは、これまでの歴史を考えたら、どうしようもないことなんだ」

「歴史……？」

「……つまり、これまでの犠牲が」

ぽつりと亮介が言った。諒は眉をひそめた。

世紀をこえた大戦。

倒された妖者と、失われた術者と、そして転生を封じられた〈空の者〉たちがどれほど存在

したのか、など。

今にして知るすべはないだろう。知ったからといって、現代に生きる自分たちに深い意味をもたらすわけでもない。

しかし永劫に生きる彼らにとっては――。

転生をくりかえし忍という現世を得た伽羅王と。

憑依によっていくつもの器に宿り、文彦の身体へたどりついた勝呂と。

九百年の空白があいたからといって、それが何になる？

「忍の意志にかかわらず……？」

「……うん」

確認した諒に、亮介は小さく頷いた。

「だけど、忍さんはそれを終わらせようとしてるんだ。そのためには、勝呂を……」

すべての元凶である勝呂を、倒すしか。

宿命の根源そのものを消し去る以外には。

亮介の言いかけた台詞の先は、諒にも理解することができた。

終わらせてしまえばいい。伽羅王の意にも添うかたちで。完璧な打撃を敵に与えてしまえばいい。戦いの続行など不可能にしてしまえば。

そうすれば……。

（自由に）

解き放たれる。さまざまな、重い足枷から。

勝呂さえ倒れたら……？

「九那妃は？」

ふと思い至って、諒はそう尋ねていた。

「勝呂がいなくなっても、九那妃は……。将軍もまだ、勝呂だけじゃないだろう……」

「九那妃は、消える」

さらりと亮介が断言した。

どこに根拠があるのかは語らずに。

「そうすれば後は烏合の衆になる」

「……」

迷いのかけらもない態度だった。

（消える……？）

「だから大丈夫」

亮介はそこで、力をこめて言い直した。

「大丈夫にするしかないんだ」

II

そのはじまりは大和の代、飛鳥の黎明。
空者九那妃が叛旗をひるがえし、妖者方の総大将として君臨した――。
時に、総帥伽羅王を筆頭に、空者方に在世したは九那妃を含め十三侯。
敵陣より迎えいれた女神を奉り、決起した妖者方には、軍勢の軸として八将が立った。
あまたの妖者が封じられ、斎伽の血脈につらなる術者は次々と生命を落とし、いつ止むとも知れず修羅地獄は続き、しかしその帰趨は決して明らかとはならなかった。
伽羅王の策略による、かの停戦に至るまで。
（卑劣な……あの、あまりにも卑劣な策謀さえなくば――）
今、新たな宿体をもって伽羅王が目前に在り、そして……言う。
「天冥の剣……」
霊光いやまさる剣の影を、その美しき貌におとしながら。

「またの名を〈羅生〉」
茫大な力が湧きあがり……。
（来る）
一気に膨張する光の輪！
「退けぬ!!」
文彦は声を振り立てた。雷吼剣に鬼気がみなぎった。
ゴオオオオオッ、と大気が揺れた。
とりかこむ壁面全体に激しい亀裂が走った。砕け去る——瓦礫が浮遊する——
破壊の光景のうちに佇む斎伽忍の姿が——
「……参る」
その唇が告げた瞬間、すべてが消滅した。
展望室のみならず、CBSの最上階すべてが。
暗澹たる虚空に、大爆発の轟音と光輝がひろがった。闇を引き裂く稲妻が一閃した。
爆発をのがれ、さらなる高みへと文彦は飛翔していた。迫りくるのは蒼ざめた銀の——目にもとまらぬ怒濤。
「うおおっ!!」
気合一声、文彦の剣が〈羅生〉の霊撃をうけとめた。

不協和な響きが天を軋ませる。
重力はすでに無意味なものと化していた。闇の中空が、そのまま戦いの舞台となった。
まるで翼あるもののように、双方はなんら危うげもなく宙に浮揚している。
吹きすさぶ雨風さえ、彼らを避けてゆく。
「……退けぬ……!!」
再び、文彦が噛みしめた歯の間から声をもらした。
「貴公が大神であろうとも！　天帝であろうとも!!　なんとしても退けぬ!!」
「……」
斎伽忍は微笑してみせただけだった。
がっ、と雷吼剣がその全能をふりしぼった。紫電の勢いをもって敵の影を討ちぬく――。
「赦されぬぞ、伽羅王よ……!!」
怨念が叫びを歪ませた。
ゆるされない。
たとえ神であろうとも。
帝王であろうとも。
喰らう側と喰らわれる側。画然と分かたれた立場は承知の上。
（なればこそ退くわけにいかぬ……！）

「かつてあの方を斯き、卑劣な封印を施しておきながら、今にしてまた騙し討ちのごときふるまい……！　その驕慢、赦されることはありえぬ!!」

ドウッ!!

雷撃はあっさりと拡散し、斎伽忍の身には及ばなかった。

相変わらず忍は――伽羅王は、無言。

（何を嗤う？）

あざけり見下す、超越者の視線か。

どれほど挑もうと、幾度剣をまじえようと、その冷酷な嗤いを伽羅王の面からひきはがすことはできずにきた。

時代をこえ、常に。

だからこそ文彦は挑まずにいられないのだ。

かがやかしい彼の姿を地に堕落させ、心ゆくまで凌辱する――その願いを果たさずにいられなくなるのだ。

（だれを嗤う？　伽羅王よ）

問いかける心を知りもせず。

漆黒の髪を流して、天人の化身はさらなる光を宿らせる。文彦の全存在をたやすく消滅させ得る偉大な力によりて。

天冥の剣に……。

館内の照明がつぎつぎとショートした。螢光灯が破裂し、電流が火花を散らした。

強化ガラスの窓も、なにかに誘発されたような唐突さで順繰りに砕けていく。その現象はCBSの局ビル全体に広がっていた。

放送などまず無理だろう。今頃、全国のテレビには一局だけ何もうつさないチャンネルが発生しているはずだ。事後処理が大変になりそうだと、十九郎は胸の片隅でかすかに思う。

だが今はどうでもいい。事後のことなど。

「！」

暴風が一気に吹きつけてきた。真っ暗な空がすぐ近くにあった。無残に砕けた最上階の現場に、十九郎はたどりついていた。

仰ぎ見た先には、奇蹟があった。

赫い闇を背景に——

あざやかに瞳を射る白皙の霊神……！

呼吸も鼓動もすべて奪われる。

銀青の剣をとり天を翔ける彼の姿に。

放たれる力の奔流に。

「忍……」

それは意図しない呟き。

もう封じていた想念だ。忍様……と。

なにもかも捧げつくしたとしても、このあまりにも巨大な存在には決して足りない。

決して事足りはしない……。

雷将勝呂の剣が稲妻を導いて撃ちかかり、斎伽忍は正面よりそれを妨げた。その一合に発揮された双方の力だけに限っても、並の術者の一生分をうわまわるのではないか。

指先が震えるのを十九郎は感じた。瓦礫にうずもれて崩れかけた階段の出口で、彼は眼前の激闘に魅入られていた。

そこはすでに半ば、次元の外側と通じようとしていた。

この世にあってこの世にない境地、だ。

地上からは雷光の轟きとしかとらえられぬだろう。凄絶な光剣同士の斬撃は。

おのおのに大軍を指揮する将星なればこそ、熾烈な戦いに怯みの色は無縁。

劣勢にありながら決して退こうとしない雷将の誇りは、称賛されるべきものだった。どれほ



ど追いつめられようと執拗にくらいつき食いさがり、わずかな勝機も見すごすまいとするのだ。

その不屈の精神によって大戦を演出してきた男である。まぎれない王であると、記憶を基盤とした実感が伝える。

それがゆえの笑みを、斎伽忍は浮かべていた。少なくとも、忍である自身においては。

そして〈羅生〉の働きもまた心強いものであった。伽羅王の剣として不足なき光輝——。

『雷吼の剣に』

〈羅生〉の意が、すなわち牙の思念が、銀青の煌きに宿りて告げる。

『鈍りが生じた気配あり……』

『幾撃もまたずして』

『時機到来かと』

(よろしい……)

文彦に決定的な敗北を与えることは、すでに定められている大前提にすぎない。

孤軍にして無援、さらに長時間にわたり伽羅王の〈使〉と死闘をくりひろげた直後の相手である。

策を講じる間もなく、ただ彼女を奪われたという激昂のままに対決に至った時点で、文彦はもう敗れているのだ。

そう仕向けたのは当然、こちら側なのだが……。
（では招こうではないか）
命が下された。絶対の忠誠と、歓喜をともなった戦意とが、渾然となって〈羅生〉を動かした。

何度目の激突となったかわからなかった。
「覚悟はよろしいか……！」
文彦が叫ぶ。
悲鳴とも関の声とも知れぬ怪音をたてて雷叱剣が走った。泰然と闇に浮かぶ痩身の青年の姿を、真っ二つにするために。
だが。
反攻はそのとき不意をついて行われた。
「!!」
雷叱剣のめざした先に、斎伽忍はもはや留まっていなかった。
文彦が目を見開いた。ごく間近に——懐へとびこむ間合いで——美貌の残像がかすめたのはほんの一瞬。

衝撃が襲うのが先だった。くぐもった爆発が後につづいた。
決して大きくない、しかし確実な一刀だった。文彦の手にした光剣が砕け去るのを十九郎は目撃した。
勝負はこれで見えた。雷将の敗北は避けがたいものとなった……はず、だった。
(何!?)
愕然と、十九郎は立ちつくしていた。
信じがたい光景が、そこには現出したのだ。

＊　＊　＊

九那妃は消える、と亮介は言った。そして九那妃が消えてしまえば妖者たちも烏合の衆になり果てるだろうと。
「だから大丈夫……。大丈夫にするしかないんだ」
「……亮介……？」
何があったのだろう——そう思わずにいられなかった。
忍は亮介に何を語り、そのうえで何を課したというのか。
(なんで亮介だけに)

そもそもの問題はそこにある。忍が亮介の中和能力に何かを期待するのはまあ百歩譲って良しとして、だがその内容を自分たちに伏せつづけるあたりはどうしても腑に落ちない。

（一言くらい相談があったっていいだろう……）

彼が総帥だからか？　冴子の一件があるからなのか？

本当に大丈夫なら――何故なにも明かせずに。

「しかし闇雲に大丈夫と言われても俺は」

「信じてるんだろ？」

拳を握りしめてようやく吐き出した反論に、あっさりと亮介の必殺技が返った。ぐっと諒は喉元をつまらせた。

とんでもない言質をとられている。

「どうしたんだよ、『強気の二文字』は」

おまけで追いうちが来る。ますます諒は絶句の谷間に落ちこむ羽目になる。

「いつもと立場が逆だろ。『大丈夫！』っていうのは諒の定番のはずなんだから……」

「しかしっ……」

なんだか話題を別の方向へ持っていかれている気がする。

「だからしかしっ、俺の専売特許ってのは、強気の二文字ーっと叫びつつ、後ろのほうで亮介くんを心配させつつ、自分でびしばし突き進んでいくことであって……なんにもせんで大人し

くしておれと言われて黙って見てることでは」
「たまにはそれくらい修業しろよ。いい機会だと思えばいいんだよ」
「よくない……なんにもよくない……」
「おまえ、その専売特許が最近やたらと裏目に出てるって自覚ある？」
「ぐさっ!!」
致命傷寸前だ。ぐらりと諒はよろめいた。
「おまえさえ深入りしないで大人しく待ってればまるくおさまったことが何回あったかわかってる？」
「ぐさぐさぐさっ」
「少しくらい堪え性を身につけないと本当に死にかける程度じゃすまないだろ」
「……なんか亮介に言われると、忍に言われるより三倍は痛いよーな気が……」
「じゃあきっと俺のほうが正直なんだよ」
「フォローにならないんですけど……」
「だって何かあるたんびに見境なく無茶するし、無茶しないようにって思ってそっとしておいたら独走して罠にはまるし、なら全部黙っておこうとすると怒るし、あとはもうはっきり無茶するなと言っとくしかないんだ」
「……」

明快すぎて言い訳もできない。
「だいたい、最近めっきり勝負弱くなってるんだよ、おまえって。それが根本の問題なんだよ。昔はもう少し頼もしかったと思うんだよね……土壇場に強くてさ」
「……容赦のかけらもないっ」
「なんでそんなに見境なく走るようになっちゃったのかな……」
「……誰のせいだと思っているのだ」
恨みがましく諒は呻いた。
張本人はすぐ目の前にいるような気がする。
「やっぱり冴子ちゃんかな」
「……おい!!」
「と思ったけど違うよね」
またもやあっさりと、亮介は前言をひるがえしてみせた。
「わざとからかっとらんか、おまえ……」
「わざとじゃないけど面白がってるよ」
「……亮介くんが最近めっきり強くなってくれて俺はとっても嬉しい……涙が出るほど嬉しい……」
「誰のせいだと思ってるんだよ」

亮介が真顔で言いかえす。
「実にまったく……」
返答を濁して、諒はため息をついた。
単純に割りきれないことばかりが増えてゆく。
忍のことも。亮介のことも。
初めから赤の他人だったらこんなには——。
バリッ!! と窓の外が一文字に引き裂かれたのはそのときだった。同時に胸をつかれて諒と亮介は巨大な霊光を見返っていた。
ぶん、と室内の空気が震えた。
「……え?」
違和感が伝わって、諒は首をねじまげた。
強い輝きが目にはいった。
鏡、だ。居間から玄関までの短い廊下に、壁の両面を占めて据えられた合わせ鏡。
それが今、突然、異様な光を放ちはじめているのだ。前触れもなく。
暗い室内に、そこだけ満月が墜ちてきたようだった。
この部屋には——斎伽忍の私邸には——さんざん足を踏み入れたが、こんな現象を目撃するのは初めてだった。以前からその合わせ鏡には、あまり好ましくない印象を抱いていたのだ

が。
「いったい――」
呟きがとぎれた。
まっすぐに亮介がその輝きへ近づいていったから、だ。
「亮介？」
窓辺を離れ、諒も後を追った。眩しい鏡面の前で一度立ちどまり、亮介はふりかえった。
「じゃあ、行くよ」
「……」
何のことだか、まったくわからなかった。
わからなかったが――。
「おい……!?」
危機感だけは胸を走った。はっ、と諒は両眼を見開いていた。
ひかりかがやく鏡の内側に、亮介が片腕をさしのべた。
何の抵抗もなく呑みこまれる――
水面のように。
異界への入口のように。
（忍が……！）

目の前で、するりと亮介の姿が鏡のなかに入りこんだ。駆けよって諒は拳を鏡面に打ちあてた。バン、と硬い感触が拳の行方をさえぎった。

その一瞬に光は失われ、鉛色の壁がそこには戻った。

冷たい合わせ鏡が諒の全身をうつしだして沈黙する。

それだけだった。

何も残らなかった。

このために九階まで来させたのか……と、諒は思い至っていた。こうやってまた自分を置き去りにするために。

結局、ことごとく、この遣り口か……！

（……忍……!!）

身をひるがえし、諒は外をめざした。マンションを出て空を仰ぎ、激しい力の源を見てとる。荒れ狂う稲妻がまちがいなく教えた。すべての命運を握る者がどこにいるのかを。

舞台上への参加を完全に拒まれたとき、本当に己の手の及ばない先で星が巡るとき、人がたどりつく結論を諒は見出していた。

祈り、しかない。

ただ祈ることしかできない。

そして諒の祈りを向けられる人物はひとりしかいなかった。——彼が決して神ではないこと

を知りながら……。

＊　＊　＊

雷将勝呂の手中より、その最大の武器が失われたのは、疑いようのない事実だった。
圧倒的な伽羅王の術力が、雷叱剣を打ち砕いた瞬間に。
斬撃のすさまじい余韻が文彦の身をかけめぐり、中空におけるバランスを狂わせた。声にならない呪詛を吐き出しながら、文彦はなすすべなく天を落下した。
文彦の姿が墜星と化してCBSの局ビルをとどろかす。もはや原形をとどめない最上階の片隅が、彼をうけとめた。
斎伽忍は、冷然とそれを見おろした。
戦いの結着などはじめから意に介していない態度だった。
伽羅王の優越は決まりきったこと、この成りゆきはあまりにも必定——なのか。
宿敵の息の根をとめることに、満足の色さえ、歓喜の思いさえ見せないのか。
（あくまでも……）
文彦は形容しがたい憤念に身を震わせた。
（貴様には、あくまでも）

「天に挑む愚かしい犬畜生か……!?」
おしころした唸りは彼に届くまい。
所詮、狩りの獲物か。その青熒の瞳にうつる己は。
(伽羅王よ!!)
忍の腕がさらりと動く。天冥の剣が文彦に焦点をさだめる。ひどく無造作な、なにも所懐を感じさせない、それがゆえに残酷な最後の一撃がもたらされる——
直前、だった。

どう、と空気が揺れたようだった。
文彦を中心にとりかこみ、ふくらんで。
それは文彦にとっては熱、だった。十九郎の瞳には紅の色とうつった。そして斎伽忍はそこに、ある像を読みとっていた。
幻の姿を。
雷将の身を覆い包んで現れた、優美な力のヴェール……。
(何だと……)
はっ、と文彦の全身が凍りついた。

よもや、これは。
伽羅王の力に対し、頑にはりめぐらされた防御の壁。結界、ではない。それごとき生易しいものではない。
（守護……!?）
強靱に雷将を擁護する〝意志〟。
「気づかずにいたのか」
文彦の驚愕を見やり、忍は口をひらく。
「己がどれほどの盾を得ていたのか」
「……」
「されば幸いなこと」
文彦は返答すらしない。
（このような……）
（まさか、このようなかたちで）
薄紅のヴェールはみるみる成長し、そら高く立ちのぼった。
極光のごとき壮麗さにて。
斎伽忍から発されるとはまた異なった性質の威圧が、そこにはあった。
人智を超えた現象だった。自身が神のわざの前に立っていることを、十九郎は知った。

大神伽羅王と互格に並びうる存在の片鱗。
天冥の剣を留まらせる強堅な盾。
それはすなわち。
（九那妃、か……！）

III

妖者総帥九那妃が、伽羅王のほどこした封印に閉ざされ永い眠りについてから――数百年。
封印の効力にかぎりがあることは、その停戦の時点ですでに明らかとなっていた。
いずれ復活の時は到る。
その確信があればこそ、どれほど衰勢に追いこまれても、これまでの苦難の歴史を彼ら妖者方はくぐりぬけてきたのだ。
封印の期限が切れ彼女が転生の道をとりもどしたのは、現在よりほんの二十数年以前のこと。後を追うかたちで伽羅王がちょうど二十年前に降臨しているのが、その証左。

それを支えとして捜しつづけた、今生における九那妃の宿体は、封印のなごりによってか絶やされた血脈の悪条件によってか、覚醒の兆しさえ見せなかった。

わずかでも目覚めを誤れば彼女の心は。

（もはや戻らぬやも知れぬ……）

文彦が危惧してやまなかったのは、その一点だった。

妖者総帥としてのおのれを忘れ、彼女が奥底の本心に気づいてしまったら。

だが今、たった今、文彦は自らの不覚をさとっていた。それは歓喜の念に等しかった。

彼女が我らを見放すはずがなかったのだ……！

「九那妃様……！」

震える声で文彦は呼びかけた。

美しく周りを包みこむ陽炎に向けて。

完全なる覚醒はいまだ果たされていなくとも、その意志はこうも力強い守護となってあらわれる。

それで充分ではないか。

彼女を手中に収めたという伽羅王の言辞は、すると謀りであったのか……。

すべては晴れやかとなった。文彦は喉の奥で低く笑いだした。

（充分ではないか！）

さすがにこの守護を破る手段までは伽羅王にもあるまい。
いかな伽羅王といえども。
今度の相手は虫けらのごとき妖将ではない。彼とまったく同格の神の力だ。そう軽々しく結着などつかない。
(如何してみせるか……伽羅王)
挑む思いで、文彦は彼の姿を見据えた。
――よもやその瞬間、事態が逆転することになるとは。
「!?」
文彦が受けた衝撃は、おそらく直感に属するものだった。
斎伽忍の微笑を見てしまった、瞬間に。
「待っていた」
やわらかく、彼はそう告げたのだ。
中空より文彦と同じ高さまで降り立ち、ごく自然な表情で。
待っていた……? 何を?
(違う)
文彦は愕然とした。
違うのだ。なにもかも伽羅王の予測を裏切ってなどいない。すべてがシナリオ通り。

これが伽羅王の計略だったのだ――！

一部分だけ残った展望室壁面に斎伽忍は歩み寄っていた。

導くように手をのばす。

壁の内側へと。

「……約束を守ったね」

そこにいる誰かに話しかける。

十九郎は息を呑んだ。わかってしまった。忍の呼び出す相手が誰なのか。

影が――現れる。

それは切り札。

ただし勝呂を倒すためではなく、九那妃を消滅させるための……！

（危ない……!!）

制止の言葉は遅かった。十九郎の眼前で、かつて目撃したものと同じ無音の白光が――崎谷亮介の中和能力が――爆発した――。

時間の経過は、まったくわからなかった。

マンションの鏡に入りこむのも空間を移動するのも、ひどく簡単なことだった。それを可能

にしたのは亮介自身ではなく、斎伽忍の導きだったからだ。

『約束を守ったね』

さしのべられた白い腕。

（忍さん……？）

なぜ、そこで躊躇する心が起きたのだろう。

怖れではなかったはずだ。諒が言うような、どんな目に遭うか、という不安ではなかったはずだ。

そうではなくて。

（……？）

はっきりと納得することはできなかった。

自分を待っている、その左手に、亮介は掌を重ねた。ふわりと次元の境目から浮きあげられる感触があった。

（！）

忍の指が氷のように冷えきっていることに、そのとき亮介は気づいた。

（この人は）

だが彼の横顔を仰ぎみる余裕はなかった。

つなぎあった指の先から凄じいショックが流れこんできたのだ。

「……あ……！」

亮介の喉から、抑えきれない悲鳴が漏らされた。

身体の内側に……自分の中に……他者の存在が入りこんでくる。ねじこまれてくる。抵抗を許さない暴力的な勢いで。

全感覚が麻痺に近づいた。熱く激しいなにかが体内をかけめぐる。それしか知覚できない。苦しい。壊れてしまう。壊されてしまう……。

「あ……ッ……あああっ」

どうにもならない。膨大なそれはとめどなく侵入し、指先から髪の先まで征服しようとする。意のままにとりこもうとする。

突きあげる嘔吐感と呑まれそうな恍惚。

逃れようとする本能に反して、亮介の身体はそこに崩れこんだ。蹂躙の勢いはいつまでもやまなかった。容赦ない苛みに耐えきれず亮介は忍の名を呼んでいた。無意識に救いを求めていた。

（壊されてしまう）

このままでは。

（壊れて……）

誰か……!!

白光が解き放たれるのを、漠然と亮介は感じていた。

だがそれは自分のものではなかった。自分の実感の内から放たれたものではなかった。

何者かが制御を奪い去り、力にあかせて屈伏させた結果の、爆発だった。

残るのは虚しさだけだ。

全身を喰い尽くされていくような。

これは……精神的な強姦と、変わらない……。

混濁する意識のなかで、亮介は遠くに問いかけた。

こんな風にしか……こんなやりかたでしか役に立たない能力なら……それでも役に立てる力ならば……どれほど汚されても……耐えるしか、ない、の、だろうか……？

「何……!?」

文彦が声を荒らげた。

――中和？　中和能力者!?

その少年には見覚えがあった。ＣＢＳ局内で伽羅王の〈使〉とともにいた高校生。

あまりにも普通の、これといって能のなさそうな少年だったため、今まで意にも介していなかった。〈使〉のほうにばかり目を向けて。まさか、今生の世にそれほど危険な切り札が実在するとは思い至らぬままに。

「よせ……！」

そう叫ぶ以外、手立てはなかった。いかに有力な戦士であろうと中和者の前に条件は同じだ。

九那妃の力さえ。

「伽羅王!!　正気かっ!!」

返答はなかった。

斎伽忍の手に捕らえられた少年が、膝がくだけたように足元へ頽れ――それだけだった。

美貌の神は迷いもせずためらいもせず、平然と、その企てを決行してみせた。

本来決して制御されてはならない中和能力を、自らの意のもとに使いこなし発動させる……！

秘められた存在の一端を、九那妃が垣間見せる、その時を狙って。

「伽羅王……!!」

文彦の叫びは不意に光のなかへ呑みこまれた。それは清浄な爆発の光。

彼を守護する力のヴェールは、目に見えて大きく揺らいだ。消滅を拒む、ぎりぎりの抵抗

だ。だがすべてを無に帰す中和の波を前にして、〈空の者〉といえどその作用からのがれることはできない。

守護が消えるのは時間の問題だった。そしてその時が文彦の最期であり、九那妃が覚醒のすべを失うことでもあったのだ……。

（駄目だ）

これで斎伽忍が勝利する。

その結果はどう見ても明らかでありながら、十九郎の内側にはたったひとつの確信しか生まれてこなかった。

（駄目だ……あなたにはできない……！）

譫言のように忍の名を呼び、負担に耐えかねて亮介が失神した。それさえ顧みることもせず攻撃の手をゆるめない斎伽忍の姿は——もはや、鬼神に等しかった。

阿修羅像だ。

あらゆる俗念を切り捨てた、純粋な闘神。

（違う）

そんなものに彼はなれない。

渦巻く力の奔騰が十九郎を阻んだ。それは承知のうえで十九郎は彼へ呼びかけた。

（伽羅王）

気づいているのか、あなたは……!?

崎谷亮介の悲鳴を彼は確かに聞いていた。

『壊されてしまう』

『壊れて……』

内側から破裂してしまう。こなごなに爆発してしまう。このままでは――で、しまう……。

『伽羅王!!　正気かっ!!』

雷将の叫び。それは自身の敗北をおそれたものではなく。

『伽羅王……!!』

おのれは正気で九那妃を――

九那妃を自ら――

(滅しうるとも)

当然だ。そのために此処まで来た。

それだけを念願として今この現生まで導かれてきた。

何を疑う?

(正気か、と)

そうでなくば赦されぬというのだろうか？
そうであると証すれば赦されるというのだろうか？
〃あの者はとうに狂っているのです〃
トウニ狂ッテイルノデス。
出自ノ初メヨリ。人トシテ生クル者デハナイノデス。正シク在ルベキ者デハナイノデス。
アレハ化生ニシテ魔デゴザイマス。
コノママデハ――
『伽羅王！』
何故そのように呼びかける？
里見十九郎には見えないのだろうか。空者伽羅王などどこにも存在しない。
天界との狭間に切り棄ててきた。それが見えないのだろうか。
『あなたにはできない』
常に裁きつづける眼差し。
斯瞞なき瞳で。
まるでいくつもの像を誤りなくうつしだす合わせ鏡のように。
そのおまえにすら見えないのか。
そのおまえでさえ否定するのか。

（恨み言に過ぎぬ）

斎伽忍は我自身を嗤った。決して告げることなどできない。悟られてもならない。このような繰言。阿修羅と見るならばそれも良い。羅刹と見るならばそれも良い。

『忍様……』

剣と化した〈使〉に動揺が走ったのは、その時だった。

『御心を留めてください……！』

鋭く警告を放つ。

それはひどく危険な瞬間。あってはならぬ現実に、牙は愕然とした思念を送っていた。

己にさからってはならない。

背反が生じる。相克に行き着いてしまう。絡みあい分かたれない二者の識格に。

『自らを灼かれるおつもりか！』

愚かしい。

伽羅王などいない。

空者伽羅王がすすんで九那妃を滅せるものであろうか。彼女の転生を閉ざせば今度こそ、永劫の、孤独しか待たぬものを……。

であるからこそ……。

（！）

意識の岐路に彼は立ちつくした。
では斎伽忍がすすんで破壊しようとしている相手は誰であったか。それを失って待つものは一体何であったのか。
そこに信頼はなかったのか。
それを裏切り何処へたどりつこうとしたのか。
斎伽忍にはできない。それを可能にしたのは何者であったのか。
切り棄てられたのは伽羅王ではなかったのか。なにもかも偽りであったのか。
初めから……。
(天よ)
すべては掌の上。
気づいてはならない。
問いかけてはならない。
それをこそ人は、狂気と呼ぶのだ。
(私は誰だ!?)
紛れもない狂気と呼ぶのだ……!
何事かを〈使〉が告げてくる。だが彼の元には届かなかった。
〝そのとおり……とうに狂っていたのですよ、母上〟

〝あなたの胎内にあった時から〟
そう応じれば満足か。
創造の主よ。万象の支配者どもよ。
『忍！』
たったひとつの声がその時、彼に訪れた。
闇にさしこむ一条の光芒として。
『忍、やめろ！』
『やめるんだ、忍……！　亮介が……』
『亮介が、死んじまう……!!』

IV

不意に、その場を占めた強烈な力が停止した。ひどく唐突な跡切れかただった。
はっ、と文彦が瞳を見開いた。回復した視界に、斎伽忍の姿は端然とたたずんでいた。

上空から雷鳴は失われ、闘気の嵐も消えた今、そこにはぞっとするような静寂だけが残っていた。

まるで爆発など幻であったように。

意識を喪失した崎谷亮介の腕を、忍はふわりと手放した。

天冥の剣を包んだ霊光も……消える。

「立ち去れ」

文彦を見ようともせず、斎伽忍はそう告げた。

「……何？」

「去れと命じた」

彼の言葉はそれだけだった。文彦は眉をひそめた。

なにゆえの変心か。

文彦自身が無事であるということは、九那妃の守護もまた破られることなく残されているのだ。

だが忍の態度が気まぐれであれ何らかの策を秘めたものであれ、これ以上中和能力者の前に九那妃の守護をさらすことはできなかった。

「……よろしいのか、伽羅王」

最後の〈羅生〉の一撃で未だ痺れの減じない右腕を押さえ、文彦は低く問うた。

「この情け、再戦の際は利とならぬぞ」
黙したきり忍は答えない。
どこを見ている……？
つい先刻までの猛々しさは、いずこへ姿をひそめたものか。
そこに立っているのは粛として犯し難い、若き王。それ以外の何者でもなく。
伽羅王、と再び口にしかけて、文彦はふと己を制した。
機をわきまえぬのは愚かなことだった。
もはや忍の関心は、決してこちらに向いてはいないのだ。今、この時は。
「……」
唇に複雑な笑みを乗せ、文彦は躊躇なくCBS最上屋より身をひるがえした。
見苦しい姿は呈したくないものだ。引き際を知らぬ、などと……。
（確かめねばならぬこともある）
そう思うと一時の撤退はさしたる恥でもなかった。
軽々と雷将が宙に舞い、地上を目指して姿を消す。それにより、戦いの余韻もすっかりその場から拭い去られたようだった。

しかし雷将は知らなかった。
文彦の立ち去った後、斎伽忍がその手中から剣を落とし、瓦礫の狭間に膝をついたことを。
「！」
倒れかかる彼の身を支えた腕は、里見十九郎のものだった。間髪を容れぬ動きだった。
つい先程まで吹きすさんでいた風雨は今や沈黙し、彼らを襲いはしなかった。闇空に広がった毒々しい赤光も、もはや存在してはいなかった。
ただひたすらに暗く静かに、天は彼らを見守っていた。すぐ近く……手も届きそうな近くから。
「気をつけて……」
そう呼びかけることができる自分を、十九郎はまったく疑わなかった。
今、こうして、彼の眼前にあること自体、なんら不思議なこととは思わなかった。
自ら望んだとおりの現実としか。
「……すまない」
ぽつりと忍が言った。
その身体はひどく冷えきっていた。十九郎の腕に伝わる感触は氷のようだった。

血の気が感じられぬほど……。
あまりに病的な、危うい状態であることが、間近に触れて初めてわかった。それは愕然とする思いだった。
こんな身体で闘っていたのか、彼は？
衰弱を隠しきれない、これほど華奢な全身に、あの膨大な神の力を宿して天冥の剣をふるったのか。
それはまるで、生命を削るような……。
「失敗だ……私の」
両の瞳を閉ざし、彼が告げた。
「違う」
十九郎は首を横に振った。
誤りなどではない。
「違う……。それは、あなたの意志だ」
忍の選びとった結論なら。
雷将勝呂を倒すことより崎谷亮介の精神を守ることのほうを彼が望んだのであれば。
どちらが正しい、と定める基準はない。ただ……人としての心を捨てなかった忍を、十九郎が、認めたいと思うだけだ。

ただ認めたく思うだけだ。

「やりなおせばいい。まだ方法ならある」

「……」

忍はかすかに笑ったようだった。否定も肯定も口にせぬままで。

「ずっと、おまえと話したいと思っていたよ」

そんな風に、彼は呟いた。十九郎は目を瞠った。

「罪や、歴史や、贖いといったことについて……叶う夢と叶わない幻想について……人の奥底にひそむ本質について……そういったことを」

「……」

「もっと早く、さまざまなことを、おまえとは話しておきたかった」

(何故)

その言葉が何故ここで語られるのか、十九郎にはわからなかった。

まるで友人のように。同志のように。

心震わせる切なさとともに。

(まるで?)

そうではない。これまでの長い時、どうして自分たちは友人であり得なかっただろう?

これまでの戦いが同志としてのものでなかったなら、いったい何であったと言えばいいのだ



ろう？

「あなたの望むとおりに」

彼の肩を強く支え、十九郎は真実の誓いを口にした。

「俺はいつでもあなたの近くにいる。たとえどんなことがあっても」

いつでも——何があっても。

彼のすべてを妄信することは、自分にはできないだろう。時として不協和な響きをおこすこともあるだろう。だが彼を捨て遠ざかることは、決してあり得ない。どんなかたちであろうと近くに存在することだけはできるはずだ……。

そのような関わり方こそが、自分たちには相応しかったのだ。初めから。

「あなたと話したいことなら、俺にもある。多分……数えきれないくらい、沢山のことを……」

「聞きたいな……」

忍の身体からは、さらに力が失われていくようだ。崩れそうになる姿を、気遣わしく十九郎は抱き止めた。これ以上こうして外の冷気にさらされているのは彼にとって決して良いことと思えなかった。

「必ず、いつか」

そう答えて十九郎は会話を終わらせようとした。

いつか、近い未来に。だからあなたは……。
（もう、独りで戦わなくてもいい）
戻ればいい。待つ者たちのところへ。
「帰りましょう……今は」
十九郎が囁いた。わずかな間、忍は沈黙した。
だが――。
ふっと瞳をひらき、彼は再び身を起こした。
支えの腕を頼りに、立ちあがる。どこに、未だそれだけの余力があったのか……。
制止しようとして、十九郎は何も言えなかった。まっすぐに返された彼の視線のために。
「私たちの間で、希沙良を犠牲にしてしまったね……」
「……」
十九郎の表情に、痛みの色が走る。
忍にはなにもかも伝わっているのだろう。事実も、そしてその真相も。
「哀れなことだ」
「……申し訳ありません」
「責めは私にある。なぜ詫びる？」
漆黒の髪を揺らし、彼が問う。満足に答えられる言葉は、十九郎の内にはなかった。

「おまえとて決して自由ではないと、私は知っていたんだよ」

それなのに……。

後に続く思いは告げず、忍は背を向けた。瓦礫のなかに歩を踏み出す彼の姿を、息をつめて十九郎は見守った。

彼の向かう先が、目指す場所がどこなのかはわからない。——わからないが。

行かせてはならない。

ひらめいたそれは、あまりにも確かな実感だった。

ここで別れてしまったら。

二度と会えない。

「亮介を頼む」

短く、忍の背中がそう呟いた。

「……！」

駄目だ、と十九郎は悟っていた。

彼が留まることはない。もう定められてしまっているのだ。彼の内側では。

けれど、それでも。

「待ってください……！」

叫ばずにいられなかった。

「あなたはまだ、何も……」
「……いいや。もう充分さ」
肩ごしに見返り、忍は微笑してみせた。
「充分だ」
砕けかけた鉄筋コンクリートの壁面が、するりと彼の姿を呑みこんだ。十九郎の目の前で、容赦もなく。
影ひとつ、残されはしなかった。
（あなたはまだ、何も）
茫然と彼の消えた場所を見つめ、十九郎は身じろぎもできずにいた。
（まだ何も）
二十歳の若者らしい人生など――。
崩れるように膝が地についた。かためた拳を十九郎は足元に打ちつけた。こんなはずではなかった。
こんなはずではなかったのだ！
「里見さん!?」
新たな人影は、その時、不意をついて現れた。
息を切らせながら階段の出口にたどりついたのは――水沢諒、だった。

＊　＊　＊

寒々しく暗い室内に彼が実体化したのは、ほんの数瞬後のことだった。
主を迎えても、その部屋はぬくもりをとりもどしはしなかった。冷えびえと……寂しげに、部屋は静謐を保っていた。
今、この場所に彼を護る〈使〉、牙はいない。実妹にして最大の理解者であった冴子もいない。
フローリングの床に、靴の踵をかすかに響かせながら、彼はゆっくりと部屋を横切った。たどりついたのは居間と扉を結ぶ通路にあたる場所。
壁一面を占める巨大な鏡の前、だ。
本来、この合わせ鏡は、空間を浄化する目的でここに据えられているものだった。来訪者が必ずここを通過することにより、外界の邪気が内へ持ちこまれることを防ぐ役割を果たすものだった。
けれどその前に立つ時、無限に連なる己の虚像のなかからただひとりの本質を——あるはずもない真の姿を——見出そうとするようになったのは、いつからだっただろう？
己の姿がそこに実在することを確認するようになったのは、いつからだったろう。

報われることはないと知りながら。
そして今……斎伽忍は再び鏡の前に立っていた。
なにもうつさない鏡を見つめていた。
もはやいかなる像も反射されない。
「化生の者か」
空者として生くること定めれば、其は人に非ずして。
異形――。
カメラのフィルムや魔を除く鏡が、その影を拒むのも、自然の道理と呼べるのだろう。
怖れることでも、忌むべきことでもない。
むしろ割りきれるというものだ……。
「だが貴女には似合うまいな」
そう呟いて、忍は片腕を持ちあげた。
ふわりと、鏡の内に指先をすべりこませる。CBSで崎谷亮介を導いた時と、まったく変わらない仕種だった。
湖の水面に触れるような、あたりまえの動きで――鏡の奥のありえない空間に手を届かせる。
そこから……。

ひとつの人影が出現した。

よもや彼女がここに在り、熾烈な激闘のつづく間ずっと眠りについていたとは、雷将勝呂も思い到らなかったであろう。

その女性の名は、工藤珈織。

工藤の姓は世を偽るもの。

正しく伝えられるべき家の名を、九堂という。西方の地、かつての都を本拠とする、純粋な斎伽の血脈。

鎌倉へ流れた七瀬の家に、なんら劣ることなき〝力〟の源。

そして、七瀬の純血から代々の空者『伽羅王』が輩出されると等しく……九堂の血脈に宿るのは……。

「寂しき思いはさせぬ」

いまだ穏やかに眠りつづける彼女を前に、忍はひそかに呟いた。

「道行きには不足あるまい……？」

終章　砕星

呼ばれている……。
遠くから、必死な声で。とても真剣な、痛いほどひたむきな声で。
〝道行きには不足あるまい……？〟
（え!?）
はっ、と亮介は両眼を見開いた。
すぐ間近に見えた顔は――。
「諒……？」
のぞきこんでいるのは、間違いなく水沢諒の瞳だった。
「……え？　どうして……」
「どうしてもこうしてもあるかっ、阿呆っ!!」
思いきり叱りとばされた。何がなんだかわからない。

「大丈夫だよ、水沢」
涼の背後から冷静に告げたのが、十九郎だった。
「この様子なら心配ない」
亮介の目を見て、そう判断する。
空者伽羅王の侵入によって、亮介の精神は破壊される寸前まで行ったのだ。なんらかの後遺症を涼が危惧するのも当然だった。
急なショックに混乱してはいるが、異常を来してはいない。亮介なら大丈夫だ。
それよりも問題は……。
「――忍さんは!?」
不意に亮介が声をはりあげて涼の腕をつかんだ。
「わからない」
乾いた声で涼が答える。
「いなくなった……どこに行ったのかは……」
「そんな……！」
息を呑んで亮介は身体を起こした。ずたずたに崩れたCBSの最上階が、視界に入った。
「そんなのは駄目だ……!!」
今、斎伽忍をひとりにしてしまったら。

彼を自由にしてしまったら。
「どこを捜せばいい？」
間髪をおかず十九郎が問いかけた。
「崎谷君に訊きたいんだ。あの人を止めるにはどうしたらいい？」
「……」
亮介は唇を震わせた。
（そんなこと）
わかるはずがない。自分にも。だがそう答えることはできなかった。
目の前にいる二人がどれほど斎伽忍の身を案じているのか――それを知ってしまったら。
そしてこの危機感が全員に共通するものである以上。
浮かされたように亮介は視線を動かした。何か、手立てがあるはずだ。何か。
（！）
ザッ、と膝をひきずって亮介は移動した。
すぐ傍らに、銀の光がのぞいていた。まさかと思いつつ亮介はそれに手をのばした。
「……牙……！」
見誤りではなかった。
そこにとりのこされているのは、銀青色の剣。

こんな所に最大の武器を……他でもない天冥の剣を、あっさりと振り棄ててゆくなんて。

斎伽忍はいったい、どういうつもりで……！

「牙!!」

化身した〈使〉の名前を、亮介は呼んだ。全身の力をこめて。

助けてほしい。永遠の忠誠を彼へ捧げている〈使〉の牙ならば、きっとできる。きっとまだ方法はある。

「牙……!! 牙がいなかったら、忍さんは、本当に……」

天空が轟いたのは、その時だった。

前触れもなく、一度きり、鋭く雷光が走り——。

暗雲に覆われた空がふたつに裂けるのを、彼らは見た。まるで神の力で左右に分かたれた大海のように。

轟きは、巨星が砕ける音だった。

愕然と上空を見つめた亮介は、次の瞬間、ハッと視線を元の位置に戻していた。

蒼ざめた光がふくらみ、そこにはぼんやりと新たな姿が現れようとしていた。焦点の定まらない、メタモルフォーゼの完了しきれない姿だ。

それは亮介のよく知っている、口数の少ない、物静かな青年の像。

牙の本質を示す姿、である。

だがそこに見える彼は、何故かひどく苦しげな表情をしていた。これほど辛そうな牙を前にするのは、亮介も初めてだった。

「牙……？」

「……どうか……」

彼の低い声は、聞きとれないほど嗄れてしまっている。

「どうか、あの方を……救って……」

「牙!?」

手をのばしても触れることができない。実体を保っていないのだ。亮介は戦慄を覚えた。牙が——こんな姿になってしまうのは——。

「どこにいるんだよ、忍さんは……!?」

「……部屋に……」

耐えきれず顔を伏せながら、牙が答えた。

「ご自分の、お部屋に……」

「水沢」

すかさず十九郎が諒をふりむいた。

「行くんだ、この内で水沢がいちばん速い」

「——承知」

頷いて、諒がその場を駆け出した。それを見送り、そして十九郎は再び伽羅王の〈使〉に目をやった。

「牙……!!」

亮介が悲痛に叫んだ。消えてしまう……!

失われてしまう。不安定な輪郭がさらにぼやけて、青年の像は完全に空気に溶けこんでいった。何かを伝える声だけが、かすかに……。

〝あの方を……〟

かつん、と目の前に小さなかけらが落ちた。亮介は目を瞠った。

水晶片?

残ったものはそれだけだった。

「あ……」

亮介は震える指をのばし、それを握りしめた。他にはもう何もできなかった。

十九郎も沈黙していた。ただ、ひたすら、凍りついたように。

＊　＊　＊

エレベーターは停止してしまっていた。

マンションの電源すべてが失われているのだ。落雷の影響とばかりは思えなかった。真っ暗な階段を、諒は九階まで一気に駆けあがった。

ひどく寒い……。

ここにはもう誰もいない。慣れた感覚はそう教えた。

先回りして逃げようとすれば、忍にはいくらでもその手段がある。

わかっていたが、諒はさらに前へ進んだ。何故そうやって走ってしまうのか、自分でもはっきりと理由づけることはできなかった。

（やめておいたほうがいい）

ふと、そんな思いがひらめいた。

（たどりつかないほうがいい）

何だ……？

けれどすぐそこには、目指す扉がすでに見えているのだ。のばした腕は勝手に、鍵のかかっていない黒いドアを開いてしまう。もう遅い。頭で何を考えたところで。

「！」

その場所で、諒は息を呑んで立ちすくんだ。心臓が止まった。

鏡が。

壁の両面を占めているはずの合わせ鏡が。

（どうして）

巨大な鏡は、完膚なきまでに打ち砕かれてしまっていた。

こなごなに散った破片だけが床を埋めていた。

普通の方法で、ここまで完全に二枚の鏡を粉砕できるものだろうか。

居間へつづく扉は、ひらかれたままになっている。

その先に何があるのかは——わからない。

「……」

何故、そこで立ち止まっておかなかったのだろう。

スニーカーで鏡の破片を踏みしめ、諒はゆっくりと扉の内側へ向かった。何かに招かれるような……導かれるような思いだった。

つい先刻まで亮介と二人で語っていたのが、確かに、ここなのに。

どうして今は。

こんなに。

静まりかえった室内を、諒は見渡した。別に、目的があったわけではなかった。

見出したい姿が、あったわけでは。

一発の弾丸のように、その光景は諒の視界に撃ちこまれてきた。抗うすべはどこにもなかった。

淡い影が落ちる、窓際の床の暗がりに。
あざやかに白く映えて、投げだされた彼の腕。
足音をたてず、諒はそっとブラインドの下まで歩み寄った。
美しく眠る彫像が……そこには横たえられていた。
この世のものと思えない、神がかった美貌の……。
「……忍？」
諒が呼びかけた。
かぎりない静寂だけが、その声に応えた。それはひどく安らかな、そして残酷な沈黙だった。

――つづく――

『天冥の剣』第二回緊急対談

《水沢諒・七瀬冴子編》

（作者注・ここから先も本編の内容を忘れてからお読みください）

水沢諒「……」

七瀬冴子「……」

諒「……だがしかし」

冴子「何よ」

諒「だがしかしっ！」

冴子「だから何なのよ!?」

諒「この非常に厳しい状況においても、しかしそれでもっ、対談はやらざるをえないっ!!」

冴子「やらなくていいわよ、あんた帰ったら？」

諒「……あっさり言うけどね、おまえさん……。この期に及んでも作者があとがきを書かんと

言い張っておる以上、我々が喋らなかったらここから十ページ真っ白になるんですけど」

冴子「別にあんたじゃなくちゃいけないって理屈はないじゃないのよ。あたしは対談するなら亜衣ちゃんとがいいって言ったのにっ、強引に出てきたんでしょ、あんたがっ」

諒「ちがうっ！　これは何かの陰謀だっ!!　気がついたら他の皆さんは全員みごとに逃げていたのだっ!!　そもそも三部作のどまんなかで、楽しく陽気に語りあえる状況をこの作者が用意するはずがなかったのだからして……なんか俺、すごーく騙されたような気が……」

冴子「亮介ちゃんは勝手に一巻のほうで出ちゃうし」

諒「あの人はいつもおいしいところを取っていくのだよ……だいたいですねえ、一巻では対談で二十ページも使ってるんですよ、今回その半分ぽっきりですよ、おまけに相手はこれだし」

冴子「相手が何ですって、えっ!?」

諒「いやあ、ようやく出ましたね、二巻が。待たされたよねえ、五か月も」

冴子「あんたねえ……もうちょっとマシな話題転換、できないの？」

諒「少しはまともなこと喋らんと、また『無駄な会話ばっかりやってないで本筋を進めてください』なんてお手紙もらっちゃうでしょうが」

冴子「本筋ってものを誤解してるんじゃないの、その人？　どうでもいいけど」

諒「その冴子さんの鋭い舌鋒を前にするのも久しぶりですよ、私は……」

冴子「――そうっ、そうなのよ!!　そうなんだってば!!　ここまであたしの出番が少ないのっ

て記録的だと思わない!?　いつになったら活躍するのかしらってずっと待ってたら二冊ぶん終わっちゃったわよ、どーしてくれるのよっ!?」

諒「あんたはいーでしょーが、漫画でさんざん暴れてたんだから」

冴子「やっぱりこの可憐なルックスが少女漫画には不可欠なのよね」

諒「んで今回の本で『地涯篇』が終了したわけだけど、次はやはり『天冥篇』になるであろうという予測にまちがいはなかろうと」

冴子「……思いっきり無視したわね……」

諒「おや、何かおっしゃってましたかね。いやー近ごろ諒ちゃんの耳ってば正直で」

冴子「どう考えても口は正直じゃないわね、口はっ!!　――えっ、『天冥篇』って一冊で終わるの？　すごく無謀な予測じゃない、それって？」

諒「まあ『ディアーナ』後編のときも1冊でおさまるのかと危惧されつつ何とかなったという前例はありますからねえ」

冴子「次も五か月後なんてごめんだわよ、あたしは」

諒「誰も五か月後になればいいなあなんて思ってないと思うぞ。作者も含めて」

冴子「（声をひそめる）でもこの本、たしか年内に出るとか言われてたのよ。誰もそれが二月になればいいなあとは思ってなかったはずなのよ」

諒「……そ、それは」

冴子「よりによって二月よ。受験生の人に申し訳ないと思わないの？」

諒「いやっ！　すべての受験生の人に告ぐっ、俺はみんなの味方だっ!!　がんばって戦ってこいっ!!　結果も大事だが自分らしく戦うことがまずいちばん大事だ!!　健闘を祈るっ」

冴子「あんたも早く『突っ走って返り討ち』のパターンから脱出しなさいよ」

諒「……。若木さんに言いなさい、そーゆーことは」

☆

諒「しかし『天冥の剣』の正体を言い当てた人、結局いなかったなあ……どこまでぶっとんだ推理が来るかと期待して待っておったのに」

冴子「時間だけはたっぷりあったのにねえ」

諒「危険な発言は控えましょーね、冴子さん……。いや、ひとりだけ、『誰の』剣かっつーことを、正解した読者さんはいたんだが……惜しくも『誰が』天冥の剣なのかってとこまでは出てこなかったし」

冴子「みんな剣の正体どころじゃなかったみたいよ、要するに」

諒「お手紙の大半はき……もとい和泉くんのファンで占領されてました。いいけどね、別にね……本当いうと、もうひとり倒れてた人がいたんだけど……ま、いっかあなんて……よろよろ

よろ」

冴子「冗談じゃないわよ、来てたわよ、抗議のお便りが山ほど。鷹木文彦ゆるすまじって」

諒「鷹木文彦氏!!　とか、本家の皆さん、とかに非難が集中するのは、まあ自然の流れというか普通のパターンというか……ですけどねえ……」

冴子「あとはやっぱり、強かったのは『冴子さんの出番がないっ!!』っていう、この声よね」

諒「まあ、それはそれとして……」

冴子「何よ、言いたいことがあったらさっさと言えば?」

諒「うーん……っていうか……いや多分、二巻を読めば俺の気持ちはわかる、と思うから言わない。しかーし……一巻が発表された時点で、不当に非難された人が何人かいたよーな気がする……釈然としないんだよなー」

冴子「この行き場のない憤りをどこにぶつけたらいいの、あっこんなところに十九郎くんが、そうよあなたのせいよ、という発想だったんじゃないの、あれは」

諒「ぶつけられたほうはどうしたらいいんだっ」

冴子「作者に押しつければいいのよ」

諒「あああああっ」

冴子「でも亮介ちゃんとかだったら、どんなふうに攻撃されてもやたら謙虚にうけとめそうだけど……十九郎くんって、黙って聞いておきながら実は、誰が何を言ったか全部おぼえていそ

うじゃない？」

諒「ちょちょちょちょっと待ちなさいっ。そっそういう恐ろしいことを口に出してはいかんっ」

冴子「やっぱりねえ、相手は選ぶべきだと思うのよ」

諒「……なんたって指を鳴らして『無礼者』発言の人ですからねえ……」

冴子「あっ。今なにか言った？　密告してもいい？」

諒「言ってないっ。言ってないっ。なんっにも言ってないっ」

☆

冴子「よく考えたらあの人も受験生よ。大っ変よねー、本編はいまだに五月だけど」

諒「はて……今回の本はどこが『ハイスクール』オーラバスターだったのだろう……」

冴子「高校生活のカケラもないわね、まともに学校に行ってるのって亜衣ちゃんくらいだもの」

諒「どっちかっていうと、今回は……六本木関係というか……」

冴子「港区に終始してるわよね。ボディコンだし、ディスコだし、プワゾンだし」

諒「はっきし言っておまえの管轄外だな」

冴子「失礼ねええっ、女は磨けばどーにでもなるわよっ」

諒「化けんでいい、おまえはっ！」

冴子「なんでよっ!?」

諒「余計な男が寄っ……。じゃなーくーてー、さて、ちょっと地理のお話でもいたそうかと」

冴子「……なに強引に話題をひんまげてるのよ。地理？　それって日本地理？」

諒「いや、けっこう都内の地図を片手にオーラバスター読んでる人って多いらしくて。別にその土地にくわしくなくても読めるとは思うんだけどさ、基本的な地名くらいつかんでおくと読みやすいかなと」

冴子「そういうものかしらね。ある程度、舞台は限定されてるほうよね、この話」

諒「基本的にはＪＲ中央線。中野に亮介くんの家があるでしょ。あと神原さんちも近くでしょ。吉祥寺が高陵高校で、立川に里見さんの祥英高校があって、三鷹に片桐さんちがあって、荻窪が松田瑞穂さんでしょ、たしか」

冴子「新宿、渋谷界隈も多いわよね、なにかと」

諒「新宿西口には和泉くんの学校があってだね、で渋谷と原宿と表参道のどこにでも出られるとこに和泉くんのお宅があるわけだ。渋谷から東急東横線で自由が丘まで一直線に行けるわけだけど、ここが里見さんのお宅で、だからやたらと渋谷が出てくるんだね、この話は」

冴子「変わったとこだと、東京とか上野がたまに出てくるわよ。誰かさんがよく長距離の特急

列車に乗ってお仕事にでかけるもんだから」

諒「どーせ俺は飛行機が嫌いですけども。ええとそれで、問題の六本木CBS、これはわかる人にはわかりきってるだろうけど六本木にある某テレビ局……あそこがモデルになってるはずなんですが、おかしいなあ、これってアークヒルズなのか六本木センターのほうなのか……」

冴子「どっちでもないのよ、きっと」

諒「すっごく明快……。あと、ずっと『六本木のマンション』と言われつづけている例のマンションは、実は麻布台にあるんだよね。たいした違いはないから六本木でいーや、と作者は考えたらしい、が、すると赤坂も西麻布もぜんぶ六本木か、みたいな」

冴子「やりかねないわよ、この作者。まあ、きっと『麻布のマンション』が別にあるからまぎらわしくないように『六本木』にしたんだろうけど」

諒「しかしそろそろ舞台が東京だけで収まらなくなるだろう……。大丈夫かなあ、この調子で」

冴子「意味ありげに言ってるけど、そろそろって何よ?」

諒「だって『天冥の剣』が終わったらオーラバスター第一部完了、第二部スタート、という運びになるわけだから。当然、スケールアップするだろうし」

冴子「えっそうなの?　いつの間にそうなってたの?　一部完!?　いきなりじゃない!?」

諒「それ、かーなり前からもう決まってるんですけど。だから他のシリーズも長々と中断しつ

つっ、凝り性の作者がさらにさらに凝りまくって『大冥の剣』に全力投球してるんでしょうが。軽い気持ちで読んじゃいけませんよ、これは。連日ホテルにカンヅメしまくり、パーティーとコンサート捨てまくり、各方面に礼を欠きまくり、人道を外れまくりで書いて書いて、ふらふらとカイロプラクティックにでかければ先生に『あなたの背骨はひどいですよ、生命にかかわりますよ』と脅されるわ、あまりの肩凝りに指圧をためば『凝りすぎて指が入らない』と嘆かれるわ、酒も煙草もやらず、ただ音楽と漫画と猫だけを心のはげみに生きておるのに読者からは『遅い遅いやれ遅いあんな極道な続き方でよくまあこれだけ待たせるもんだ正気を疑っちゃうわ内容なんかもう忘れちゃうわ早くして』の大合唱だし、雨にも負けず風にも負けず、出し惜しみなんぞまったくしないで、ひたすら良いものを書けるようにと、未熟な自分を向上させんがためとりくんだ仕事には『他のものは書かなくていいからこっちだけを書け』だし、てめえらそいつは結果を見てから言いやがれ、数こなしゃ中身はどーでもいいのかっ、スカスカになるぞ、それでもいいのかっ、いやよくない、私が嫌だ、とふんばってじりじり書きつづけた原稿なのだからして、読み終えたのちにその人なりの批判批評をくだすならともかく真摯に読みもせず漫然と遅い遅い遅いなどとくりかえしていてはいけないのだっ」

冴子「……見てきたそのまんまって感じのセリフだわね……」

諒「きー……じゃなくて和泉くんがおっしゃるところの正直者の意見パート2ってやつですか？　だって亮介くんってば反論しないんだもーん、やさしくってさああっ」

冴子「結局あんたたちって、いくら結託してもどっかでズレるわね。……でも、そういえば大丈夫なのかしら、次の本で第一部が終わって、第二部が始まったらレギュラーメンバー総入れ替え、なんてことになってたりしたらどうするのよ？」

諒「は!?」

冴子「第一部完って、要するに何なわけ？　何がどうしたら完結になるわけ？　なんだか怪しいわよ、それって……」

諒「いや……しかし、いくらなんでもそこまで」

冴子「あんた、今の本編の状況、忘れてないでしょうね!?」

諒「――ちょっと待て!!　一瞬きっちり忘れてたのにっ!!　思いっきりっ!!」

冴子「作者の言うことに従順すぎるわよ、あんたはっ!!」

諒「大丈夫!!　冷静に見て、こんな序盤戦でレギュラー入れ替えはありえないっ」

冴子「絶対!?　本当に!?　あんた、非常に厳しい状況だってこの対談の頭で言ってるじゃないのよ、自分でっ!!　どういう意味なのよ、あれって!!　ことは重大なのよ、あたしたちの命運がかかってるのよ!!　今まであえて話題を避けてきたけど、この本のラストの……」

諒「やめろーっ!!　どうしておまえはーっ!!」

冴子「なにごともはっきりさせないと気がすまないのよっ!!　わかったわ、もうこんなとこでもたもたしてらんないわっ。あたしは戻るわよ、お先にっ」

涼「ひとりでさっさと退場するなっ!!　あっ、待てっ、これだけは言わせろっ。前田様、前田珠子様、暖かいご声援ありがとうございましたっ、涼ちゃんこれからも頑張りますっ」

冴子「選挙運動やってんじゃないわよっ」

涼「ちがあああうっ!!」

第二回緊急対談・おわり

――以下続刊――

わかぎ・みお
1968年12月2日、埼玉県生まれ。射手座、A型。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。現在、特に傾倒するマンガ家は喜田雅彦氏。仕事の合間に猫2匹と格闘する日々をすごしている。苦手なものは料理。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ（前編）（後編）』『エクサール騎士団[1]、[2]』『XAZSA Ver. 1～2』『天冥の剣[1]』などがある。



天冥の剣[2]

COBALT-SERIES

1993年2月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（3230）6268（編集）
電話　東京（3230）6393（販売）
（3230）6080（制作）

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1993
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611721-5 C0193

〈好評発売中〉

天冥の剣 1

ハイスクール・オーラバスター

若木未生

イラスト／杜 真琴

我は、伽羅王—。
選ばれた宿命を
もつ、空者総帥。

六本木を中心に「吸血鬼殺人」と呼ばれる通り魔事件が発生。新人TVレポーターの工藤かおるは、事件に関連ありと思われるモデル斎伽忍の調査を始める。一方、諒と希沙良は…。

